

この素晴らしい文豪に祝福を！

ぴんくのおくま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※このすばと文ストのクロスオーバーです。

俺の名は佐藤和真。魔王を倒し、勇者と呼ばれ崇められるようになった今……俺のパーティの女子達が俺にベタ惚れでなあ！ そのことを指摘したら、あるメンバーに爆裂魔法を撃たれたんだ！ 凶星すぎて恥ずかしくなったのかもしれない。ツンデレも困りものだ、まったく。

しかし、どうして日本に来てしまったのやら……しかもこの世界は俺がいた日本とは違うらしい。異能？ 探偵社？ マファイア？ なんだそれ！

俺はどこだろうと構わない。いつもの通り、大嫌いなパーティメンバー達と馬鹿やって生きていくだけだ！

◇追記◇ 時間軸についての指摘があったので、目立つココで少し触れておきます（今更？）。

このすばは魔王を倒した後、つまり完結後。文ストは、ウイルス異能事件の後で、天人五衰にはまだ入っていないという感じです。本編未読の方にとってはネタバレになる情報も含まれますので、本編読んでないっ、ネタバレは嫌！ という方は読むのを控えた方がいいかもしれません。

目次

序章

第1話	この奇妙な出会いに爆炎を！	1
第2話	この狡い冒険者に制裁を！	8
第3話	この駄女神に説教を！	14
第4話	このド変態と潜入を！	19
第5話	このスキルバトルに隠匿を！	24
第6話	この可哀想な重力遣いに助っ人を！	30
第7話	この奇妙なコンビに不信感を！	34
第8話	この双黒に悪運を！	38
第9話	この素晴らしい一日に祝福を！	44
第10話	魔都・横浜のトラブルメーカー	51
第11話	異世界からの訪問者達（クラッシュヤーズ）	54

第一部

第12話	違法祝宴（パーティー）と冒険者達（アドベンチャーズ）	58
第13話	主催者探しの前奏曲（プレリユード）	63
第14話	天界から来た幸運の女神（レディーラック）	68
第15話	海の向こうの迷探偵（ディテクティブ）	73
第16話	見えない敵との騙し合い（ライアーゲーム）	78
第17話	インカム越しの愛情表現（コミュニケーション）	83
第18話	自殺希望の聖騎士（クルセイダー）	89
第19話	重力遣いと一夜の恋（ワンナイト）？	94
第20話	世界を救った冒険者達（ヒーローズ）	99

第21話 最後はやっぱり爆裂魔法（エクスプロージョン）！

103

第二部

第22話	法則とともに歩く男	112
第23話	人はまずリア充に寛容になる必要がある	116
第24話	きらびやかでもないけれど	121
第25話	雨ニモ負ケズ野菜ニモ負ケズ	125
第26話	いつまでもシンプルで	129
第27話	争われない事実	134
第28話	汚れつちまつた…	139
第29話	歪んだ門	144
第30話	眠りの触手の彼方に	148
第31話	光と風と爆裂魔法	153

第三部

第32話	この孤独な青年にコミュ障を！	157
第33話	この哀れなぼつちに厄災を！	161
第34話	この愚かなる嘘に雷を！	166
第35話	この双つの黒に優しさを！	171
第36話	この爆裂探偵に賞賛を！	175
第37話	この不幸な少女に幸運を！	180

序章

第1話 この奇妙な出会いに爆炎を！

俺の名は佐藤和真。

元・日本の引き籠もり高校生、現・魔王から異世界を救った勇者の中の勇者である。

そう、勇者。勇者になったからには、チート魔剣士のミツルギ以上の待遇が必要だ。あの男はいつもいつもパーティの女二人を誑しているので、俺もパーティの女三人を誑かさなければならぬ。

いや、パーティの女三人が俺に惚れなければならぬ！

「カズマさーん、顔がキモイんですけど。イヤらしいこと考えてる顔してるんですけど」

「いつ、イヤらしいこと……!? さてはカズマ、私の熟れた肢体を見て、脳内でこの身体を好き勝手する妄想をしているのだな！ なんてけしからん、やれるものならやってみろ！ 私はそんなものに屈しない!!」

「ダクネス、私の男に色目使わなでください。というかそんなドMアピールじゃ、色目にすらなってませんけどね」

「ダクネス、今お前、やれるものならやってみろって言ったな？」

「えっ」

何故かめぐみんとダクネスが引いている。いや、ダクネスに関してはお前が言い出しっぺだろ。本人が引いてどうする。

俺が手をワキワキさせながらダクネスとの距離を詰めると、ダクネスは段々と顔を赤くし、めぐみんも別の意味で顔を赤くした。

「カズマっ！ 私という女がありながら、貴方は一体いつまでクズマでいるつもりなのですか！」

「よーしめぐみん、それならいい方法がある。ダクネスを突き飛ばして俺に抱き着いて、『好き勝手するなら、私の身体を——』」

「エクस्पロー……ジョン!!」

……消し飛んだ屋敷を建て直すために、悪魔とリッチーに大金を支

払ったのはまた別の話である。

☆

「ん……？」

うららかな春の陽光が瞼をチリチリと焼き、俺の意識がゆっくりと覚醒していく。

えーっと……確かめぐみんな俺のセクハラに激昂して屋敷内で爆裂魔法をぶっ放して……それで、どうなったんだっけ？

この感覚……まさか、俺死んだ系!?

勢い良く上体を起こすと。

目の前に広がっていたのは、懐かしき日本の公園だった。

「うお……おおお……!?!」

間違いない——西洋感が消え、無機質な高層ビルが建ち並び、その隙間に植物が植えられていたり、今俺がいるこのように公園があったりと、文明九割自然一割の先進国。

で、俺の格好は元のままだ。

「はあ……？」

どうということだ？ 俺は死んで、日本に戻ってきた？

しかしだとすると、エリス様との恒例の会話が無いのは違和感がある。死んでいないが、日本に来た——

「あつ」

……閃いてしまった。

推測だが、俺はあの時、めぐみんな撃った爆裂魔法の衝撃で、日本に飛ばされてしまったのではないだろうか？

狭い室内で撃ったのだから、受ける衝撃の威力は並大抵のものではないはず。

というわけで、早速試してみることにする。

『クリエイト・アース』

呪文を唱えると、掌にざらりとした感触が生まれた。……スキルは健在、か。

懐をいじってみれば、冒険者カードも、武器も健在のようだ。

しつつかし、どうやって帰ればいいんだ？ 傍にアクア達がいるわけ

ではないから、アクア達が飛ばされた可能性は低いと見える。
暫し熟考した俺は、ぽんと太腿を打って立ち上がり。

「……スキル使って憂さ晴らしでもするか！」

*

「よーし君達、俺と勝負しよう」

「何してんだよーにーちゃん」

「やばい人だー！」

「おい、今やばい人だつったの誰だ」

公園のガキ共を集めた俺は、片手に『バインド』用のワイヤーを持つて勝負を持ちかけていた。

勝負内容は至って簡単——「俺に捕まれば負け、捕まらなければ勝ち」である。

「えー、にーちゃん足遅そうだけどいいの？」

「おれ、大人のプライドを傷つけちゃいけないっておかーさんに言われた」

「なんでお前らはさつきから俺の扱いが荒いの？ そろそろ泣くよ？」

煽ってくるキッズ達に簡単なルール説明（この公園内から出たら失格の鬼ごっこ）をし、十秒数えてやる。

……ふっ、全員俺のスキルの前にひれ伏すがいいわ。

え？ 大人気ない？ 大人のプライドは傷つけちゃいけないけれども、子供のプライドを傷つけちゃいけないなんて聞いたことありませんね。

遊具の上から、ベンチの上から、各々煽る体勢を取っているそいつらに向けて。

『クリエイト・ウォーター』！

「!?」

俺は遠慮無く、勝負開始と同時に水流を子供達に浴びせかけた——

！

「……うえーん……うえーん……服びしょびしょ……」

「目が……目が痛いよう……」

「にーちゃん、このワイヤー取れないんだけど!？」

「はっはっは、安心しろ。俺を散々馬鹿にしたことを謝ったら取るよ」

「っていうか最初に勝負仕掛けてきたのお前だろー! ジゴウジトクだろー!」

『『クリエイト・ウオーター』!』

「うわああああん!!」

そう、こいつらは子供といっても中学生程度の歳はある。だから、傍から見たら俺がシヨタをいたぶっているなんて光景にはなっていないはずだ。仲良く遊んでいる兄弟のように見えるだろう。

リーダー格の少年のワイヤーを解いてやると、ガキグループは「イノウシャだ、イノウシャだ」などと泣き叫びながら一目散に逃げていった。ざまあみろ。

それにしても、ここに来た時には朝十時頃だったはずが、遊びに夢中になっている内に正午になっていた。

……腹減ったなあ。

空腹を訴えてくる身体に鞭打って公園を後にする。さあ、一体どうしたものか。

「エリス」なら少し持っているが、生憎「円」は持っていない。……腹ごしらえができない。

どうしたものかと再び熟考モードに入ったその時。

「キミ、ちよつといいかな?」

ポンポンと肩を叩かれ振り向くと、そこには――!



「ちよつとちよつと、そこの白髪のアナタ!」

「……?」

白。それは日本人の髪の色としては珍しく、僕自身、自分以外に白髪の日本人を見たことがない。だからそう呼ばれた時、間違い無く僕だと確信して振り返ることが出来ただけれど……。

「こっつて日本? ねえ、こっつて日本よね?」

「そうですね……」

そこに居たのは、僕なんかよりもっと珍しい格好をした女の子だった。

長い青髪は、一部を頭の上でクルリと輪の大きなお団子に。青いノースリーブシャツに、水色のとてつもなく短いフリルのスカート。女の子は外国から来たのかも知れない。大きな瞳をキラキラ輝かせながら尋ねるその姿は、まるで年端もいかない幼い子供の様で。綺麗な顔立ちとのギャップも相まって微笑ましい。

「よし、決めたわ。貴方、女神であるこの私に出会えた幸運を噛み締めながら、私を家に連れて行きなさい」

「……ん？」

「微笑まし……微笑まし、い？」

思わず彼女の顔を二度見すると、女の子は両腕を組んでふんぞり返り、ニンマリと自信気な笑みを浮かべた。

「私の名はアクア。水の女神アクアよ。……汝、私を家で養えば、やがて大きな恩恵を受けられるでしょう」

「すみません、そういうの間に合ってるので」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 水の女神よ!! こんな、養わない手は無いでしょ!？」

ツツコミどころが多すぎてどこからツツコめばいいのか分からなくなっていると、女の子——アクアちゃんはとうとう地面に寝転がって暴れ出した。

「お巡りさあああああん!! この白髪のがキが女神を虐めましたああああ!!」

「あああああもう!! いいですよ、いいですからちよつと来てくださいっ!!」

……周囲の視線が痛い。

こうして、僕と女神（自称）の同居生活が始まったのだった。



「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者!!」

両手をいつもの形にして決めポーズ。声の大きさ、高さ、角度——

完璧だ。

その台詞から少し間を置き、私は目の前の少年の顔を見て、

「……その格好、とてもかっこいいですね」

「……は？」

黒い帽子に、肩に羽織っただけの大きな黒いジャケット。黒のベストにスキニーパンツという全身黒づくめの少年に賞賛の言葉を述べた。色の配分はあまり良くないかもしれないけど、黒一色というのも中々いい。今度私も赤一色にしてみようか。

私の言葉を聞いた少年は、青い瞳を大きく見開くと。

「……最近徹夜漬けだったしな。疲れてるのか……家帰って寝るしかねエな」

「いやいやいやちよつと待ってくださいよ!!」

心做しか若干引いた表情で背を向けようとした少年のジャケットの袖を捕まえた。

——屋敷の中で爆裂魔法を撃った直後、いつもの通り気を失ってしまった私。しかし、目が覚めると薄暗い路地裏にいた。

もしか、どこかの男が魅力溢れる私を攫ったのでは……!? と動揺している、向こう側から誰かが歩いてきて。それがたまたま、私と同じくらいの歳の外見の、それもとてもなくかつこいいいファッションの少年だったので、同族意識から思わず名乗りを上げたという訳だ。

「ンだよ……悪いが、手前みたいな格好の餓鬼に服のセンスを褒められたくはねエ」

「どうしてですか！ 私の服と貴方の服……系統は似ているでしょう!?!」

「脚に包帯巻いて杖持つてる奴に言われたかねエわ!! お前は餓鬼だからまだいいが、大人になってまでンな格好してたら引かれるぞ?」

「おい、さつきからガキガキ言っているが、誰のことを言っているのか聞こうじゃないか!」

掴みかかるもするりとかわされる。くっ、中々の手練!!

暗い路地裏でジリジリと睨み合い——ふと、彼が表情を緩めて言った。

「……やめだ、やめ。餓鬼相手に喧嘩なんざみつともねえ」

「だからっ、私も貴方も同じくらい歳のじやありませんか！」

「次言ったら埋めるからな。……まア、もう出会うことも無いだろうが。じゃあなクソガキ」

「ちよつと待ってください……！」

少年の背を見ながら、頭に馬鹿な考えが浮かんだ。

魔力が漲っている感覚。……まさか、魔力が回復した？

そうと分かれば一か八かだ。私は少年の上空に杖を向けると——

！

「エクスプロージョンっ!!」

本日二度目の爆裂音が大気を震わせた。

第2話 この狡い冒険者に制裁を！

俺の名は佐藤和真。

めぐみんの爆裂魔法の衝撃でなぜか日本に飛ばされ、憂さ晴らしに子供と遊んでやった直後――

「待てこの野郎!! 街中で異能の乱用をするのは禁じられているんだぞ!!」

「なんなんだよ一体……!」

スーツ姿の男に追いかけています。

イノウウの乱用? 俺が乱用したのはスキルであってイノウウとやらでは無いのでセーフでは?

最初にそう説明したが、「屁理屈言うな」と一蹴されてしまった。この野郎!

しかも最悪なことに、

「カズマっ、なんなんだこの状況は! そうか、恐らくこの男は私を追いかけて捕らえ、「反省しろ」と言いながら私に様々な辱めを……! くっ、やれるものならやってみろ! 私はそんなものに屈しは――!」

「この変態女! 男性から『変なことを言いながら追いかけてくる金髪の女がいる』と泣きながら通報を受けて来てみれば、こんな意味不明な女が……! 全く今日はどうなってるんだ!」

「この馬鹿ドM! お前は一体何をやってんだ!」

「お前もだ畜生おとおお!!」

……まあ、その通りにダクネスは痴女行為を働いていたらしく。俺が声をかけられた時、偶然現れ、二人揃って追いかける羽目になったのだ。

ここで捕まったらどうなるか分からない。俺は逃走スキルをフルに使って逃げ続ける。ダクネスは持ち前の体力で必死に俺の後を着いてくるが、鎧がかなり重そうだ。

「ダクネス、その鎧を捨てろ!」

「いつ、嫌だ! 鎧が無ければ私はクルセイダーでは無いじゃない

か！」

「変なプライド持ちやがって……！」この女はこれだから！

もう逃げるのも限界な気がしてきた。スーツ姿の男は身体能力が高いらしく、徐々に俺達との距離を詰めてきている。

……こうなったら仕方がない。

『『バインド』！』

「「なっ……!?!」」

俺が背後に投げた特注ワイヤーが命中し、ダクネス諸共スーツ姿の男を拘束した。

「馬鹿野郎！　なんでお前まで縛られてんだよ!?!」

「すっ、済まない……私のことはいいから、他の二人と合流してくれ！　またいつか会おう！」

凜々しい台詞を吐きながらも、ダクネスの頬は上気している。……もうやだこのDM。

「もう二度と会うことは無いかもな」

「ちよっ、カズマ!?!　冗談も程々に……なあ、冗談だよな!?!　カズマ！」

俺は二人を縛ったままその場から全力で退避した。



「うーん……」

椅子に縛り付けられた私を見て、黒髪の男性は一言。「ちよっと歳をとりすぎかな」

「おい、私が歳をとりすぎとはどういうことか説明してもらおうじゃないか！」

「首領、どうしますか。街中で大規模破壊異能を使用した少女なんですけど」

少年が堅い口調で黒髪の男性に問う。……ロリコンの癖して、このヤバそうな組織の長を務めているらしい。

……あの後。爆裂魔法をぶっぱなしていつも通りぶっ倒れた私を少年が担ぎあげ、超運動能力で建物の屋上を次から次へと飛び移り、この綺麗なビルに入った。エレベーターを見る限り、ここが最上階の

ようだ。

それにしても、大規模破壊……イノウツてなんだろう。私が使ったのは爆裂魔法であって、イノウなんかではないはずなのだけど。

首を捻っていると、首領と呼ばれた男性は苦笑して。

「そんな異能者が居たらとつくに報告が入っていると思うんだよね。……君、名前は？」

「めぐみんです」

「……」二人は顔を見合わせると、目と目で何かを語り合った。

「えーと……めぐみ、じゃなくて？ めぐみに聞こえた気がするんだけど——」

「めぐみんです」

「……」二人の顔が明らかに呆れを含んだそれになる。

「おい、私の名前に何か文句があるのなら聞こうじゃないか！」

「なんでもありません」

……というか、帽子の少年に対しては一度名乗ったと思うのだけだ。まさか、信用されてなかった？

とまあ、なぜか私が名乗ると起こる恒例のイベントはさておき。

首領とやらは矢継ぎ早に私に質問の嵐を浴びせかける。私は優しいので質問全てに真面目に答えてあげた。

「紅魔族です。爆裂魔法が好きで、それ以外の魔法は覚えていません。レベルは現在四十超え、パーティメンバーは冒険者のカズマとクルセイダーのダクネスとアークプリーストのアクア。あっ、ちなみに私はアークウィザードですね。住んでいるのはアクセルという街なのですが、ここはどうやら違う場所のようですね。アクセルへの帰り方を教えてください」

「……」二人は本日二度目の視線会話をを行うと。

「な、なあ、それって手前が創った物語の設定とかじゃ——」

「何を言っているんですか。そういうのが好きな子が紅魔の里に居ますけど、良ければ紹介しましょうか？」

「……いや、もういい。悪かったな」

少年はばつが悪そうな顔で私からほんの少し距離をとる。微妙に

失礼な気がするのには気のせいかな。

そして少年はそのまま首領の傍に行き、何やらひそひそと話し始めた。

結論が出たのか、少年が一步前に入る。

「あー……手前のことはよく分からねえが、一度こちら側に来てる以上、マフィアの一員になってもらおうと思う」

「まふいあ？　なんですかそれ。この組織の名前ですか？」

「その通り。君のその力は、私達、ポートマフィア”に多大なる貢献をしてくれるだろうと思ってる。勿論、異論は認めないよ。宜しいかな、めぐみん君？」

「……ポートマフィアって響き、かつこいいですね」

「えっ」

素直に褒めただけなのに、なぜか二人に引かれた私はおかしいのでしょうか。

……後にこの二人は、「あれは普通怖がるところだ」とか何とか言ってくるのだが、それはまた別の話。



——で、自身を女神だと名乗る変わった女の子を仕方無く社員寮に連れ帰って来た訳だけれど。

「その人は誰」

「ちよ、ちよっと何よ！　私より年下の癖に、脅迫なんて卑怯な真似しないでくれますー!!」

「えーっと……」

案の定、と云うべきか。

アクアさんは、部屋に入った瞬間、鏡花ちゃんの検問（物理）——小刀を首筋に突きつけられる——を受けていた。

騒ぐアクアさんと、静かな殺気を漲らせる鏡花ちゃん。……これはまずい気がする。

「鏡花ちゃん、待って。この人は敵じゃないよ……多分」

鏡花ちゃんの小刀を掴んでそっと下ろすと、アクアさんは青い顔で飛び退いた。

「もう、女神相手になんて乱暴な！ 水溜まりが道路を塞いで通れない天罰を下すわよ！」

「それは天罰じゃなくてただの不運」

「……アクアさん、お願いですから黙ってください……」この人、太宰さん以上に厄介かもしれない。

僕はアクアさんと鏡花ちゃんを連れて茶の間に行き、ちやぶ台を持ってきて三人分のお茶を淹れた。

アクアさんはそれを飲んで一言。

「お湯なんですけど」

「え？ いや、ちゃんとお茶を——って、ほんとだ……」アクアさんの湯のみの中で、水が蒸気を立ち昇らせている。誰がどう見ても白湯だ。

慌てて淹れ直すと、一口啜ったアクアさんが一言。

「お湯なんですけど」

「あの、流石におかしくないですか!？」

「……うふふ。可哀想だからネタばらしね」

アクアさんはケラケラ笑って、鏡花ちゃんの湯呑みに指を突っ込んだ！

瞬時にして鏡花ちゃんの目尻がつり上がったので、「今度橘屋で奢るから!」と云って宥める。……僕のお財布が……とほほ。

「ちよ、アクアさん……」

「私、水の女神だから。どんな液体でも、触れた瞬間に真水にしちゃうのよ」

「……」

敢えて何も云わずに鏡花ちゃんが湯呑みの中身を飲み干し。

「……お湯になってる」

「えっ、でも僕はお茶を……」

「これで分かった？ 私が女神だったこと」

「……」

考えられる可能性はひとつ。……アクアさんが、水を操る異能者であるということ。

鏡花ちゃんと目配せする。考えていることは恐らく同じ。

異能者ならば話は早い。……僕のことを知っていて接近してきた敵かもしれないのだ。

「こんな、何も考えてなさそうな顔をしてるけど、実は敵組織からのスパイかも……。」

「あ、あと、職場も紹介して欲しいわね。流石に無職のままここに居座りたくはないし。良ければ明日にでも貴方達の職場を紹介して欲しいんだけど、いいかしら？」

「……」

……職場を紹介して欲しがる敵も居るなんて、困ったものだ。

僕と鏡花ちゃんは思わず顔を見合わせて苦笑した。

第3話 この駄女神に説教を！

僕の名前は中島敦。故あって――

「ごんの駄女神がああああああ!!」

「あーら万年最弱職のカズマさん、この最強女神アークプリーストに肉弾戦で勝てると思つてー!? ほらかかつてきなさいよ、けちよんけちよんにしてあげるからー!」

「……もういい、こうなつたらお前のゼル帝焼き鳥にして食つてやる」

「えっ? ちよ、カズマさん……? まさか、あんな愛らしいドラゴンにそんなことしないわよね……?」

「いやー、料理スキルがあつて良かった。あんな見た目が可愛いだけの鳥を美味しくするならスキルに頼るしか――」

「うわあああん私が悪かったからあああああああ!!」

……自称女神の女の子と、国木田さんに捕獲された謎の異能者の喧嘩を眺めています。



「こんにちはっ! 私はアクア、女神アクアよ! さあ、アクシズ教徒になつて、私を崇めなさい!」

鏡花ちゃんと僕で協力して、逃げられないように見張りながらアクアさんを探偵社に連れてきたわけだけど。……やっぱりこの人手強い。太宰さん以上に非常識だ。

着いてからもこの様子だし、実は連れてくるまでの道中でも「あ、今から大雨みたいね。止ませてあげましょうか?」とか、「あの大道芸人、下手糞ね! 私の方が上手いわ、見てらっしゃい!」と言つて大道芸に乱入したり。本当に散々だった。その上、この人の場合は太宰さんと違つて本能に正直に生きている感じがするから尚のこと。

……で、社内の人の視線が一瞬にしてアクアさんに向く。当たり前前だ。

「敦君、誰その人。依頼人?」太宰さんが首を捻る。今日は依頼の予定なんて無かつた筈だけど、つて顔だ。はい、依頼じゃないんです。

だから困ってるんです。

しかし無邪気(?)なアクアさんの手前、本心を出す訳にもいかず、仕方が無いので、

「えーと……多分、外国から来たはいいものの、お金も身寄りも無く、偶然通りかかった僕に助けを求めてきた……?」

「じゃあ、出会いの宴会芸ね。花鳥風月〜!」

アクアさんは懐から扇子を出すと、両手に持ってその場でクルクルと回る。派手な扇子の先端から水が飛び出し、探偵社の床を濡らしていく。……どうしよう、本当にこの人、今まで会ったどんな変人ともタイプが違う。っていうかこの手品、どんな仕組みなんだろう。

「敦君、その人本当に身寄りもお金もなくて困ってるの? ……困ってるの?」

谷崎さんの視線が痛い。否、この状況で、僕の言葉に疑念を抱いている人が圧倒的 majority に達している。

どうすればいいか分からなくなって鏡花ちゃんに助けを求めると。

「この人は芸人。芸をさせる為に連れてきたからもう用済み」

「ねえ違うよ鏡花ちゃん、お願いだからそのナイフしまつて!!」

空気を読まずに手品を披露し続けるアクアさん。社員の視線。鏡花ちゃんの殺気。

もう駄目だ、僕はここで羞恥死するんだ——覚悟を決めた、その時だった。

「あああああ、おいこら駄女神! お前こんな所で何やってんだ!」
背後から聞こえた、見知らぬ少年の声。

振り向くとそこには、国木田さんに両腕を拘束された、不思議な格好の少年が居た——。



端的に説明すると。

ダクネス諸共スーツの男を煙に巻いた後、全力疾走の勢い余ってぶつかってしまったこの人が、実はスーツ男の知り合いだったらしく。「特務科殺しとは貴様のことか! ……しかし若いな。ちよつとついてこい」と言っておきながら俺の両腕を凄まじい力で掴んで引っ張っ

た。抵抗して逃げ切れる確証が無かったのでされるがままにしていると、いつの間にかこんなビルの中に連れてこられていたという訳だ。

で。そこで再会した懐かしいパーティーメンバーの一人……駄女神は。

人が！　こんなに！　大変な思い（スーツ男との鬼ごっこ）を！

していたと言うのに！！

「花鳥風月〜！」

「あああああ、おいこら駄女神！　お前こんな所で何やってんだ！」
思わず叫ぶと、アクアが振り向いてニッコリと笑い。

「カズマさんカズマさん、日本人って結構ノリ悪いのね！　宴会芸しても反応してくれないの」

「当たり前だろボケがああああああああ!!」

「きゃあああああああ!？」

馬鹿げたことを抜かしやがる知力ゼロの駄女神の背中に飛び蹴りをお見舞いしてやった。

「痛いんですけど！　ちよつとカズマさん、私に肉弾戦で勝とうって言うのね!？」

……そして物語冒頭の会話に戻り、

「——で？　貴様、街中で異能力を乱用したと聞いたが、本当なのか？」

アクアをゼル帝ネタで論破した直後、俺をここまで連れてきた四角い眼鏡の長髪長身男性が冷徹な視線で俺達を射抜く。ちなみに、俺達は部屋の真ん中に土下座させられ、周りに人が集まるという公開処刑状態だ。

しかし俺はこんなものには屈しない。魔王を倒した最弱職の根性舐めるなよ！

「……ってか、さつきから思ってたけど、異能力ってなんなんだよ」

「それ私も気になってましたー」

俺たちが口々に疑問を述べると、長身の男性は目を剥いた。

「異能を知らんのか!?　ならば貴様が使っていたのは一体……」

「えーとですね、まあ、話せば長くなるのですが……」
面倒臭くなつた俺は、事実を正直に話そうとして――

「待ってカズマ」 駄女神の右手に口を塞がれた。

（おいアクア何すんだ！）

（私、こういう時は敵か味方かも分からない人間に手の内を晒さない方がいいと思うの）

……。

正論っちゃ正論だが。

だがだつたらどうするんだ、と問おうとすると、アクアがニコリと笑つて言った。

「私は水の女神だから、異能なんて持つてないわ！」

「言つてる傍から!？」

まあ、こんな女の戯言だ。信用なんてされないだろうと高を括つていたのが間違いだつた。

「あのう……」 白髪の、不思議な外見の少年が恐る恐る手を挙げ。

「水の女神とかつていうのは分からないんですけど。その……アクアさんは、少なくとも悪い人ではないんじゃないでしょうか」

「!?!」

な……なんだと……!?!

この駄女神を、いいひと扱い……!

ふと隣のアクアを見ると、さも当然と言いたげな表情で頷いている。頼むから何もしないでほしい。

「敦くん、その根拠は？」

「それは――」

敦と呼ばれた少年が、質問を発した包帯だらけの男の人の傍に寄つていって耳元で何かを囁く。すかさず読唇術スキルで会話内容を読もうとしたが、敦はそれを防ぐかのように口元を手で覆っていたので会話内容は分からなかった。

……なぜ、自然にこのような行動が取れるのか。理由はただひとつ。

――この世界の中でも、こいつらが普通じゃない証拠だ。

幸運値の高い俺の勘が言っている。入った時から思っていたが、ナイフを平気で扱う和装の少女といい、俺をここまで抵抗させずに連れてきた男性の手腕、気迫といい……何か「普通じゃない」。アクアの宴会芸にほとんどの人間が呆れていたが、中でも数人……張り詰めた空気を醸し出している人間がいた。

「……つまり、アクアちゃんと少年。君達は行く宛てが無くて困っているということかな？」

包帯の男が立ち上がり、ニッコリと笑って両手を広げる。

……胡散臭い。まるでバニルを見ているような――

「ゴッドブローっ！」

「げぶっ!？」

と思っていると、バニル対アクアの構図が包帯男相手に完全に再現されていた。

「馬鹿、何やってんだ！」

「え？　なんか……悪魔とかアンデッドみたいな邪気を感じたから、取り敢えず天罰を」

「何が天罰だ、今から好意をくれようとしてそうだった相手に向かってー！」

「でもこれが女神の使命なの！」

「……ゼル帝」

「わあああああごめんなさいカズマさん私が悪かったからあああああ!!」

「――国木田君、この二人、警察に突き出そうか」

不穏な空気を纏った包帯男の一言に、俺達は瞬時にスライディング土下座を決めた。

第4話 このド変態と潜入を！

夜の帳が降りる頃――

「なあ……俺が間違ってたのか？」

暗い室内に俺の独白がポツリと落ちる。……答える者はいない。そう。俺が間違っていた。ここ数日の組織の変化に違和感を感じるべきだった。

――だって、明らかにおかしいだろう。

「はあ……はあ……！ こ、こんな暗い所で敵が来てしまったら、私は、私は一体、どんなことをされてしまうんだ……っ！」

「ここで外に向けて爆裂魔法を撃てば、どれだけ気持ちが良いのでしょうか……！」

「……お前ら、頼むから黙ってくれよ……」

変なことを語り出す少女に加え、立原が道端で拾って来た鎧姿の金髪ド変態女までもがポトマフィアに加入するなんて。

しかも、俺とその二人で敵組織の本拠地に潜入しているなんて。



めぐみ……めぐみんとの出会いはあんな感じだった。

ダクネスとの出会いは実に単純。執務室に戻ると、鎧を着た金髪的女を抱えた立原が立っていたのだ。

「あー……立原、女連れ込むんならここじゃなくて自分の家にしろよ？」

「だから違いますって！ 首領命令で……」

「はア？」

何でも、不思議な力を感じる女が倒れていたから拾って首領に届けると、「その子もマフィアに入れるから、世話は中也君にしてもらいなさい」と云ったとか。

……って、その子「も」？

「チュウヤ、遅いじゃないですか！ 私はお腹が空いて死にそうです。早くご飯をください！ っご飯にしましょうー！」

「なんで手前は此処にいるんだあああああ!!」

その後、すったもんだの末に根負けした俺が、執務室に鎧の女とめぐみを居候させることになり。

というか首領は何を考えているのだろう。俺は男だ。女二人……いや、女をここに置くのは危険だと思わないのだろうか。まあ忙しいからそんなことをする暇はないと思うが。

「おい、どうして女一人とカウントしているのか聞こうじゃないか」「手前はいつから人の回想に割り込めるようになったんだ」

現在、俺達は目的の部屋——横浜に新型の麻薬を蔓延させている組織の本部ビルの社長室を目指して、一先ず途中の書庫に忍び込んだところだった。

しかし、ダクネスは変な妄想をして頬を上気させ、めぐみんはめぐみんで窓の外を見ながら物騒なことを呟いている。もうやだ帰りた

い。
俺は扉の隙間から首を出して辺りの様子を窺う。……誰もいないようだ。

「ダクネス、めぐみん。行くぞ」

「な……も、もう行くのか?」

「もう少しこの景色を眺めていたいのですが……」

「黙れ行くぞ!」

二人の首根っこを掴んで部屋から引き摺りだし、階段を駆け上る。

「なあ、本当にマフィアなんかが襲撃してくんのかなあ……」

「あんな強い組織がオレら狙うこととかあんのかよ?」

「……!」

社長室の前で、重装備の男が二人警備している。持っているのは短機関銃。……ダクネスとめぐみんが出れば殺られる。

さてどうするか、と脳内で作戦を練っている。

「貴様らがこの街を薬で汚染しているのだな! 貴様らのような卑怯な輩はぶっ殺してやるっ!」

「!?」

暴言を吐きながらダクネスが二人の前に飛び出した!

馬鹿野郎、と叫んで俺も続いて飛び出したが、……ほとんど意味は

無かった。

飛び出したダクネスに息を呑むも、すぐさま照準を定める兵の練度は中々だ。だが、ダクネスは怯まずに神速で二人に体当たりし、たつたそれだけで大の男二人を気絶させてしまった。しかも短機関銃はぶっ壊れた。

「……あいつの身体どうなってんだ？」

「あれは人の形をした銅像だと思っただ方がいいですよ」

「聞こえているぞ二人共！ 私のことをなんだと思っっているんだ！？」

「二人の形をした銅像」

「うわあああああんー！」

——と、こんなことをしている場合ではない。一刻も早く社長を殺さなければ。

面倒だったので、ダクネスを助ける為に飛び出した時の勢いそのままに社長室の扉を異能で破った。

「チュウヤ、君の方が余程力があるじゃないか！」

「これは純粹な筋力じゃねえよ、異能で強化してる！」まあしていななくても蹴破るくらいはできるが。

「ダクネス、イノウとはなんなのか分かりますか？ 私、昨日から気

になっていたんですけど、聞く機会が……」

「それは私も思っていた。何なのだろうな」

……背後から聞こえた声に、今答えている余裕は無い。仕方が無いので後で答えてやろう。

はあ、と溜息をつき、社長イスに座って此方を怯えた表情で見ている社長に視線を据えたまま、

「ダクネス、めぐみん。今から俺がすることに驚いたり、何か言ったりするんじゃないぞ」

「……？」

二人が疑念を抱いている気配。まあいい。

この二人のことは未だによく分からないが、堅気の人間だったことだけは確かだろう。そんな二人が、俺が”今からすること”を見た時

の反応なんて大体想像がつく。前置きをしていても、多分『あんなもの』だろう。

「よお、大企業の社長サン。よくもまあ俺達のシマを荒らしてくれたなあ?」

「ひ……き、貴様は、ポートマファイア幹部の……!」

わざとらしく靴音を立てて社長に歩み寄り、視界を遮るようにその眼前に仁王立ち。鼻先が触れそうな程の距離まで顔を近づけ、髪の毛を掴む。社長の額に脂汗が滲み、その表情は恐怖に塗り潰された。

「少量ならまだ良かった。あの薬自体、効果は禁止されるほどキツくねエ。だが、一般人にまで出回りかけてるとなると見過ごせねエな」

「頼む、金なら払う! ほんの出来心だったんだ——」

「死ね」

ぐちゃり。

悪徳大企業の社長は、たった今、人智を超える強さの重力によってただの肉塊と化した。

「な……」

背後で息を呑む音が聞こえた。

……だから前置きしたのに。

「ち——チュウヤ! 何故だつ、何故殺した!? 警察に引き渡せば

良かったじゃないか!!」

「そうですよ! ど、どうして……うつ」

「甘いんだよ」

俺の言葉に込められた静かな殺気に当てられ、ダクネスとめぐみんは口を噤む。

コイツらは覚悟が足りていない。……確かに、恐らく他の土地からやって来て、突然マファイアに加入することになって。覚悟なんて大層なものを持ち合わせていないのだろうということとは分かっていた。だがそれにしたって、この組織のことを理解していなさすぎる。

「……軍警が来る前に退く。拠点に戻ったら、お前らが隠してることを全て話せ」

「……！」

とその時、ピコンとスマホが通知音を発する。ショートメールだ。送信者は――

「……チツ、なんなんだよ一体……」

『From：青鱈』

件名：探偵社とマフィアの合同任務について』

第5話 このスキルバトルに隠匿を！

朝日が煌めく魔都・横浜にて。

「……………これは想定外だなあ……………」

目の前で繰り広げられる”異能力では無い何か”によって行われている一方的な蹂躪に、思わず感嘆の溜息を漏らした。

問題なのは、その謎の力……………というよりも。

「あの少年と女の子——」

ごく普通の少年と、青い髪と目が特徴的な少女だ。

異能者でないなら、一体なんだと云うのだろう。

乱歩さんと話してみたが、乱歩さん曰く、「超推理で見通せない相手」らしい。何でも、あの少年のことを推理しようとすると、女の子の方から強い光が発せられたように感じるのだとか。……………ちよつとよく分からないけれど、乱歩さんが云うのならそういうことなのだろう。

佐藤和真。アクア。外見も名前も全く違うこの二人が、息ぴったりに戦っていて——その上、一人も殺さないまま無力化出来ているのは何故だろう。

普段なら滞りなく回る頭が、今日はつかえてばかりだ。

「困ったなあ……………」

さて、どうルートを組み立てていくか。



爽やかな笑顔の裏に激しい怒りを潜ませた包帯男——太宰にひたすら謝っていると。

「はい、こちら武装探偵社……………はい？ はあ、はい……………」

セーラー服姿の少女が受話器を取り、どこかからの電話に応じていた。最初は明るかった声が、返答を繰り返す毎に暗く沈んでいくのがここからでもハッキリと分かる。

「ナオミさん、どうかしたんですか？」

「……………ええと。武装探偵社が、ある企業の港湾施設の警備を依頼されましたわ」

白髪の少年……敦がナオミに問うと、ナオミは困ったような顔で首を傾げる。

「なんでも、この企業は最近どこかの犯罪組織に目をつけられてい
るらしくて。金に糸目はないから、明日の早朝五時頃から港湾の
重要物資用倉庫を警備して欲しいそうですの」

「犯罪組織に目をつけられるようなことをしてるのが悪いんじゃない
いのか？」

「そうよそうよ、そんなヤツらは私の聖なるグーによって断罪して
やるわ！」

俺とアクアが好き放題言うのと、ナオミはさらに表情を曇らせて。

「それは私もそう思いますけど……そうもいかないんですの。この
企業は国会議員との繋がりもあって、その分報酬は弾んでくれるで
しょうけど、警備を断ったら探偵社のどんな悪評が広められるか分か
りませんわ」

「……」

俺とアクアは顔を見合わせる。アクアの目が「この国とんでもない
わね」と語っている。俺もそう思う。なんか、俺が住んでた日本とは
スケールが違う気がする。

「……ふむ。じゃあ私が適当に作戦立てるところか」

「へええー」

言いながら、太宰がひらりと手を振って自分のデスクに着く。この
組織の作戦参謀は彼奴なのか……なんか役割取られた気分。

「ねえカズマさん、悔しい？ 小手先のスキルと無駄にずる賢い頭
が取り柄のカズマさん、役職取られて悔しい？」

「ゼル帝」

「うわああああああん！」

「……で、貴様らの処遇をどうするかだが——」

「待って国木田君。私良いこと考えたのだよね」

長髪の男性の言葉を遮って、太宰が再びガタリと席を立つ。振り向
いたその顔に貼り付けられた表情は、

「明日の警備任務。その二人にここに置いて欲しいって覚悟がある

のなら、それぐらいこなせるよねえ？」

「……………」

ねえ、自分の異能すら分からない怪しい異能者さん達、と。

悪戯っ子と悪魔の中間のようなそれに、俺とアクアはバニルの姿を重ねていた。

……この世界、クソだわ。



そして翌日。ニートはまだお眠の時間。午前五時。

「えつと……………太宰さんは無茶言つてたけど、僕達が何とかするから任せて！」

とても強そうには見えない敦が薄い胸を張って微笑んだ。

僕達、と言うと——恐らくは。

「……………何を見ているの」

「え、いや、えーと……………ナンデモナイデス」

敦の隣に立っている、黒髪和装の小柄な少女も戦闘要員なのだろう。歳はめぐみんと同じくらいか。

とても戦闘要員には見えない。……………この組織、大丈夫か？

などという考えは、戦闘が始まった瞬間に吹っ飛んだ。

「おい、あれ武装探偵社じゃねえのか!？」

「信じられねえ、昨日社長が殺されたからつて焦り過ぎだろ！」

「んなこたあどうだっていーんだよつ!! 数で潰せえええ!!」

十数人の武装した男が、口々に叫びながら俺達目掛けて突っ込んできた!

うわ、どうしよう。弓は無い。……………ちゅんちゅん丸ならあるが、あれを人を殺さないように使うとなれば俺の技量では不可能だ。

ふと横を見ると、携帯を持って足から先の無い仮面の女性を従えた少女と、肘から先、膝から先が白虎のそれと化した敦が身構えたところだった。

これが異能か……………スキル程の多彩性は無さそうだが、スキルより強力そうだな。

しかしどうやって戦うか——手の内はあまり見せたくない、と思考

を巡らせていると。

「ねえカズマさんカズマさん。パーティの中で二人つきりで、こんなに本気の戦闘するのってあの時以来じゃない?」

「……?」

隣に立って杖を構えていたアクアがふと呟いた。俺の方を見て、ニヤリと笑う。

「魔王の城に忍び込んだ時!」

「ああ、あれか……」

あの時は散々だったな。アクアが敵に嫌がらせをし、俺は敵のフリをしてパーティメンバーに嫌がらせをし。

悪戯っ子のような表情を浮かべたアクアが、俺に支援魔法と芸達者になる魔法、最後に「ブレッツシング」で駄女神アクアの祝福を授けてくれる。

……ああ、どうしてだろう。

馬鹿で運が悪い、最低な女神。なのに、コイツといると――

「ねえカズマ。未知の世界で、こんな状況でこんなに楽しいのってなんでかしらね!」

「さあな。俺もお前と同じ意見だ!」

戦闘開始!



支援魔法の力で強化された身体能力をフルに活かして一気に前線へ飛び出すと、

『クリエイト・アース』からの、『ウインド・ブレス』っ!

「なっ……!?!」

はい、お馴染みの初級魔法目潰しコンボ。これで一気に二人無力化。

しかし敵も熟練らしい。三人の男がそれぞれの銃口を俺に向ける。ヤバイ、これは死んだかも。

『セイクリッド・クリエイト・ウオーター』!」

――それは、嘗て俺達にトラウマを植え付けた、最凶最悪の水魔法。その言葉が聞こえた瞬間、ああまた金が消えるのかと人命の心配よ

り先に思ってしまった俺を責めないで欲しい。

「何怯えてるのよカズマ。私だって威力調整ぐらいできるのよ?」

「は……?」

アクアが呆けた声でそう言っつて。俺がハッとして三人を見るも、三人はもうそこにはいなかった。

正確に言えば、突如として現れた一点集中式の強力な水流によって、廃倉庫の外壁に叩きつけられて気絶していた。

「お前……」

「ほら何ぼーつとしてるの? いつもの小賢しいカズマさんはどうしたの!」

「後でぶっ飛ばす!」

ああ、ほらな。

こういう時に役に立つコイツと。

誰よりも馬鹿なコイツと。

とてつもなくマイペースなコイツの隣で戦うのがこんなにも楽しい。

「『バインド』!」二人の銃を纏めて拘束し、「『クリエイト・ウォーター』! 『フリーズ』!」別の二人を軽く窒息させる。

ヤバい。これはヤバい。手の内どうこうとか言ってる場合じゃない。

「絶好調だ。楽しすぎる!」

それからの俺は、アクアと位置を入れ替えながら敵を翻弄し続けた。

「おい、そっちに行つたぞ!」俺が芸達者になる魔法で変えた声で敵に指示を出し。

「よしこつちだな分かつ——ぐあつ!」敵が方向転換した先で待ち伏せていたアクアのゴッドブローが炸裂する。

知力が低いのなら、コイツが気持ちよく戦えそうな場に誘導してやればいい。そういう『空気』を作るのだ。

『『ファイアーボール』!』威力が低いので軽い火傷しか負わせることができないこの魔法も、人間を無効化するだけならとてつもなく有

用な魔法と化する。

「カズマ、怪我は無い!? あるならヒールで治すけど!」

「生憎ねえよ悪かったな!」

満面の笑みのアクアに、満面の笑みでそう返す。

……その時には既に、戦意のある敵は居なかった。

この日、俺とアクアは晴れて武装探偵社の下働きとして寮に入れてもらえることになり、俺達は同室という事実を嘆きながらも一先ず安堵したものだっただ。

……この一件が原因で、後からとんでもないトラブルに巻き込まれるとは思ってもいなかったのだ。

第6話 この可哀想な重力遣いに助つ人を！

窓の外を見れば、爽やかな朝日がこの街——横浜の街を美しく照らしていて。

この世界も悪くないかもしれない、なんて思ってしまったけれど。「カズマもアクアもない上に、私達がこんな組織に入ってしまったなどと知れたらどうなるんでしょうね……」

——昨晚、任務が終わった後。チュウヤが私達と一緒に部屋に戻ってくるなり、私達を椅子に座らせて真剣な顔で口を開いた。

「お前らがかなり無理矢理マフィアに加入させられることになったのは分かっている。だから、ここで一度、この組織について説明しておく」

チュウヤ曰く、ポートマフィアとは横浜の三大組織の内のひとつなのだ。

昼の世界の治安を守る軍警。夕方の世界を取り仕切る武装探偵社。そして、夜の世界をナワバリにするのが……ポートマフィアなのだという。

軍警は最も政府に近く、法を遵守する組織。武装探偵社は、政府とはあまり関わりがないが、法は一応守っている。最後に、ポートマフィアは——法はほとんど守らない。やっていることは横浜に危害を加える犯罪組織の撃退、滅殺だが、犯罪組織を撃退するなら此方も犯罪で対抗するしかないというわけ。

また、証拠を残すようなこともしないポートマフィアは、そのような観点からも政府から見ても見ぬふりをされているようなものらしい。

また、そこで重要になってくるのが”異能力”——人間が起こすことの出来ない超常現象を容易く起こしてしまう超能力だ。

私達の世界で言うと、スキルだとか魔法だとかいったものだと思う。

チュウヤの身体能力が特別高いと言うよりも、チュウヤの異能力……重力を操作する異能が強力だっただけなのかもしれない。

「……チュウヤはどこかに行ってしまったね」

「そうだな。彼奴はこの組織でも立場がかなり上のようなだから、何かやるべきことがあるのかもしれない」

私の隣で、薄いネグリジエ姿のダクネスが厳しい表情で虚空を睥む。

ダクネスとは先程、互いの考えについて話していた。

私は、恐らくここはアクア達の言う「異世界」なのではないかということを。ダクネスは、二人がいるのなら探してみたいということ。

……私も考えは一緒だ。

「よし。じゃあ、今日は街を探検しましょうか」

「そうだな。準備をして出発しよう」

こうして私とダクネスは部屋を出て、マフィア本部ビルを出るべく歩き出したのだが。

「おい、見ろよ……あの二人だぜ」

「あの二人か……身体を売って中原幹部に取り入ってるっていう……」

「つーか、片方は売れる身体無くね？」

「おい貴様ら、誰のことを言っているのか聞こうじゃないか!？」

道中であらぬ陰口を叩かれ続けて我慢の限界に達した私達は、黒いスーツ姿の男達に掴みかかった。

相手が年上の男とはいえ、ステータスは低くない。本気を出せば引けは取らない筈だ。

そんな自信から脅迫していると、男達は顔を見合わせて。

「だったらお前達、なんであんなに幹部と親しくできるんだ？ 普通、加入したばかりの……しかも異能も無いただの女二人が呼び捨てにできる人間じゃないぞ。下手したら首が飛ぶ」

「「えっ」」

今度は私達が顔を見合わせる番だった。

あれ、チュウヤってひよっとしてめちゃくちゃ権力もってるのでしょうか？

そしてそんな相手に初対面で爆裂魔法をぶっぱなしてしまった私は一体何をやっているのでしょうか？

……まあいい。

私は権力には屈しない男を恋人にもつ女。つまり私も不当な権力には屈しない。

「めぐみん、震えているぞ。大丈夫か？」

「——我が名はめぐみん！ 爆裂魔法を操りし者にして、不当な権力には屈しない女！」

だから私は爆裂魔法を撃った。

……マフィア本部ビルが五割方消し飛んだ。



「おい」

「貴方には分からないのですか!? この、爆裂魔法と言う素晴らしい魔法が！ 私はこの魔法を覚えてからというもの、全てのスキルポイントをこの魔法の威力上昇、詠唱速度短縮に突っ込み——」

「訳分かんねエことほざいてんじゃねエ!! どうしてくれんだ、こんなことしたの手前が初めてだぞ！」

「いやあ、それ程でも……」

「褒めてねえ」

異能というのは便利なものらしく、あの後、マフィアお抱えの異能者数人が泣きながらビルの再建をしていた。

己の愛する組織のビルを立て直せたことが余程嬉しかったらしい。

「お前らいい加減にしろよ。首領から直接『その子達にはちよつとお仕置しといて』なんて云われたの初めてだぞ」

「何故そこに私も入っているのか解せないが……お、お仕置だ?!」
ダクネスの瞳が輝き、頬が上気し始める。

これはまずい。

「き、貴様!! 首領から言われたからという大義名分を振りかざし、私の身体を目当てに好き勝手要求してくる気か！」

「はア!?! 何云ってんだてめ、」

「その視線で私の身体を舐め回し！ 更には個室に二人きりなのをいいことに、夜に私の身体を押さえつけ、『声を出したらどうなるか分かかってんだらうなア……?』と言いながらそれはもうすごいことを

する気だな!？」

「ダクネス、二人きりじゃないです。私もいます」……無視された。「おい、待て。落ち着け。その顔を何とかしろ。あと俺に近寄ってくんな」

チュウヤが頬を引き攣らせて怯えている。これは流石に可哀想だ。「……もういい。俺は今日はやることがあるから手前らは大人しく拠点にいろ」

「あ、あのう」

「ンだよ一体!」

チュウヤの顔には「もうお前らとは関わりたくないんだよ」と書かれていた。

犯罪組織の幹部から避けられる私達って一体……。だけど、チュウヤの言葉に少し興味をそそられて。

「私達も一緒に行つていいですか?」

「……断つたらどうなるんだ」

「く、くう……っ! 遠慮がちに誘えば、遠回しに断られる……これも中々新しい。カズマはいつも容赦なく断るからな……新感覚だ、新感覚だぞ……!」

「分かったもういい、もういいから連れてつてやる!」

……チュウヤ。激しく同情します。

こうして私達は、犯罪組織の幹部と街を歩くことになった。

第7話 この奇妙なコンビに不信感を！

この二人は怪しい――。

今朝の一件で、元々二人に抱いていた悪印象と不可解な部分が倍増した。

あんな多彩な異能は見たことがない。しかも、連携は息ぴったりで。一人も殺さずに仕留めたその手腕。

「おいアクア。炭酸買ってこい」

「はあー？ ヒキニートが誰に向かって命令してんのよ」

「ゼル帝」

「分かったわ、分かったからそれだけはやめてお願いよおおお!!」
……こんな莫迦な会話をしていても、重武装の男達を仕留めたのだ。疑わなければならぬ。

泣き叫びながら探偵社を飛び出していくアクアちゃんに僅かな同情を覚えつつ、カズマ君をじっと観察する。

昨日与えたデスクに座り、何やら真剣な顔でキーボードを叩いている。気配を消して背後から忍び寄ると、

「何やってんだ太宰」

「え、なんで気づいたの？」

歳上に対する呼び捨ての姿勢は敢えてスルーしてあげた。

カズマ君は私が画面を覗こうとした瞬間にホーム画面に切り替えると、くるりと振り向いて軽く睨みつけてくる。……本当に謎だ。気配を消すのは得意なのだけれど、どうして分かったのだろう。不思議でならない。

「まあ、俺の特殊スキル、かな……」

「……」どうしよう、この子もしかしたらある意味で私以上の才能があるかもしれない。

誤魔化しているのか本気なのか何も考えていないのかよく分からない返答に戦慄しつつ、表情では笑みを維持したまま探りを入れる。ここでこの私が負けてなるものか。

「ところでカズマくん、昨日は凄かったねえ。不思議な力を使って

いたようだけれど?」

「あれは俺の中に眠る破壊神が目覚めちゃったからさ……」

「……そう」どうしよう、この子本当に面倒臭い。私が今まで出会ったどんな人間よりも難敵だ。

動揺せず、焦らず。次の質問で核心を突こうと――

「この野郎おおおおおおああああああ!!」

断末魔の悲鳴と怒りの絶叫を混ぜたような獣の咆哮が響き渡ると同時に探偵社の扉が開放された。

立っていたのはスーツ姿の男。日本刀を携え、きちんとした身なりその男の姿には見覚えがある。

「君、安吾の所の……」

「太宰治。今日はお前に用があるんじゃない」安吾の部下は怒りに身体を震わせながら、真っ赤な顔でびしりと指を突き出すと。

「その異能者! 異能乱用の容疑で書類送検させてもらう!」

「……は?」

――カズマ君が突然の指名に固まった。

「えっ……と、ってああああああ!! お前、昨日俺をつけまわしてきた……!」

「「つけ回した!」」安吾の部下ってそんな趣味あるの!?

「な、何を言っている貴様ア! 公園で子供に向かって異能を使用していたと報告があったのだぞ! しかもあの後、金髪の女と私を一緒に縛ったせいで、公職の私が不審者扱いされたのだ!」

……異能ねえ。

さて、謎の少年カズマ君はどう対応するのかなと様子を窺ってみる。

「知るかよ、何が異能だ! 厨二病ってのはな、ロリ少女についてこそ属性になるんであって、お前みたいなクソ男が厨二病でも何も美味しくないんだよ!」

「ち、厨二病!? 貴様、自分が異能者であるにも関わらず、異能をそのようなもの扱いすると云うのか!」

「だっから、異能って何なんだ!」

幼稚な口論が繰り広げられ、緊迫していた社内の空気が段々と呆れたものになっていくのが分かる。

というか、カズマ君は本当に異能者では無いのだろうか……異能者でないという嘘をついているにしては、異能者のことを貶し過ぎているような気がする。

けれど、そんな空気が続いたのも僅かな間だった。苛立ちがピークに達したらしいカズマ君は椅子を蹴って立ち上がると、

「よし、そんなに言うならとっておきの『イノウ』を使ってやるよ……『ステイール』っ！」

突き出した右の拳が青白い光に包まれる。昨日は出さなかった「手」だ。

刹那、探偵社が再びカズマ君の右手を食い入るように見つめ――

「はあ？ 貴様一体何を……つてあつ！ わ、私の刀が……！」

「はっ、刀が無いと戦えないってのかよー！」

カズマ君が刀を横にして安吾の部下の脳天に振り下ろした。ゴーンと鈍い音が響き、安吾の部下は白目を剥いてバタリと正面に倒れる。

……その光景を、社内の全員が息を詰めて見守っていた。詳しいことは分からないが、ただひとつ分かるのは。

――カズマ君が、謎の力によって刀を安吾の部下から奪い取った。

矢張り、この少年は普通では無い。異能にしては弱すぎるけれど、あまりにも多彩だ。使い方次第では化けると思う。本当に。

……そんな力を、少年は巧みに使いこなしていた。

「ただま……つてあら、カズマさんってばまた姑息な手段で何かやったのね？ そうなのね？」

そんな時、緊迫した空気をぶち壊したのは炭酸片手に帰ってきたアキラちゃん。彼女はぶつ倒れた安吾の部下と、刀片手に立っているカズマ君、そしてそれを見守る探偵社一同という世にも奇妙な光景を前にしても一切動じない。それどころか鼻歌でも歌い出しそんな軽やかさでカズマ君に茶々を入れる。

「うるせえよ宴会芸の女神」

「なんですってこの童貞！」

「ゼル帝」

「ねえ、カズマさんって何かそこはかたなくいい感じよね」

「……無理して褒めろとは言ってない」

……そろそろ私達はアクアちゃんの学習能力の低さに気づき始めた。

興味無さそうに刀を一瞥したかと思うと、カズマ君は突然椅子に座り直し、パソコンを弄り始める。

「えーつと……カズマ君、なにやってるの？」

「この刀売ろうと思ってる」

「えっ」

予想外の答えに仰け反る敦君……と、アクアちゃん。

そして、私達は気づき始めた。……カズマ君は私とは正反対の方向に思考能力が進化しているらしい。

カズマ君に呆れた視線を向けるアクアちゃん。うつひよー高値で売れるぜと飛び上がって喜んでいるカズマ君。

「……貴様ら、いい加減にしろ」

まあ、そんな二人を前にして、我が社の仕事の鬼であり生真面目の鏡であるこの人が黙っているはずも無いよね。

昨日と同様、社の真ん中で若い男女二人が正座させられて説教されているというカオスな光景に紛れて、私は携帯を確認しながら社を後にした。

第8話 この双黒に悪運を！

老若男女、年齢層を絞らない。幅広い世代からの受けが良い、落ち着いた雰囲気のお洒落な喫茶店。

私の隣にチュウヤが。チュウヤの向かいにめぐみんが。そしてその隣には――

「こんにちは、お嬢さん達。こんなチビに連れられていて可哀想だね」

「誰がチビだこの野郎」

爽やかな笑顔で暴言を吐く、整った顔立ちながらも胡散臭い、全身包帯だらけの男が一人。

……私の好みとは違うタイプのダメ男の予感がする。



チュウヤと共に街に繰り出した私とめぐみんだったが、アクセルの街との違いにいちいち驚きの声を上げてはチュウヤに急かされていた。

硝子のショーウィンドウからは、季節に合ったお洒落な衣服が姿を覗かせたり。無骨なビルから綺麗な女性がぞろぞろと連れ立って出てきたり。触れずに開く扉、馬も居ないのに勝手に走る鉄製の何か。

本当にここが「異世界」なのだと改めて実感させられた。

そして、驚いたことがもうひとつ。

「い、良いんですか……？ 本当に？」

「畏とかでは無いのだろうか？」

「いちいち失礼なんだよお前は。……まあ、迷惑料にしちや安過ぎるか？」

「「とんでもないです！」」

どうやら、チュウヤはチュウヤなりに私達を半ば無理矢理犯罪組織であるポートマフィアに引き込んだことを申し訳なく思ってくれているらしい。……どうしよう、私の好みのタイプとは正反対のほずなのに、マトモな人間に出会えたことがこんなにも嬉しいなんて。今まで奇特な人間しか周囲にいなかったからだろうか、こういう人柄に触

れると心が温かくなる。

恥ずかしそうに後頭部を搔くチュウヤに、私とめぐみんは全力でお辞儀をした。

……と言うのも、チュウヤは様々な女性物の衣服が取り揃えられたお洒落な服屋に連れてきて、「好きな物を好きなだけ注文していい。金の心配はするな。後で本部に送らせる」と言ってくれたのだ。カズマとは対極の位置に居るような男だと思う。本当に。

「……なあめぐみん。本当にチュウヤは人殺しなのだろうか……」
好きな衣服を数着、遠慮しながらも注文し、街の中を歩いていても平気なようにと常時着用の服も着せてもらった後。

人混みの中、私達の少し前を歩いているチュウヤには聞こえないようにほそりと。

隣にいるめぐみんにだけ聞こえる声量で呟くと、めぐみんはチラリとこちらを見て。

「……きつと、根は良い人なんでしょう。けれど、彼の中に根差す『何か』が、人を殺しても街を守りたいという強い思いを持つモノなんじゃないでしょうか。人間、特別な感情を抱いた相手には影響されやすいものなんですよ」

「それは——ひよつとして、」
カズマのことか、と言おうとするも、めぐみんの指によって続く言葉を遮られる。

めぐみんは寂しげに微笑んだ。

「私も……カズマと居るようになってから、本当に変わりましたね」
「めぐみん……」

「カズマが他の女の人と話していると、胸がモヤモヤしたり。その中身が魔法に関するものだとか知ると胸がキュツと苦しくなって、更にその女性が初・中・上級全ての魔法を使える魔法使いという事実を知って無邪気にはしゃいでいるカズマを見ると、女の人に爆裂魔法を撃ち込みたくなるんです」

「なあ、それは違うんじゃないか？ 悪い意味で影響されている気がするのだが……」

『『エクスプロージョン』つつつ!!』

「あっ」

そして冒頭に戻る。

「なあ太宰……頼むから、こいつらをマフィアから追い出してくれ……俺が莫迦だった。認めるから、まだこいつら手は汚してねえから、頼むから探偵社に移籍させてやってくれ……」

「え、なに、怒ったかと思えば急に消沈? しかも”こいつら”って——」ダザイと呼ばれた男が怪訝そうに私達の表情を窺った瞬間。

「我が名はめぐみん! 紅魔族随一の爆裂魔法の使い手にして、”頭のおかしい爆烈娘”の通り名を持ちし痛あああああ!」

徐ろに立ち上がって名乗りを上げためぐみんの頭をチュウヤがひっぱっていた。

……めぐみん、自ら頭のおかしい爆烈娘を名乗るのか。しかし、今の叩きは音が良い。是非一度私もやられてみたいものだ。

めぐみんは涙目になってチュウヤに掴みかかろうとするも、チュウヤはひよいと躲して口を開く。

「街中であんな異能なのか何なのか判別すら出来ねエ大爆発起こす奴があるかこの糞餓鬼!! 明日からマフィア内での手前の通り名をその通りにしてやろうか!」

「ええ、ええ、やってみるがいいです! そんな事をした次の日には、ポートマフィアのビルがネリケシと化しているかもしれないけどね!」

……もうこの二人は放っておいた方がいい気がする。

開き直って二人を居ない者として扱うことにした。周囲からの視線が痛いのは気の所為だろう。

正面を見ると、ダザイとぼつちり目が合って。ダザイは柔らかな笑みを見せると、

「とても綺麗な方ですね……もし良ければ、私と共にこの世界に別れを告げ、天で一緒になりませんか?」

「……」

私の好みじゃない!

「違うだろう、そこはそうじゃない! 『ハッ、この雌豚……イヤらしい顔しちゃって。なあに、お仕置して欲しいの? 未だだアめ。死ぬギリギリまでたつぷり可愛がってあげるから覚悟しときなよ……』と! 頬を上気させ、欲に塗れた瞳で貴様はそう言うのだ! そうだろう!」

「えっ……いや、え、は?」

狼狽えるダザイ。だがしかし、私はここで止まる訳にはいかないのだ!

パンツと机に掌を叩きつけて立ち上がる。気づけば隣の二人の喧嘩も収まっていて。後は私が言うべきことを言うだけという状況だ。

「さあ言えダザイ! その綺麗な顔の下に隠した、私の身体への欲望をさらけ出せ!」

「ねえ中也どうしよう、こんなに怖い美人さん見たの初めてなのだけれど」



「……で? あのメールの内容は何なんだ?」

めぐみんとダクネスを脅して黙らせた後、携帯のメール画面を太宰に翳して見せる。

それを送った張本人は、画面を見て口角を引き上げた。

「うふふ。……まア聞いてよ。実は昨日、探偵社にある女の子と男の子が入ったのだけれど——」

「はア? 新入社員? ……異能は?」

「うーん、もし知っていても云うわけないけれど。生憎、異能なのかなんなのかよく分からない力を持っているらしくて。今日なんか探偵社に殴り込んできた安吾の部下をその謎の力で追い返してしまっただのだよ」

「あの教授眼鏡の部下……結構強エンじゃねえの?」

「それが問題。実は、その手口って云うのがね……」

太宰曰く、「教授眼鏡の部下には一切触れずに」武器の日本刀を奪って殴り昏倒させた後、その刀をネットで売り飛ばしたのだと。

「触れずに武器を奪う……ダクネス、もしかしてこれは……」

「ああ、私も同じことを思ったところだ。刀を売るというのも、あの男の手口によく似て……」

「だから、近い内にマフィアと探偵社で合同任務を行って、マフィア側から見たあの二人の力について意見を聞かせて欲しいのだよ」

「やベエのは片方か？」

「いや、多分両方。どちらかと云うと男の子の方が危ないね」

「そうかよ……そう云えば太宰」

「なんだい」

「——なんか、外騒がしくね？」

見ると、喫茶店を囲むように、黒いスーツの男数十人が立っていた。見たところ目立つ武装はしていない。マフィアの間では無いな……となると、

「参ったね。どうして特務科が此処に、」

「あああああのスーツは見覚えがあるぞっ！ この前私に痴女罪だなんだと言ひ掛かりをつけてきた男が着ていた……！」

「それは多分事実だと思います」

さあどうするか。真逆真昼間からマフィア幹部が出張ってドンパチやる訳にもいくまい。それは太宰も同じだ。昼の人間が昼の人間相手にどう戦うと？ しかも、相手の方が地位も権力も上。一介の探偵社員である太宰に特別なことができるとは思えない。

「こいつら……一体何が狙いなんだ？」

すると、集団の中から一人が代表らしく前に出て。

握ったメガホンを口元に翳し、すうっと息を吸い込むと……。

「探偵社員、太宰治！ 私の刀を売り飛ばした佐藤和真とやらは何処にいる!! 今すぐに居場所を教えろ、一発で拘置所送りだ！」

「「えっ」」

太宰とダクネスとめぐみんの声が重なる。三人は顔を見合わせて

「……ダザイ、話は後です。今はここを乗り切らなければいけません」

「そうだね……めぐみんちゃん」

「ああ。まず私が真ん中に突っ込んで気を引くから、ダザイは後を頼む」

「嫌です」

「なっ……！ し、しかし、即断即決も中々——」

「無理です」

莫迦なやり取りをしている間にも、教授眼鏡の部下はヒートアップしていき……！

「俺が佐藤和真だあああああ!!」

「そして、ヒキニートを支える女神、アクア様の登場よ！」

——どこからともなく二人の少年少女が男達を中心に現れた瞬間、莫迦なやり取りがピタリと止んだ。

第9話 この素晴らしい一日に祝福を！

国木田の説教の傍ら、太宰の気配が消えた。本当にさり気なく、誰にも気取られないようにフツと。

それが気になった俺は、怒鳴る国木田を無視して窓に駆け寄り、出て行った太宰の動向を千里眼スキルで追う。

こんなタイミングで出て行くということは、遠出するつもりは無いだろう。なら、後は千里眼スキルの届く範囲で太宰が動いてくれることを願う。俺の高い幸運値頼みだ。

「カズマさんカズマさん、流石に説教の途中で窓の外を見出すのはクズマさんを通り越して肝が据わってると思うの」

「ありがとな」

「褒めてないんですけど」

「おい青髪の小娘、貴様もだ!! 他人を貶せる立場か!」

「あーら言ってくれたわねこのノツポ! その眼鏡ダサイと思わないんですかー!?! そこはかたなく童貞臭漂うその眼鏡、ダサイと思わないんですかー!?! プークスクス!」

「な、なんだと……!」

何やら喧嘩を始めた二人を無視して太宰の動向を追い続けると、やがてある喫茶店には入っていった。

入り組んだ路地の中ではなく、探偵社から見渡せる範囲にあるお洒落な喫茶店だ。やはり運は最強。

暫くの間喫茶店を見ていると――

「ん……おお……!?!」

赤茶けた髪をした、全身黒ずくめの……紅魔族の琴線に触れそうな格好の少年が喫茶店に入る。そしてその背後にいる二人の少女に俺は視線が釘付けになった。

金髪碧眼の美人。黒髪赤目の美少女。二人共何故か格好は違うが、あれは確かに俺のポンコツパーティーメンバーだ。

そして、三人は太宰と同じ席に座る。黒ずくめの少年の隣にダクネス、太宰の隣にめぐみん。

何だ？ めぐみんがこの世界にいたということで一先ず安心したが、謎の面子に不安が止まらない。

——という訳で、ここで読唇術スキル発動！

「カズマ、何か分かったのかしら？」

「ああ、結構ヤバいことが分かつ……。 ……なあアクア、国木田がそこで倒れてるのはなんで？」

「貴方、そのままだと一生童貞のまま孤独死するわよって言っただけなんですけど」

「原因それだろ。つてか童貞舐めん」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら腕を振り回すアクアを抑え、先程聞いた黒ずくめの少年と太宰のやり取りをそのまま伝える。

「なるほど……。つまりあのダサイとかいう男は、私の女神オーラにとつともなく警戒レベルを引き上げているという訳ね？」

「ダサイじゃなくて太宰な。あとどっちかつつーと俺の方が警戒されてる」

「嘘……。こんな、こんなニートが！ あんな初級の雑魚スキルで警戒されてるなんて！ プークスクス！」

『『クリエイト・ウォーター』、『クリエイト・アース』』

「ごめんなさいごめんなさいそれだけはやめてええええ!!」

しかし、喫茶店の周りに黒スーツ姿の男数人が集まり、その中の一人が前に出てメガホンを口元に寄せた時、俺の中の警戒レベルが瞬時に引き上げられる。

『探偵社員、太宰治！ 私の刀を売り飛ばした佐藤和真とやらは何処にいる!! 今すぐに居場所を教えろ、一発で拘置所送りだ!』

俺は反射的にアクアの首根っこを引っ掴んで探偵社を飛び出していた。



「俺が佐藤和真だあああああ!!」

「そして、ヒキニートを支える女神、アクア様の登場よ！」

敢えてド派手に登場してみると、まあ勿論その場の皆さんの視線は俺達に釘付けに。

「カズマ、アクア！ いたんですね！」

「おいカズマ、昨日はよくも私を置いていってくれたな！ ……だが、たまにはああいう放置プレイも悪くは……」

「黙れよお前、感動の再会が台無しじゃねーか」

喫茶店から飛び出してきたためぐみんとダクネスに視線を送ると、俺の隣でアクアがフツと笑う気配がした。

「変ね。四人揃えば何でも出来る気がするのってどうしてかしら」

「本当だよ。こんなポンコツパーティのハズなのにな」

「何を言いますか。魔王を倒した最強のパーティと言ってください」

「な、なあ、私はあまり活躍出来なかったような気がするのだが、気のせいだろうか……」

「気にすんなダクネス、お前も充分貢献してたよ。まあ俺の方が活躍したけど」

「この男！ 本当にこの男は、素直に人を慰めるという行為すら満足に出来んのか！」

いつもの俺達の、馬鹿なやり取り。

世界が違ってたって何も変わらない、ポンコツパーティ。

「佐藤和真ア!! 未成年だろうがなんだろうが関係無い、貴様は一度政府のブラックリストにでも載せた方が世の為だ！ そうなりたくなければ大人しく投降しろ！」

成程、つまりコイツらは国のお偉いさんと。

……俺はそんな相手からステイルで刀を奪い取って殴った挙句、ミツラギと同じように刀を売っぱらったと。

「カズマ、顔を覆ってしゃがみこんでどうしたのですか？」

「そっとしておいた方がいいわ。カズマは今、学生時代の恥ずかしい黒歴史を思い出している気ではないのよ」

こいつ後で殴る。

けどそう言えば俺って、王族のお嬢様に若者言葉を教えこんだり、お兄ちゃんって呼ぶように言ったり、今よりも普通にヤバいことを色々仕出かしてきたんだよな。

……なら大丈夫なんじゃね？

「突然カズマの顔がゲスくなつたな……なあカズマ、お仕置をするなら二人きりの時の方が良いのだが……」

「それ以上言うならお前が紅魔の里でやらされたのと同じように今ここで名乗りを上げさせるぞ」

「うう……」

赤い顔で引き下がるダクネス。尚も緊迫した空気を消さない政府のお偉いさん達。

——やつてしまうか。

キョトンとした表情のめぐみん。好戦的にファイティングポーズをとるアクア。

——こいつらさえいれば、俺はなんだってできる。

「よしお前ら、緊急クエストだ！ その名も——」

パツと瞳を輝かせた馬鹿三人に振り向くと、俺はニヤリと笑つてみせた。

”異世界で大暴れ”だ！

「ねえカズマ君やめてお願いだからやめてその後で怒られるの多分私だから！」

喫茶店から飛び出してきた太宰が何か言っているような気がするが気のせいだろう。

そして、「太宰がそんなに狼狽えてんのは面白エ。おい、佐藤和真とやら。叩きのめしてやれよ」というチンピラっぽい煽りコールが聞こえたのも気のせいだろう。

こうして、俺達は日本政府に喧嘩を売ったのだった。



結果から言おう。

大勝利である。

「ねえ、これをどう以て大勝利って云えるのか私には全く理解できないのだけれど？」

ポートマフィア（この組織についてはよく知らないが、めぐみんとダクネスが流れで入ってしまった犯罪組織らしい）本部、会議室にて。

俺、めぐみん、ダクネス、アクアは、太宰、黒ずくめの少年、福沢と言う探偵社の社長、謎の医者風のオツサンと向かい合って座っていた。

話し合い——と言う名の説教が始まるであろうことは、俺達全員、本能的に理解している。

俺達はゴクリと生唾を飲み——

「はん、アンタの頭が足りないからよこの包帯男！ ミイラ男みたいな格好しちゃって、そんなに私に浄化されたいのかしら？ 泣いて土下座するんなら、女神である私が特別に浄化してあげてもいいけど？」

訂正。一人の宴会芸の女神を除いた俺達三人が理解している。

……あの後の戦闘の展開は単純だった。

「かかってこい貴様ら、全員ぶっ殺してやるっ！」物騒なお嬢様がその場の代表的な男に殴り掛かり。

『セイクリッド・クリエイト・ウオーター！』「洪水と見紛うような水流が政府の人数人を押し流し。

『クリエイト・ウオーター！』「フリーズ！」俺が残りの数人の足元を固定し。

『エクスプロージョン』つつ！俺がドレインタッチでアクアから吸った魔力を受け渡すことよって魔力を回復したためめぐみんが、本二度目の爆裂魔法を上空にお見舞いした。

政府のお偉いさん達は泣いて帰っていった。

そしてその後、俺は殺気の籠った笑みを浮かべた太宰と、真顔の黒ずくめ少年に取り押されられ。

四人揃った感動の再会を味わう暇も無く、ここに連れてこられたという訳だ。

「めぐみん君、ダクネス君。中也君が問い詰めても、君達は自分達の素性について明かさなかったみたいけど」医者風のオツサンがニコニコ笑いながら言う。「政府まで敵に回すようなら、流星に見過ごせないねえ」

こんな格好をしているが、威圧感がハンパねえ。流星、犯罪組織

ポートマフィアの首領なだけはある(さつきめぐみんにコソツと教えてもらった)。

するとめぐみんはバンツと机に手を着いて勢い良く立ち上がり。

「だから、私は前にもチュウヤに言いましたよ！ 紅魔族随一の爆裂魔法使いで、前世は破壊神。だから何を壊しても許されると！」

「なあ、破壊神の下り多分俺聞いてねえぞ？ あと何を壊しても許されるワケねえだろ」

軽く引いている少年に、今度はダクネスが立ち上がると。

「私はダステイネス・フォード・ララティーナ。ダステイネス家に生まれた貴族だ。先程は無礼を働いたこと、誠に申し訳なく思っている」

「ふーん貴族かあ。私にセクハラしてきた貴女、貴族なんですね」

「なっ、し、信じていないな?! しかしそんな疑いの視線も中々……！」

「無理です」

……ダメだ。こいつらには任せられねえ。

確かに、昨日アクアが言っていたことも理解はできる。敵か味方かも分からない人間に、素性やスキル、魔法をホイホイ教えるなどという理屈。

だが……。

「まあ待てよ。こいつらを代表して謝罪する。政府のお偉いさん達にあんなこととして悪かったな」

「その政府のお偉いさんの刀を売り飛ばしたのは何処のどいつだ」

「ただ、俺達にも事情があるんだ。少しでいいから聞いて欲しい」黒ずくめの少年の言葉はスルーした。

この土地を統治している組織の長二人を目の前にして動揺しない訳が無い。殺気も威厳も申し分無いのだ。

だが、貴族であるダクネスを筆頭に、クリスもとい女神エリス様や、領主のアルダープ、王女のアイリス、果ては魔王とも対面したことがある俺にとっては何ら強い恐怖を感じる理由がない。

だから賭けてみようと思う。

こいつらがどこまで俺の話を信じるか。
——どこまで頭が切れる奴等なのか試してやろう。
こうして、俺は語り始める——

第10話 魔都・横浜のトラブルメーカー

「任せろ敦。俺が何とかしてやる」

「いや、あの、カズマ君……」

「そうよアツシ。カズマさんに任せれば狡っ辛い手を使って毎回どうにかしてくれるから」

「や、そうではなくて」

「あの女のスカート捲りくらい御茶の子さいさいさー！」

「だから違うから！ やってることただの犯罪だからあああああ！！」

僕の名前は中島敦。

……今、探偵社にやって来た太宰さんをも上回るトラブルメーカー達と犯罪に片足を突っ込んでいるところです。



アクアちゃんとカズマ君が探偵社に来て一週間。

二人の事情を聞き、二人が使う謎の力について納得の行った僕達は前のように二人を疑ってかかることはしなくなった……のだけれど。

「カズマさんカズマさん、政府とかっていう成金どもからラブレットが届いてるわよ！」

「ああん？ 『一刻も早く異能特務科本部にやってこい。さもなければお前の命は無いぞ』……か。よしアクア、確かこの前あそこ覗いたら女の人が居たな。あの美人さんにちよつと悪戯してこようぜ」

「ねえ君達、本当に止めてくれないかな。世話役頼まれてる私にクレームが回ってくるのだよね」

ここ最近、太宰さんが自殺をしていない。それどころか社の迷惑になるような行動すらとっていない。その原因はただ一つ、『国木田さんが社長経由で太宰さんにアクアちゃんとカズマ君の世話を命じたから』だ。

これには流石の太宰さんも逆らえず、二人の世話に勤しんでいる。けれど、肝心の二人がこれまでに類を見ない、常識を知らない二人だったので、あの太宰さんも心の余裕を無くしているのだ。

昨日の依頼は、ある男性が女性にストーカーされているらしく、どうにかして懲らしめて欲しいとのことだ。

その依頼を受けたのは僕とカズマ君とアクアちゃん。……この時点で嫌な予感しかない。

そして任務の最中、嫌な予感は的中した。

アクアちゃんが魔法で女性に背後から水を浴びせかけたり、カズマ君が風の魔法でスカートを捲ったり、不思議なスキルで下着を盗ったり。女性は泣きながら「こんな土地出てってやる」と叫んで去っていった。普通にあの女性は可哀想だった。というかやっつてること自体は此方側が圧倒的に悪いと思う。

しかも、この二人はあの一件以来、政府の異能特務科に命を狙われている。文字通り。普通ならこの事実を認識した瞬間恐怖で動けなくなりそうなものだけど、あろう事かこの二人はその状況すら楽しんでた。今だって、正真正銘の脅迫文にセクハラで対抗しようとしている。どう考えてもおかしいよね。っていうかそろそろこの二人は罪を償った方がいい気がする。

「敦君、見てよ。そこに青い蟹が居る。美味しくなさそうだね」

「太宰さん、蟹は居ません。居るのは青い疫病神ですよ」

「何言ってるの、居るのは水の女神でしょう！ さあ、私を敬って！ 崇めて！ そしてアクシズ教徒になりなさい！ 今なら五千エリスで懺悔を聞いてあげるから」駄目だ全く会話が通じない。

「なあ賢治。ちよつとやって欲しいことがあるんだけどさ……」

「はいなんでしよう？」

「この唐変木が!! 妙な手品で賢治を買収してセクハラの片棒を担がせるなああああ!!」

怒鳴る国木田さん。疲労のあまり幻覚を見る太宰さん。賢治君を買収するカズマ君、ひたすら意味不明なことを口走っているアクアちゃん。

探偵社には混沌の女神が舞い降りていた。

ああ、誰かどうにかしてください……。

「邪魔するぜ探偵社」

その時、カチャリと云う小気味の良い音が響き、探偵社の扉が開く。特徴的な黒い帽子。黒い外套。小柄な体躯。

そこに立っていたのは、見紛うことなき天下のポートマフィア幹部。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の痛ああああああ!? ……なんなんですか、どうして最近名乗りを上げさせてくれないのですか!? ええいいでしょう売られた喧嘩は買うのが紅魔族です!」

「なあチュウヤ、叩くのはめぐみんではなく私にしないか? ……ああつ、どうして無視を……しかしこれもまた中々……」

……否。

感情の導火線がひどく短い少女を叩く少年と、そんな少年の様子に興奮して頬を上気させる不審な女性がそこにいた。

少年は——中也さんは心做しかやつれた表情で云った。

「探偵社。……と云うか太宰。マフィアと探偵社、合同の任務が決まった」

その一言に、混沌と化していた社内の空気がピンと張り詰める。

合同の任務。今まで幾度も行われてきたそれは、大抵とてつもなく厳しい内容のもので。

だから僕達が自然と表情を引き締めるのも当然の反応と云えた。

「政府に謝りに行くこう」

……中也さんの、その言葉を聞くまでは。

第11話 異世界からの訪問者達（クラッシュヤーズ）

裁判を受けるのはこれで何度目か。

……などと格好をつけて言ってみたものの、二度目である。なんてことは無い数字だ。え？ 普通なら裁判を受けることすらない？ はっはー諸君、人生のスパイスというものがまだまだ足りていないよ。うだな。因みに俺要らないスパイスが周りに三個あるんだけどあげようか？

「ふざけないでください、何が政府ですか！ そんなもの、わたしの爆裂魔法の元に一撃で痛ああああああ!! だからチュウヤああああああ!!」

「裁判……！ そんなものに私は屈しはしない！ 私を裁きたければ拷問でもなんでもするがいい！ 望むところだ！」

「ふふ、神を裁こうなんて、低俗な思考の人間が居るなんて……。……ねえ、何よその目。なーに、もしかして私が女神だって信じてないでしょ！ いいでしょかかってきなさい！ 全員まとめて、洗い物をしたらささくれができる天罰を与えてやるから！」

厳かで緊迫した雰囲気の特徴的な裁判所。今までテレビで見るところしか無かった場所に、今は俺が立っている。

「静粛に。これより、佐藤和真及びその他三人の処遇を決定する裁判を始める」

—— 犯罪者として。



「その男——佐藤和真は、街中で異能を乱用し子供を泣かせた挙句、署まで同行しようとした私に対しても異能を使用しました。それどころか探偵社に迎えに行った私の刀を奪い、ネットで売り飛ばしました」

「裁判長さん、この子有罪で良いと思うよ」

「何を言っているダザイ、有罪どころか永遠に牢屋の中でも良いだろう」

どうしよう、俺のあまりのクズっぷりに味方が味方してくれない。

だが俺にも反撃材料はひとつある。俺はその『反撃材料』を主張すべく立ち上がった。

「まあ待てよ、俺には特殊な事情が——」

「被告人。許可を得てから起立しなさい」

「……」

凄く既視感のある光景に何も言えずに黙っていると、俺の味方側——探偵社とマフィアが座っている席の方からスッと一本手が挙がり。

「宮沢賢治。発言を許す」

「その人……和真さんは悪い人じゃないですよ。昨日はどうしたら女のひとの口論に勝てるかについて教えて貰いました」

「……と、とにかく。罪を問われているのは佐藤和真だけでは無い。戸籍不明の三人の女も……。おい、なんでお前らは傍聴席に座っている！ 早く佐藤和真の横に並びなさい！」

「なんなんですか、私達は何をしたと言うのですか！ 罪を問われるのはカズマだけで充分ではないですか！」

「おいお前後で覚えてろよ」

最低な発言をする恋人のめぐみんを筆頭に、俺のパーティーメンバーが俺の横に並ぶ。

四人並んだことを確認して、女の検察官がうむと頷くと。

「佐藤和真。その他三人……名前は、アクア、ダクネス、めぐみ……ん、で合っていますね？」

「おい、どうして私の名前だけつかえたのか聞こうじゃないか！」

「だから何で手前は直ぐに喧嘩売るんだ、仮にも裁かれる側なんだから黙ってる！」

黒服の少年——中也がめぐみんに万年筆を投げる。正確に投擲された一本の黒い万年筆は凄まじい速度を以て凶器と化し、めぐみんの足下に突き刺さった。これには流石のめぐみんも身の危険を感じたらしく、無言で姿勢を正している。

「ではまず最初の質問です。一人ずつ答えなさい。——貴方達、幾ら探しても戸籍が存在しませんでしたが。一体どこの出身なのです

か？」

「私は天界から来た女神アクアよ」

「私は紅魔の里から来ためぐみんです」

「私はダステイネス家の後継ぎの予定だ」

「単純に言えば、俺達は異世界から来た」

三人の素直な返答を俺がまとめてやる。こうすることで少しは相手方の混乱が拭えるといいのだが……まあ多分無理だろうな。

すると案の定検察官さんはぴくりと肩頬を引き攣らせて、

「で……では、次の質問です。貴方達が行ったことは、政府への反抗……つまり国家転覆と受け取れますが、その事について云いたいことがあればどうぞ」

「こーんなちつぽけな国、転覆なんかしたっていいことないわよ」

「アクアの言う通りです。我が爆裂魔法を使うまでもありません」

「そもそも、私達を裁く理由は何なのだ？ 録に此方の言い分を聞きもしないで裁判など、この国は腐っているな」

「えーっと、俺達は異能を使ったつもりはなくて。異能なんてのがあるのも知りませんでした。俺達は異世界から来ていて、使えるのはスキルと魔法だけです」

検察官の顔が段々赤くなっているのは気のせいだろうか。
「では、最後の質問です。——今此処で、秘密裏に貴方達を処分しても？」

瞬間、検察官の背後にいた政府の者らしき男達が一斉に立ち上がり、どこに隠し持っていたのか銃口を俺達に向け静止させる。

わあ信じられない。俺の知ってる日本じゃねえ。

というか、少しは聞く耳を持つて欲しい。滅茶苦茶な話かもしれないが、異世界云々は本当なのだ。大体、異能なんていう非科学的な超能力があるんだったら異世界転移くらい信じろよボケ！

「まあ待てよ特務科。此奴らの云い分を証明する方法がひとつある」

その時、探偵社とマフィア側の席で中也が立ち上がった。続いて太宰も立ち上がると、

「正直云うと、こんなおかしな人達、牢屋に入れておいてもいいのだけれどね。寧ろ一生牢屋にいて欲しい」

「何ですってえええええ!!」

「でも、」

太宰は呆れたように両手を上げた後、フツと表情を緩めて俺達を見る。

「こんな不思議な人達は初めて見たよ。大して強くも無い、使い所が尖りすぎてる変な能力で戦って、政府を撃退して、特務科に危険視されて処分されかけるなんて。前例が無い、とんだ異常事態だ」
だからね、と太宰は微笑んで。

「私の異能——」人間失格は、触れただけであらゆる異能を無効化する。その中の全員、私が触れた状態で能力を使用したのなら、それは異能じゃないということになって、彼らの云い分の正当性が主張できる」

「つまり、太宰はこう云ってんだよ——」

何故だろう。中也と太宰がかわるがわる喋っているだけなのに、二人が並んで立っているだけなのに、

——強い、と肌で感じてしまうのは何故なのだろうか。

「お前ら四人と居るのは結構楽しいから助けてやるってな」
この日、俺達の間初めて“絆”が生まれた。

第一部

第12話 違法祝宴（パーティー）と冒険者達（アドベンチャーズ）

「なあ、チュウヤ」

黙っていれば太宰が心中を申し込みそうな程の美人が、どこか哀しそうな表情で。

綺麗な青色の双眸を揺らしながらこう云った。

「人を殺すのではなくて、その……私をいたぶるのでは駄目なのだろうか……」

「駄目です」

本当、この女こそ殺して剥製にでもして飾っておくべきだと思う。



佐藤和真とかいう奴含めた四人が政府の視界から僅かに逃げ出す事に成功して数日が経過したある日。

めぐみんが「私を馬鹿にした彼奴に紅魔族の凄さを思い知らせてやる」とかトラブルが起る予感しかない台詞を残して去ってしまった為、部屋にはネグリジエ姿のダクネスとラフな部屋着姿の俺の二人きり。

因みに、こいつら二人が来てから、何軒かある自宅には戻れていない。執務室での寝泊まりだ。悪くは無いのだが、執務室では酒が飲めないので困る。つまりこいつらの所為で酒が飲めない。しかもこいつらはびっくりする程迷惑行動しかとらない。……女を殴りたくなつたのは初めてかもしれない。

寝ようかとも思ったが眠気は一向に訪れず、どうやって暇を潰そうかと考えていた時だった。

目の前の女が莫迦なことを口走ったのは。

「……まったく、最初の俺のテンション返しやがれ。哀しそうな顔してやがるからどんな質問をするのかと思えば……本当に手前はブレねえのな」

「い、いやっ、確かに後半は本心だが！ 前半も本心だ！」
何なんだこの前半のオマケ感。

この変態女が云うから、人殺し云々よりも後半のマゾ発言の方が強調されて聞こえてしまうのも仕方が無いと思う。というか後半の方が本心じゃ……。

「と、とにかく……。私は矢張り理解出来ない。育ちが違うのも、そもそも世界が違うというのもあるかもしれないが……。チュウヤは人を殺すような人間には見えないのだ」

「……」

どこまでも真っ直ぐな青い瞳。俺と同じ色の筈のそれに、後ろめたさを覚えてしまうのは何故だろう。

俺は別に快樂殺人者では無い。だが、殺さなければ生きてこられなかった。

羊だつてただの子供の集まりだ。働いて金を稼ぐことはできないから当然盗むか奪うことになる。盗めば追いかけられるし、奪おうとすれば戦闘になる。相手を殺すことは目的ではない。ただ、生きる為の手段でしか無かった。

やがて羊は俺を利用して。俺は羊以外に居場所がなくて。そんな妙な共依存の関係をぶち壊した太宰にマフィアに無理矢理入れられるまで、俺はただの空っぽの化け物だったのだ。

マフィアに入って、生きる意味を見つけた。自分がどうやっても上手いかなかった、”組織の長”を務める人間。

組織の本質を理解し、優れた頭脳で死線を掻い潜っていくその姿に憧れた。だが、そんなあの人にどこか似ていながらも正反対の印象を抱く相棒はどうしても好きになれなくて。何度もぶつかって殺し合った。

今も殺しは手段でしか無い。けれど、昔とは違う手段になっている。

昔は”生きる為”。今は、己の敬愛する首領を——そして、そんなあの人が愛するこの街を守る為。

「……まア、手前には云っても分からねエだろうなア」

「なっ!? 貴様、私の頭が足りないと言うのか!」

勇敢にも殴りかかってきた自称貴族令嬢をひらりとかわすと、ダクネスは不満そうに唇を尖らせた。つか短気過ぎねえか。今の一言でキレられるのは逆に才能だぞ。

「……考えてたら眠くなってきた。悪いなダクネス、俺は先に寝る」

「な……貴様は本当に、本当に! 私の扱いが荒いにも程が……。んっ……だがそれも悪くないな」

此奴本当黙ってくれねえかな。

電気を消して布団に潜り込み――

「おい手前何やってやがる」

「ふふふ、この私を無下に扱ったことを後悔させてやろうと思ってな」

金髪の変態女が覆い被さってきた。

……何故だろう。嘗て無い程の恐怖を感じるのは。

「なあ待て、まずは話し合いを」

「よくもこの私を馬鹿にしてくれたな? 代償は身体で払って貰うぞ」

「いやいや、それ普通台詞逆じゃ……。何か酒臭くね?」

「私は酒など飲んでいない。てきーらと書かれた瓶の中身を飲み干しただけだ」

「莫迦野郎、それだよそれ! っつかおい、おま、なんでこんな力強いんだよ。こんな夜中に異能なんざ使いたくねエぞ?」

「ならば使わずにされるがままにしているがいい!」

「なっ、おい莫迦ふざけんなああああああ!!」

その後、思わず110番通報をしたことで呼び出された市警の上層部である軍警に謝罪する羽目になり、その事がマフィア中に知れ渡って暫く任務に出られなかったのはまた別の話である。



「ダクネス、チュウヤが可哀想じゃないですか。突然こんなに力の強い変態に襲われたら誰だって通報しますよ」

「ち、力の強い変態……!? めぐみん、それは違う! 私が望んでい

る罵倒では無い！」

「もう罵倒を望むのをやめればいいんじゃないのか？」

「断る」

夜の帳が下りる頃。

俺、めぐみん、ダクネスは、再び三人で任務をこなしに来ていた。変態の度が過ぎるダクネスと睨み合いをしているが、本来ならばこんなことをしている余裕は無い程、今日の任務はかなり危険だ。この間の、ただ社長を殺せば良いという超絶イージーミッションとは訳が違ふ。

「な、なあチュウヤ。イケナイパーティに潜入だなんて、それはなんて私好みな……！　そう、きつと怪しいクスリを使った男どもが獣のような視線で私を舐め回すように見つめ……！　私をロープで拘束すると、『パーティは身体で楽しむモンだぜ』と言いなから——」

「マジで黙れや変態」

今まで会ったどの男のそれよりもキツイ下ネタを、上気した頬で荒い息を吐きながら恍惚として吐き出す此奴は本当にヤバい気がする。男の俺ですら聞いていて恐怖を覚えるのだから相当なものだと思う。

「パーティですか……私の爆裂魔法で全員爆死に追い込むのは駄目でしょうか」

「それは俺の殺人行為に文句付けてた奴の台詞じゃ無エだろ」

……とまあ、ふざけた会話をしているものの、今回の任務はぶつちぎりで荒事だ。

一週間かけて横浜から近場の海をぐるりと回り、再び横浜に舞い戻ってくる単純な航路。船自体は問題では無い。船の中で行われる”社交パーティ”が問題なのだ。

違法ドラッグ、人身売買、臓器売買、武器の密輸。日本の裏社会の犯罪事情を凝縮したようなパーティが、誰も手出しできない海上で一週間かけて行われるということ。

俺達三人は、そのパーティに潜入し、タイミングを見計らって『ある人物』を殺さなければならぬのだ。

もつと単純に云えば、パーティの主催者を殺す任務だ。

情報によれば、主催者は厄介な異能力者らしいが……。

「ああ、森コーポレーションからご来訪の方々ですね！ ええと、めぐみん？ ……様、ダクネス様、中原様となっておりますが……」

「おい、どうして疑問形なのか聞こうじゃないか！」

「きやあああ!!? ちよ、ちよっ！ どうして鈍器なんか持つてるんですか、しかも一応社交パーティーなので正装してきて下さいと……。……そちらの金髪の方。鎧を着て何をなさるおつもりですか？」

「手前からマジでいい加減にしろ！ 俺がさっきドレス渡しただろうがあああああ!!?」

……もうこれは、敵の異能力を気にする以前の問題かもしれない。

こうして、俺達三人の、俺にとっては史上最高に滅茶苦茶な任務が幕を開けた。

第13話 主催者探しの前奏曲（プレリユード）

船内は予想通り、高級そうな黒いスーツに身を包んだ男が七割、高級そうなパーティードレスに身を包んだ女が三割といった様子だった。

男の外見はホストのようだったり如何にもなチンピラ風だったり誠実そうな青年だったりと様々だが、女の方はどうにも娼婦のような雰囲気纏っているのは何故だろう。先程から女の粘つくような視線がまとわりついてきて鬱陶しい。

「チュウヤチュウヤ、かなり見られてますね。あ、あの女の人綺麗じゃないですか？ どうですか、タイプですか？」

「あのなあ、そういう目的で来てる訳じゃねえんだよ。大体、此処に来てる女は多分殆ど自分の身体と目当ての商品を交換するつもりだろうよ」

「なっ、か、身体……！ ……チュウヤ、まだ私は何も言っていないのだが、なぜそんな目で私を見るのだ」

「頼むからそのまま何も云わないでいてくれると助かる」

渡された鍵番号の客室まで向かう道すがら、男に甘い声で媚を売る女が掃いて捨てるほど居た。矢張り此処は”そういう”場所なのだ。めぐみんはともかく、ダクネスは放置しておく危険かもしれない。

「おい、どうして今私をとにかく棹に入れたのか聞こうじゃないか」
「だからなんで手前は人の脳内に割り込んでくるんだ？」

客室は三人で一部屋を使用する。マフィア本部ビルの俺の執務室を三人で過ごすのと同じ感覚だ。理由は勿論、此奴らを野放しにしておくと何を仕出かすか分からないから……ではなく、女二人をこんな場所に放り出すのは危険だからだ。別に此奴らを野放しにしたら船が爆発しているかもしか、気づいたら乗客全員からドン引きされていかもしれないとか考えた訳では無い。断じて。

「……さて。このパーティーの主催者を見に行きましょう」

「そうだな、どんな人間か把握しておくのが先決だろう」

客室に入り、少ない荷物を置き、慣れないドレスが窮屈らしい二人

が二つあるダブルベッドの内の一つに勢いよく腰掛けた。めぐみんの黒いドレスのフリルが、ダクネスの青いカーデイガンがふわりと揺れる。

主催者を見に行く、か……。

二人の言葉を聞いて、俺は一言。

「手前らには云ってなかったかもしれないねエが、主催者は身分を隠してこのパーティーに参加している」

「えっ!？」

なんでも、このパーティーの主催者は厄介な異能力者で、裏社会でも懸賞金を賭けられている。しかしまだ面は割れていないらしく、異能力と名前、ぼんやりとした外見の特徴のみが知られているのだとか。それ故に、自分が主催者だとノコノコ名乗り出て殺されないよう、ひっそりとパーティーに紛れ込んでパーティーの状況を監視し、パーティーの進行自体は特別に依頼した人間にやらせているらしい。そのことを二人に説明すると、二人は顔を見合せた。

「面倒臭いですね……チュウヤはどうやって探すつもりなんですか？」

「船の航行期間は七日間だ。最初の六日は地道に観察と聞き込み。異能者は雰囲気独特だから、上手くいけば外見の大まかな特徴と照らし合わせるだけで見つけられる」

「ではもし見つけられなかったらどうするんだ？」

「……あまり気は進まねエが、最後の手段だ。最終日にやろうと思ってる。……これはその時になってから云う」

「……」

首を捻るダクネスとめぐみん。この作戦を発表したが最後、二人は喜び勇んで最終日を待ち出すだろうからこの策は敢えて云わないでおくことにする。

「主催者の異能は、”キャンバスに描いた絵を現実にする能力”だ。但し、絵はプロ画家並の精度で仕上げないといけない。それが出来ない場合、異能は発動しない」

「ならば、一人一人に似顔絵を描いてもらうのはどうだ？」

「いやいや、ここはやはり爆裂魔法が放たれる瞬間の絵を描いてもらうのが一番でしょう。私が見れば一発で見分けられます」

「手前俺の話聞いてたか？ もしそれが現実になったらどうするんだ？」

「爆裂死……ええ、そんな華々しい最後ならば寧ろ望むところです！」

「莫迦野郎！」

俺に引っぱたかれた頭を押さえてベッドにダウンしたためぐみんを無視し、ダクネスに話を振る。

「まあ、方法は色々ある。何の為に三人もいると思ってんだ、手分けして探す為だろ」

「だが、このパーティーは……」

目を伏せて不安そうな表情を浮かべるダクネス。云いたいことは分かる、こんな危険なパーティーは幾ら異世界の冒険に慣れたこいつらでもキツイものがあるだろう。

「無理はしなくていい。もし危険な目に遭いそうであれば、このインカムで……」

「こんなパーティー、興奮するなと云う方が無理だろう！ 怪しいクスリで開発される女騎士……そして陵辱……ああどうしようチュウヤ、この状況に興奮してしまう私はもう駄目なのだろうか！」

「分かったインカムは要らねえんだな」

窓からインカムを投げ捨てようとした俺を、正気に戻ったダクネスが慌てて止めた。



「インカムは着けたな？」

「ああ」「バツチリです」

「やることは、主催者探し。異能力は先程云った通り。外見は……詳しくは明らかにされてねエが、茶髪の若い男らしい。目立たないならどんなやり方でもいいから、自分にできる範囲でやれ。インカムで連絡をとる」

「了解した」「分かりました」

「じゃあ——そっちは任せませー！」
まずは初日。

初日は大したイベントは無い。夕食は広間に集まって行うバイキング形式というだけだ。

客室から出て、ダクネスとめぐみんとは反対の方向に向かう。

「あの、そこのお兄さん」

ふと声をかけられて振り向くと、そこには艶やかな顔立ちの女が居た。

こちらを向いて微笑んでいる。……まあ、目的は恐らくクスリか闇商品か……。

断ろうとした直後、女は意外な一言を発した。

「貴方のことは知っています。ポートマファイア幹部の方ですよね？」

大丈夫、私は口は固い方なんです。……情報交換しませんか？」

「……拒否権は無エんだろ？」

女はすぐ傍の空の客室に俺を招き入れる。

……調査開始早々、波乱の予感がした。



「ダクネス、どうしますか？」

「そうだな……私は力には自信がある。いざとなれば相手を殴つても逃げ出せる筈だ。だがめぐみんは……」

「大丈夫ですよ、魔法使い職とはいえ私は高レベル冒険者です。普通の大人の男よりは力がある自信があります」

客室が多くある道へ進んだチュウヤとは反対の方向に進んだ私達は、広間ほどではないのだろうがそこそこ人を収納出来るスペースの部屋にやってきていた。数人の男女が仲睦まじく話しているように見えるが、その手には怪しげな白い粉が入った袋や大量の札束が握られていて。

「これは止めた方が良いのでしょうか……」

「貴方達、そこで何をしたいらっしゃるのですか？」

ダクネスに判断を仰ごうとした瞬間、ダクネスはダステイネス家のララティーナお嬢様の仮面を被ってその中の一組に話しかけた。

微笑を湛えた気品のある巨乳美女に、男の方は瞬時に目がハートになつた。

……何かいい策でもあるのだろうかと、あのダクネスに期待して事を静観していた私が馬鹿だった。

「あら、そのクスリ……良いですね。きつと貴方はこのクスリをその女性に飲ませた後、『覚悟はいいな』と彼女を下卑た視線で舐め回すように見つめ、薄いドレスを剥ぎ取ると……!」

「私の連れが大変失礼しましたっ!!」

紅潮した頬、荒い鼻息。豹変した美女の異常性に気づいた二人がダクネスから逃げ出す前に、私が先にダクネスを引っ掴んでその場から退散した。

……ごめんなさい、チュウヤ。早速やらかしてしまいました。

私は内心で、この船の何処かにいるであろう小柄な青年に土下座した。

第14話 天界から来た幸運の女神（レディーラック）

「手前は何が目的なんだ？」

「単刀直入に言うとう——」

人捜しです、と。

澄んだ声で、大きな瞳で俺を見つめるその女。近くで見ると、艶やかだと思っていた顔立ちは厚化粧によるものだと思わせられる。だが顔のパーツ自体は整っていた。化粧の仕方を変えれば映えるだろうに、何故元の顔の造形を態と不明瞭にするような真似をしているのか。

……人捜しか……。

「で？ 何故それを態々俺に云った。俺がマフィア幹部だと知ってるんなら、俺がそういう芸当に長けてる人間じゃねエことくらい分かるだろう」

「それは……私と貴方の目的が同じだから」

「つーことは、手前もこのパーティーの……」

「そう。主催者を探しています」

相手がカマを掛けてきた可能性も視野に入れ、敢えて目的の単語を濁すように云ったのだが、どうやら杞憂におわつたらしい。短い銀髪をサラリと振って彼女は口を開く。

「ですが、私は主催者を探すと同時に、見つかったはいけない人もいます。だから、貴方も承知の通り、似合わない化粧で変装しているんです」

「はーん……成程な」

紫色の瞳を煌めかせる女。

……しかし、これは困ったことになった。

此奴の目的は「主催者を捜すこと」。俺の目的は「主催者を殺すこと」。

もしも同時に主催者を見つけた場合……。

「悪いが、協力は出来ねえな。彼奴の異能力は厄介だ。のこのこ探してたら見つかって返り討ちに遭う。それなら俺は相手に見つかるより先に殺さなきゃならねエ」

「……っ、マフィアである貴方の言い分も分かります。ですが、殺すのはやめていただけませんか？ 殺されるのは困るんです。だって……ああもう！ もういいや！ もう！ 面倒臭い！」

女は先程までの憂いを帯びた困り顔から涙目の駄目な困り顔に変化した。

……何だコレ、とてつもなく既視感が。こういう駄目な雰囲気の間を、俺はここ最近で四人見かけた。

思わずジリジリと後退している。

「あのね、私は彼奴に大事な物を盗られたの！ あれが無かったら先輩達はずっとこの世界に縛られたままなんだよお！ いや違うか、あれで先輩達がこんな状況になってるから、あれを使わなきゃ元には戻れないの！ しかも私のせいじゃないのにまた私が天界規定破ったみたいな感じで収まりかけてるし……ねえ分かる!? 地上人の君にこの気持ち分かるかな!？」

「手前さっきから何云ってんだ！」

女は完全に本性を剥き出しにし、両手を握り締めたり開いたりしながら胡乱な目で俺との距離を詰めてくる。

その異常さに危険を感じて後退を続けていくと……。

——太腿の辺りに硬い感触。その感触がベッドのそれだと気づいた時にはもう遅かった。

「こうなったら力づくでも納得させてあげるよおおお!!」

「おい莫迦止める触んなああああ!!」

……どんなに綺麗な女だろうと、こんな表情で迫られた上に押し倒されたら恐怖心を抱く以外に何の抵抗も出来ないと思う。

軽くパニック状態に陥った俺に跨って自信あり気に笑った銀髪女は、左手で俺の肩を押さえ、空いた右手を掲げると。

「さあ、この私の技に何回耐えられるかな!? 『ステイール』っ！」「なっ……!」

刹那、彼女の右手が青白い光を発した。

おい待てそれは、と反論しかけて口を噤む。

……。

……………。

「……………早く返せこのアマ」

「……………えっと、ごめんね？」

彼女の右手には、『少年と子犬』のパンフレットが握られていた。

固まった笑顔でおずおずと差し出されたパンフレットを受け取り、スーツの上着の内側に仕舞う。

この映画は一度見て凄く気に入ったので、何時でもあの映画の内容を思い出せるようにとパンフレットを持ち歩いていたのだが…………。

「えっと…………ポートマファイアって犯罪組織なんだよね？」

「文句あんなら云ってみろやコラ」

今度こそ確実に哀れみの視線を向けてきた女に向かって枕を投げつけた。



「なあんだ、先輩達の知り合いなのかあ。早く言ってよね、もう」

「こっちの台詞だわ。何が悲しくて意味不明な愚痴吐かれてパンフレット盗られなきやならねえんだ」

『ステイール』を使える少年を見たという話をすると、女は全てを暴露してくれた。

自分はアクアの後輩の女神エリスだということ。そして、異世界では正体を隠し、盗賊の少女クリスとして活動している内に、佐藤和真らと親しくなったのだと。

「このパーティーの主催者が持っているのは、異能力なんかじゃない。でもって、私達の世界で通じるスキルや魔法でもない。彼奴はね、天界からあのキャンバスを盗んで下界に…………この日本に降りてきたんだよ」

天界で働いていたらしい下っ端の天使。故にエリス…………クリスもそいつの外見や性格を把握しておらず、特定して天界に連れ戻してキャンバスを奪うのが難しいと云う。

「あのキャンバスは天界で作られた遊び道具なんだ。天界はつまらないから、あのキャンバスに描いたことを下界のどこかに反映させて楽しもうっていう便利ツール」

「ただの迷惑ノートの間違いじゃねエのか」

「ある時、キャンバスが無くなってた。……かと思えば、この世界線の日本で、キャンバスを使って色々と暴れてる天使が見つかったんだよね」

「無視すんな」

クリスは俺の言葉を無視して話を続ける。

「しかも、あの天使は何だか知らないけど先輩達に恨みがあるらしくて。変だよねえ、天界にいたから関わりなんか無かった筈なのに。……で、キャンバスに先輩達の絵をちよちよつと描いて、この世界に召喚したってワケ」

そして今や裏社会で恐れられる絵画異能者って訳か。

確かにその説明だと合点が行くが……。

「何で手前は四人に見つかりたくないんだ？」

「あー……助手君、あ、佐藤和真さんのことね。助手君以外、私が女神だっことを知らないから。天使君と四人と同時に鉢合わせした時、私が女神だっバレたら色々面倒だなーって思っ」

「はーん……」

「……ねえ、どうしてそんな悪い顔してるのさ」

「手前、さつきは散々俺に嫌がらせしてくれたよなア？」

「あ、うん、本当にごめんね？ だからその顔やめてくれる？」

「……あの四人に手前の正体云いふらしたら貸し借りゼロじゃねえか？」

「うん、そんなことないと思いますやめてください。中原中也さんやめてください」

「今更女神ヅラしても無駄なんだよこのクソアマあああああ!!」

「待ってお願いだからそれはやめてええええ!!」

さつきまでの仕返しとして船内を逃げ回ってやった。



「そもそもダクネスとめぐみんしかこの船にはいないじゃない。四人全員に言いふらせる訳ないよ……君つてば本当に性格悪いね」

「マフィアにそれは褒め言葉だぜ」

「……君、なんか私が知ってるあの人にちよつと似てない？ ほら、助手く——」

「それは違うと思います」

あまりにも不名誉な一言をバツサリ否定しながら船内を歩く。

かなりの距離を歩いてきたが誰とも遭遇していない。他の乗客は何処に行ったのだろうか。

「困ったね。これじゃあ主催者どころか聞き込みすら出来ないや」

「ったく、何処にいやがるんだ……」

客室も一部屋一部屋ノックして回っているのだが気配ゼロ。どうしたものかと頭を抱えたその時だった。

「貴方が中原中也さんでしょうか？」

背後から肩に手を置かれて振り向くと。

——額に青筋を浮かべた、黒スーツのごつい男が立っていた。

第15話 海の向こうの迷探偵（ディテクティブ）

「森コーポレーションからお越しの中原様御一行ですね？ ……貴方が代表だとお聞きしましたが……」

「俺の連れが無礼を働き大変申し訳ありませんでした」

冷たく寂しい空気の漂う、船備え付けの牢獄にて。

牢獄の中で「ああ……これが投獄……味わったことの無い気分だ……！」とか云いながら悦ぶ変態と、「なんて言うか……ごめんなさい」と今回ばかりは素直な謝罪を口にして遠い目をする爆裂狂。

——そんな、莫迦ばかりやらかす俺の連れの前で、額に青筋を浮かべる巡回警備員に思いつ切り頭を下げた。



この船に来て二日目の朝。

格子窓から射し込む朝日を浴びても未だ眠りこけている問題児二人に向けて……。

「重力操作」

「ぬわあああ……っ!」

「何だ、何なのだ！ 何があったカズマ、アンデッドか、魔王軍か、セクハラの復讐に來た女性か!」

完全に制御された重力によって狙いを寸分違わず命中した輪ゴムは、爆裂狂の少女の悲鳴と変態女の意味不明な言葉を引き出すことに成功した。……ダクネスの言葉からは日頃の苦労がかなり見てとれる。佐藤和真はどれだけの問題児だったのだろう。否、過去形じゃないな。どれだけの問題児なのだろう。

太宰はあの餓鬼に結構苦労させられていると聞いたが……。

「俺だよ莫迦。おはよう問題児」

「誰が問題児ですか、紅魔族随一の天才と呼んでください。……とここでチュウヤ、昨日はあの後何をしていましたのですか?」

「正体がバレたらいけないから」と云って別行動をとることに決めたクリスと別れた後、警備員に連れられて向かった牢獄で変態とめぐみんに再会し、警備員に平謝りしたのが昨日。

そしてその後、減った人員分の仕事をしようと客船内を駆け回ったのだが……。

「ダクネス、痴女行為は本当に止めてやれ。「金髪の女怖い」って云いながら泣いてる男がそこら中に居たぞ」

「な、何……!?! だがカズマはいつも私にゲス顔でお仕置をしてくるぞ!」

「佐藤和真と一般人を一緒にすんな! 彼奴が凶太いだけなんだよ!」

本気で驚いた顔をしたダクネスに正論を叩きつける。と云うか、このパーティーに参加してる奴は全員犯罪者なんだけどな。その犯罪者を泣かせる程のド変態とは……。……もう想像しないでおくことにした。

全く、異世界人つてのはこんなのか居ないのか。

「それで、何か情報は得られましたか?」

「ああ、茶髪の若い男……。それでいて独特の雰囲気があったって奴を一人見つけた。客室は未だ特定してねエ」

「なあチュウヤ、ならもう任務成功なのか? ……私はもう少しこの牢屋に居たいのだが……」

「もう少しと云わず一生そこに居たらどうだ?」

「く……っ、その冷たい視線……。お前はカズマとはまた違う刺激を与えてくれる……っ」

「……」

鉄格子を壊してダクネスに殴りかかろうとした俺を、めぐみんなが慌てて止めた。



「へえー、マファイアつても結構大変なんだな」

「んー、あんなロリコンの組織でも、一応は”三刻構想”の一つを担ってるからね。いつかポートマファイアに牙を剥きそうな相手は早々に潰しておかなきゃいけないのだよ。……ところでカズマ君、働いてくれない?」

「断る」

俺の莫迦なパーティーメンバーは現在、中原中也と共に違法パーティーに乗り込んでいるらしい。

探偵社の平和さを見習って欲しいものだ、全く。

「カズマ君、探偵社今結構ピンチ。金欠なのだよ。平和だなんてとんでもない」

「残念だったな、俺の中では借金してない限り平和なんだよ」

「君の平和の基準独特すぎない？」

せかせかと動き回る探偵社員達。働けと促してくる包帯男。

……本当、一度アクアのせいで借金でもしてみたらいいと思う。

「かあずまあああああ!! き、さ、ま、は! 一体! 誰のせいで探偵社がこんなに忙しいと……」

「ふん」

「あっ!?!」

俺は国木田に背を向け、ソファの背もたれ側に顔を向ける。

誰のせいって、どっかの駄女神のせいじゃないでしょうか。

「何を云っている貴様! 確かに貴様は一度裁判で勝ったとはいえ、政府から目をつけられていることに変わりはないのだぞ! お陰

で見ろ、特務科から仕事が次々になだれ込んで……!」

「……」

耳を澄ますと、雑音の中に聴こえる声がある。

……やれやれ、あいつらも無事だといいいのだが、そうはならなさそうだな。

「聞いているのか佐藤和真! こうなったら力づくでああああああああっ!?!」

俺の腕を掴む国木田。

瞬間、空いていた腕でその腕を掴み返し、ドレインタッチで体力を吸って国木田を撃退した。

「ねえクニキダ、多分無理よ。こうなったニートは梃子でも動かないわ。これがニートの本気よ」

「くそ……小娘、貴様はどうか出来ないのか……」

「できるわ」

「出来るのか!？」

外野の会話を無視してひたすらに耳を澄ます。

……静かだ。凧いだ海のように静かだ。何の音もしない。

心地良さに思わず瞼が落ちてきて――

「カズマさんカズマさん。私だけ働かされるの嫌だから、仕事してくれと嬉しいんだけど……してくれないって言うなら、夜中私の隣でゴソゴソやってるのを皆にバラして」

「よーし働こうぜ! やっぱ働くのが一番だよなあああああ!!」
覚えてろよこの駄女神!



牢から出て広間へ向かう。記憶が正しければ、今夜は派手なバイキングをやるとかだったハズ。

ならばバイキングの前に男の素性がある程度特定しておいて、バイキングの際にどさくさに紛れて殺してしまえばいいのだ。

「すいません。茶髪で若い、独特の雰囲気のある男のことを知りませんか?」

「茶髪……? 独特の……?」

廊下に備え付けられたソファに座っていた女が顔を上げて此方を見る。

……ん?

「もしかしたら、それは鷹野さんのことじゃない? 鷹野さんならほら、525号室だから、用があるならチャチャツと行ってきなよ」

「え、ええ……ありがとうございます」

営業スマイルを浮かべてその場から立ち去る。525号室ね……。早足でその部屋を指しながらも、瞼の裏にはくつきりと先程の女の顔がこびりついていた。

何故だろう。初対面の筈なのに、初対面の気がしなかったと云うか……。黒髪黒目の、何処にでも居そうなごく普通の女だった。強いていえば銀縁の洒落た丸眼鏡が印象的だったが。

「……チツ」

どうにも上手く進まない任務だ。舌打ちをして再び歩き出す。

第16話 見えない敵との騙し合い（ライターゲム）

一夜明け、三日目の朝。

「どうかな幹部様、聞き込みの状況は？」

「見て分かんذار、最悪の状況だよ……」

クリスの客室にて——俺はクリスと向かい合い、ソファに座って考え込む。

——昨日の『鷹野』は違った。主催者では無かった。何処にでも居そうな小物の犯罪者といった雰囲気だった。あれが異能者だと云うのなら樋口も異能者ということになるだろう。いや、寧ろまだ樋口の方が異能者だと云われても納得出来る。

「で、手前はどんなんだ？」

「私も船を回って色々気づいたことがあるんだよね。まずひとつは」

「待て」

俺はクリスの言葉を遮った。怪訝そうな顔をするクリスの目を見て云う。

「もう正体がどうか云ってる場合じゃねえだろ。……今からめぐみんとダクネスの所に向かって、集めた情報を二人に提供する。考えは多く集まる方が良い」

「えっ……いやまあそうだけど……でもチュウヤ君、自首するには早過ぎるんじゃない？」

「莫迦野郎、誰が彼奴らと一緒に牢に入るつつつたんだ！ 今情報を二人に提供するって云ったばっかじゃねえか！」

俺に怒鳴られたクリスは「うう……でも正常なツツコミが嬉しい……助手君はいつもセクハラしてきたから……」とか何とかかなり怪しいことを口走っている。佐藤和真の周りにはこんなものしかないのか？ というか佐藤和真って大物過ぎねえか？

「うーん……。……仕方ないなあ。」正体”バレたらキミが責任

取ってよね?」

「バレねえようにすりやいいんだろ。手前の演技に乗っかる。心配すんな」

ということ、不安なクリスを連れて牢へ向かう。牢は本来、パーティーの平穏な進行を阻害するような真似をした、凶悪で凶暴人間が入れられる場所なのだが……。ま、まあ、ある意味では凶悪だし凶暴だし、ダクネスを牢に入れた警備員の判断は正しいと云える。と思う。

それにしても、いくら彼奴が悪いと云っても、正義感の強い彼奴を此処にいつまでも閉じ込めておくのは流石に可哀想だ。早く警備員に話をつけて出してやるか、と頬を緩めた時だった。

「く、くうっ……！　なんて、なんて縛られ心地の良いロープ!! ……めぐみん、何故このような物を持っているのだ?」

「ええとですね……。……貴女のけしからん身体を締めつけてあげるためですよ!」

「な……。…！　そ、そんな……。…！　私は、私は一体どうなってしまうんだ……。…」

「何もさせねえに決まってるだろ」

「あつ」

牢屋の前に立った俺とクリスに冷めた目で見つめられたドS娘とドM令嬢は、ぴしりと効果音がつきそうな勢いで固まった。



「えつとね、エリス様のお告げを受けて、目が覚めたらこの世界に居たんだ。やることはエリス様に指示されてたからあんまり苦じやないよ……。難しくはあるけどね」

俺とクリスは今日までに得た情報を全てダクネスとめぐみんに伝えた。二人は先程のふざけた遊びを中断して真剣な表情で話を聞いていたが、一通り話し終えるとめぐみんが口を開いた。

「その天使……。…どんなに雰囲気独特だろうと、その神がかった力を持つキャンバスがあるのなら、雰囲気ぐらいは自在に変えられるのではないですか?」

「……あつ」

「気づかなかったんですね？ そうなんですね？」

「鈍くてすいませんでした」

……一瞬、めぐみんの瞳に鋭い光がよぎった、ような気がしたのが気のせいか。

めぐみんははあと溜息をつき。

「……貴方達だけでは少し時間がかかりそうですね。仕方ありません、私も行きます」

「はア？ 行くつつつても、手前今牢屋の中だぞ？」

問いかけながら考える。もしかしたら俺に頼むつもりなのかもしれない。そうしたらそのときは異能でサクツと鉄格子を歪曲させて隙間からめぐみんを出してやろう。

……しかし、めぐみんの判断は俺の予想の斜め上を行った。

「ダクネス、 出番ですよ」

「うう……仕方が無い……」

呼ばれたダクネスは頬を赤らめて鉄格子の前に立つ。そして鉄格子を握り締め……！

「ふんっ！——バキッ。

嫌な音と共に、鉄格子が折れた。

「……」

「……よし、これで良いですね。さあ行きましょう」

「めぐみん、ダクネスってこんなに力強かったんだね……知ってたけど知らなかった……」

「……異能も無いのにこんなに力が強い女が居てたまるかああああああ!!」

俺は異能で鉄格子を蹴り碎いた。

音に気づいてやって来た警備員に全力で土下座した。



「ただ聞き込みをするだけではダメですね。こうなったら客室を一つ一つ点検して、キャンバスがあるかどうかを確認していきましよう」

「よし分かった。クリス、手前はめぐみんと組め。中に客が居て、中に入れてくれないようであれば強行突破してもいい。ただ、殺すのはやめとけよ。後処理まで手を回せる可能性は低い。バレる確率が高くなる」

「オツケー。じゃあ行こうかめぐみん！」

「ええ。高レベル冒険者の力を見せてやります！」

意気揚々と客室フロアに向かった二人。……めぐみんは力が強いアピールをしているが、本当に大丈夫なのだろうか。もしもの時は”ステイール”やその他スキルを持っているらしいクリスがいるから大丈夫……か？

七階建ての豪華客船。その内五階と六階が客室になっている。五階はめぐみん達に向かわせたので、俺が向かうのは六階だ。

六階にある客室は二十。一日で調べ切れるだろうか。

……調べ切れなかったら明日も使うまでだ。脳内をチラつく弱音を振り払い、最初の客室の扉をノックする。

「……どちら様でしょうか？」低い。……男の声だ。

「警備の者ですが。重要危険物の所持者がいると発覚しましたので、客室点検にやって参りました。良ければ中へ入らせていただけないでしょうか」

「嫌だね。何が重要危険物だ、このパーティーでそんな単語は子供の言葉遊びも同然だろう」

「……拒否されるのですか？」

「当然だ」

「——なら仕方ねエな」

次の瞬間、異能は使わずにドアを蹴破った。錠の破壊音を置き去りにし、ドアを破った勢いのまま、開かれたドアの正面に立っていた細身の男の腹に全体重を乗せた蹴りを食らわせる。

男は声すら出せずに失神した。

「はあ……さて、部屋の中を点検するか……」

こんな所でも結局最後は強硬手段に走るしかないという事実苦笑しつつ、部屋の奥へ足を踏み入れようと――

「——『エクスプロージョン』！」
船が振動し、遠くの海上で核爆発かと思紛うような大爆発が起きた。

……聞き間違いでなければ、爆発音の一瞬前、聞き慣れた呪文の詠唱が聞こえたような気がしたのだが。

見間違いで無ければ、美しく煌めく光の筋がワンフロア下の客室から遠くの海上に伸びて炸裂したような気がしたのだが。

「彼奴ら早速何やらかして……。……まあいいか」

俺は二人を見捨てて自分の仕事に集中することにした。

第17話 インカム越しの愛情表現（コミュニケーション）

「……つまりめぐみんはチュウヤにまで見放されたということだな」

「おい、そこは私の能力を見込んで分かれて行動させて貰ったと言って貰おうか！」

冷たく暗い牢の中。

私はダクネスに掴みかかってそのうるさい口を強制的に塞いでいた。



「二つ目の客室に入ることには成功したものの、中にいた男が私に向かって「まだ子供なのにこんな所に来てるのか……」と哀れみの視線を向けてきたので、これは危険だと判断して爆裂魔法で牽制したのです」

「何をどう危険だと判断したのかさっぱり分からないのだが……。その人はただめぐみんの身を案じてくれただけじゃないのか？」

「いいえ、あれは危険な男の目でした」

「……そ、そうなのか……？」

ダクネスはまだ納得がいていないような顔をしているが、まあいいだろう。

やっぱり貴族のドM令嬢はちよろい。

「めぐみん、何だか馬鹿にされているような気がするのだが気のせいかな？」

「ええ気のせいです」

「そうか……」そういうところですよ、お嬢様。

「……で、今頃はクリスが客室のチェックをしてくれていると思うのですが……」

「なら安心だな。此処から出られないのは悔しいが、クリスに任せていれば安心だろう」

安堵したような表情で言ったダクネス。

……本当に、これだから世間知らずのお嬢様は。

私は思わず溜息をつく——チュウヤから貰ったインカムがついている右耳を撫で、”もう片方の”インカムがついている左耳をなぞり。

『……めぐみん、お前の言いたいことは分かる。やっぱりダクネスは世間知らずのお嬢様のままだなあああああ!!』

そのインカムのスピーカーをオンにした。

途端に大音量で響き渡ったのは、馬鹿の癖に悪知恵の効く、けれど意外と優しい——そんな、私の愛しい恋人の声。

明らかに此処にいるはずのない人物の、聞こえるはずのない声に、世間知らずのお嬢様はギョツと目を見開いて。

「か……カズマ？ お前、カズマだな？ それはインカム……ちよ、ちよっと待て。一体どういうことだ？」

「実はですね——」

そして私は話し出した——このパーティーに来る前日、何があったのかを。



『『エクспロージョン』っ！』

勢い良く突き出した杖の先から稲妻の様な紅い閃光が迸り、数十メートル先の巨大な岩に衝突。次の瞬間、岩は原型を留めずに粉々に砕け散った。

この爽快感。達成感。紅魔族一の天才と呼ばれた私は、ネタ魔法だと馬鹿にされ続けるこの魔法しか使ったことがない。

……けれど。こんなネタ魔法を最強の魔法に昇華させてしまった私の恋人は、頭が良いのか何なのか。発想がぶっ飛んでいるのか。何にせよ、私は今、カズマと……パーティーの皆に感謝している。

「今日の爆烈は何点ですか？」

「んー……まあこっちの世界ってちよっと魔力の集まり悪いっぽいし、九十点くらいじゃね？」

「うう……それを抜きにしたら？」

「八十」

「くっ……精進します……」

横浜から少し離れた場所には、こんな田舎もないわけではないようだ。

——今日は仕事（という名のチュウヤへのストーカー）が無かったので、恋人であるカズマと爆烈デートに勤しんでいる。

ぶっ倒れた私を背負い、歩き出すカズマ。いつもの事だけれど、いつもと違うのは、此処がアクセルではないということ。

此処は横浜。武装探偵社、ポートマフィア、異能特務科……私の琴線に触れる名前の組織がいっぱいある科学の世界。

「めぐみん、ポートマフィアでの生活はどうだ？ ダクネスは痴女行為で迷惑かけたりしてないだろうな」

「そこは普通ダクネスを心配する流れではないのですか？」

「いやお前、考えても見ろよ。武器を持った男のマフィア。鎧を着たダクネス。相手に興奮するのはどっちだ？」

「ダクネスですね」

「その通りだ。あの変態令嬢はマフィアに興奮して襲いかかる……ああ本当にすいません、うちのエロセイダーが本当にすいません」

……なんか、こうして見るとカズマも結構苦労しているのかもしれない。

変人のアクア。変態のダクネス。

やはりここは、常識人かつ恋人の私が支えてあげなければ。

「……ニヤニヤしてるけどどうしたんだ？」

「い、いえ、別に。……ところでですけど、マフィアだから人殺しが正当化されるというのはおかしいと思いませんか？」

「唐突だなおい。……まあ、人殺しが良いことだとは思わないけどさ。この世界の事情は俺達の世界とは違うんだろうし、マフィアに殺されるような人間にロクな奴は居ないだろ」

「ですよねえ……」

無理だと分かっている。馬鹿だと思われても。

それでも私は——私達は、チュウヤに知ってもらいたい。

人を殺すことの重み。人が死ぬことの重み。

アクアが簡単に蘇生してしまうその命に、どれだけの価値があるのかを。

「あんま深く考えんなって。それより、俺達は一刻も早く元の世界に戻る方法を探さないとね」

「そう、ですね……」

「……」

チュウヤと過ごした短い時間。チュウヤだけじゃない、コウヨウという綺麗な女性に、タチハラという少年。ヒロツという渋くて格好良いいお爺さん、黒くてかっこいい暗殺者のギン。美人さんだけど残念なヒグチ、私と近い感性を持っている気がするアクタガワ。

気づいてしまった。……マフィアにいるのは、悪い人ばかりではないことに。

「……はあ。つまりお前は不安なのか？」

「……そう、かもしれません」

「じゃあ、はいこれ」

「……はっ」

左耳にギョツと何かを押し込まれた。けれど不快感はあまりない。

「ちよ、ちよつと。なんですかこれ」

「困った時はこれに向かって喋れ。お前を警察に連れていくかどうかちちゃんと判断してやるから」

「おい、それはどういうことなのか聞こうじゃないか！」

私が振り回した杖がカズマの後頭部にヒットした。



「……とまあそういうわけで、このパーティーが始まってからインカムのスイツチを入れました。つまり、パーティーが始まってから私の身の回りで起きたことはカズマがインカム越しに全て把握しています」

「か、カズマ……凄いな貴様、ここまで予期していたのか？」

『や、最初はめぐみんとダクネスがどの警察署に向かうのか確認する為だったんだけどさ、結果オーライじゃね？』

「ぶっ殺」

インカムを振り回すと、ひゅんひゅんという風切り音が不快だったらしいカズマが慌てて言った。

『まあ待ってって！……とりあえず、インカムから聞いてて分かるのは、お前達が見たクリスは偽者だってことだ』

「その通りです」

「なっ……!?!」

『だって、考えてもみろよ。……クリスはダクネスと長い付き合いなのに、鉄格子折ったことにあそこまで反応するか?』

「………た、確かに……」

徐々に夢から覚めたような顔つきになっていくダクネス。

恐らく、天使はキャンバスを使って外見をクリスに変え、エリス様からのお告げという最もらしい理由をつけてチュウヤの前に現れ、必然的に私とダクネスの前にも姿を現した。でもチュウヤは本物のクリスを知らないので偽者だとは簡単に見抜けない。

『じゃあ、そこから脱出してクリスとチュウヤを追え。二人とも、単独行動と問題行動は慎めよ。そのパーティー、一応危険なヤツだからな』

「わかりました」……なんか、つくづく私達は信頼がないのだなあと思わされてしまう。

『——あ、めぐみん、あのさ』

「はい？　なんででしょう？」その真剣な声音から、何となくスピーカーを切った方がいいのだと察し、スピーカーをオフにする。これでダクネスには聞こえない。少し不思議そうな表情だが、まあいいだろう。

『……その任務終わったら、ちよつと言いたいことがあるんだ』
「……っ！」

照れたような声で。秘密めいた暗号を唱えるように。短く言い残してインカムを切ったカズマ。

……任務、終わったなら、言いたいこと……。

——その時、浮かれていた私は気づかなかった。

ダクネスがどんな表情で私達の秘密の会話を見つめていたのか。
こうして横浜の夜は更けていく……。

第18話 自殺希望の聖騎士（クルセイダー）

一夜明け、翌日……つまり四日目。

流石は違法なパーティー。参加人数は少なくはないが決して多くはないらしく、これだけ廊下を走り回っていても誰にも遭遇しない。今はそれが助かるのだが、逆に少し不気味でもある。

「めぐみん、あと何階だ!？」

「ええつと、今三階の廊下なので……あと二、三階ですね。どちらに居るかは分かりませんが……」

ああ、団体行動しなければならぬのがもどかしい。二手に分かれて探した方が絶対早いだろうに。

けれど、どれだけ二手に分かれたくても、それはできない相談だ。……だって、恋人が私のことを心配してくれているのだから、できるはずないだろう。

「——待ちな、そこの君たち」

「!？」

廊下の端に設置されていた赤いコーナーソファ。そこに座っていた黒髪黒目の女の人がすっと立ち上がり、私たちの行く手を塞ぐように廊下の真ん中に仁王立ちする。

「な……なんですか貴方!」

「いや待てめぐみん、この声は——」

「ふふふ……流石はダクネス。普段とは全然違う見た目なのに気づいてくれるなんてね……!」

そう言ったかと思うと、女の方は背後から取り出した黒い布をバサリと広げ……!

「あたしはクリス。本物のクリス。女神エリス様から指示を受けてこの世界にやってきたのだ——! ……ね、ねえ、なんで二人ともそんな目であたしを見るの? そんな、親の仇でも見るような……つてああっ、やめて——! 髪引っ張らないで、変装じゃないから! 本物だからっ!!」



「よく考えたら、クリスの一人称は『わたし』ではなく『あたし』だな。すまないクリス、さっきまであのクリスが偽者だと見抜けなくて……」

「ううっ……折角のパーティーだから髪の毛を整えてきたのに……ぐすっ……」

「全く、エリス様から指示を受けてきたのだというのに、そんなザマとは情けないですね。髪の毛ひとつで大袈裟な」

「ねえ、この髪キミがボサボサにしたんだよ!? 何を真面目な顔してバカなこと言ってるの!?!」

そして本物のクリスは話し始めた。

「あの天使、あたしの姿に化けて、話に信憑性を持たせることで、中原中もつという強い後ろ盾を得たかったんだよ。チュウヤはこの世界の裏社会じゃ有名な異能者だからね」

「だが、どうしてそんなことをしているのか分からんな」

「そうですね……偽クリスからちよこつと聞いた話だと、カズマに恨みがあるのかなんとか……」

「でも、それも偽者の自談だからね。事実かどうかは分からないよ?」

誰も居ない廊下を、三人で呑気に話しながら歩く。今私達が立っているこの船のどこかで、怪しいクスリのやり取りだとか、人身売買だとかが行われているとはとてもじゃないが思えない。

「……ということだそうですが、聞いていましたか、チュウヤ?」

「!?!」

驚く二人を尻目に、右耳のインカムから返事を待っていると……。

『——なるほどな。そういうことか、クソ天使。いい加減に正体見せやがれ』

『ふ……バレてしまつては仕方が無いな。だがこの状況、貴様に手出しはできません!』

『この野郎! 人間じゃねえからつてんなこととしていいんでも思つてんのか!』

『さあ、こいつを返して欲しければオレのここでの行動の全てを見

逃すんだな!」

『くそ、あつ、ちよ待つ……。……あああああああああ
あーっ!』

「……………」

切羽詰まった、インカムの向こうのチュウヤと偽クリスの会話に、
ダクネスもクリスも何となく状況を理解したらしい。

「凄いなめぐみん。今の私達の会話をインカム越しにチュウヤに伝
えたのか」

「ええそうです。さつきカズマにもそうしたように」

「えっ、めぐみんってば助手君とも繋がってるの? やるうー!」

……ダクネスの表情に影が射したように思えたのは私の見間違い
だろうか。

というか、チュウヤが今どんな状況にあるのかぼんやりし過ぎてい
る。詳細が全く分からない!

「チュウヤっ、チュウヤ! 今どの客室にいるのですか!」

『……503』

「ごーまるさん! 二人とも、五階に向かいますよっ!」

「了解!」

私達は全速力で階段を駆け上がった!



「……………」

「チュウヤ。天使に人質を取られて逃げられた、という判断で良い
……のだな?」

中也は紙のような顔色をしてそこにいた。

豪華な客室の窓際。海を覗くことができるその分厚いガラスにも
たれかかり、焦点の定まらない瞳でさつきから一心不乱に……。

「あはは……母さん……俺の帽子は一体何処へ行ってしまったので
しょうか……」

「帽子を取られたぐらいで何を言っているのですか」

——帽子を人質に取られて精神崩壊した、ポートなんかの自称幹
部の頭を杖で殴りつけた。

「どうしようめぐみん、今のチュウヤは私が惚れそうなレベルで駄目男だ！」

「もう貴方は黙っていてください」

チュウヤの異能力は重力を操る、らしい。派手に使っている場面を実際に見たことはないが、その異能がどれ程強力なのかは本気で理解出来る。だからこそ、天使を捕まえる上でかなり頼りにしていたのだが……。

「うわあああああああん！ 俺の帽子がああああああああ！！」

「わっ、ちょ、窓叩かないで！ キミ力強いんだから、割れちゃう！

ああ！ 窓ガラスにヒビが……！！」

「くっ、お、落ち着けチュウヤ！ それはなんだか私が望む駄目男では無いぞ……！！」

放心状態から一転、泣き喚いて窓ガラスを叩き出した自称なんとか遣い。

……この分だと、帽子を返してもらうまで使い物になりそうにない。

「仕方ありませんね。クリス、ダクネス。今日一日だけ待って、作戦を練りましょう。あと、一日待てばチュウヤが元に戻るかもしれないし」

「……それもいいんだけどさあ、めぐみん。まずはこの窓を直す方法を考えよう」

私は綺麗に無くなっている窓、再び放心状態になっているチュウヤ、慌てるダクネス、諦めたような表情のクリスを順番に眺めると……。

「待てめぐみん、爆裂魔法の詠唱を始めるな！ ああもう、チュウヤはこんなで、めぐみんもこんな……！！ ああ、この状況まで楽しくなってきた私はもう駄目なのだろうか……」



その日の夜。

……帽子を盗られたことはショックだったが、今はもう平気だ。腑

抜けている暇などない。俺には任務があるのだ。

俺達は客室を分けて泊まることになった。なんでも、俺が窓ガラスを異能で吹き飛ばした部屋の主は今朝売られたばかりなのだ。悲しい裏社会事情だ。

俺が窓ガラスを吹き飛ばした部屋に俺一人。元の部屋に女三人。変なやつらだが、性別から考えてこれが妥当だろう。

スマホで首領に報告のメールを送っていると……。

「……チュウヤ。少しいいか？」

「ああ？」

ドアをノックして部屋に入ってきたのは、ネグリジエ姿のダクネスだった。

ダクネスは何故か暗い顔をしている。

「何なんだ、こんな時間に。『私を罵ってくれ……！』とかつまらねエことほざきやがったら、その空いてる窓から海に投げ落とすぞ」

「ん……っ！　そ、それも中々……」

「手前！」

「……いや、今回はそんな用事では無いのだ。少し頼みがあつてな」

「はア……？　頼みだア？」

どうせろくでもない頼みなのだろうと身構えると、ダクネスは決意したように顔を上げ。

「私を……私を殺してくれ」

瞬間、俺は飲んでいた珈琲を噴き出した。

第19話 重力遣いと一夜の恋（ワンナイト）？

自称貴族の娘、異世界で変態クルセイダーをやっていたと云う金髪の女は云いました。

「私を……私を殺してくれ」

「……手前、遂にドMだけじゃ飽き足らず自殺が趣味の駄目人間になりやがったか……」

「ち、違う！ いや、私の言い方が悪かったかもしれないが……そういうことでは無いのだ！」

「じゃあどういふことか云ってみろやコラ」

するとダクネスは再び暗い顔になり。

「……………私の、恋心を殺してくれ」

「……………は？」

——聞いてみれば、意外とちゃんとした理由だった。

「お前には言っていなかったが……私はカズマのことが好きだ」

「ヘエ……あんな男のどこがいいんだか」

「最初は、彼奴が私好みの駄目人間だったから惹かれていったのだが……」

聞き捨てならない発言をした後、ダクネスはふふつと笑い。

「彼奴は弱い。ただの冒険者ではない、職業としての”冒険者”

……まあ簡単に言えば、クルセイダーの私は騎士系統の上級職ということになるのだが、冒険者はあらゆる職業の最下層の職業だ。最弱職というヤツだな」

「お前が上級職ってことが驚きだよ」

「……………なのに彼奴は、冒険者の特性を逆手にとって色々な職業のスキルや魔法を覚えて……私達に指示を出し、自らも動きながら魔王軍の幹部を次々に葬って。私が貴族の領主と結婚させられそうになった時なんか、領主の目の前に札束を撒き散らし、私を結婚式場から攫ったことだってある。力だけならばめぐみんにも及ばない程の弱さなのになぞぞ？」

「おい待て、十四歳の女に力で負ける男ってヤバくねエか？」

「まあめぐみんもああ見えて高レベルのアークウィザードだからな。……そう。私は段々と、あの弱さでありえないことばかり成し遂げてしまう彼奴そのものが好きになっていた」

普段は変態で、口を開けばDM発言が飛び出すダクネス。

鉄格子を素手で折ったダクネス。

そんなダクネスが、瞳を潤ませ、真剣な表情で恋心を語っている。……俺に殺しを止めるなどと莫迦な提案をしてくるぐらいなのだから、根は純粹で真面目なのだろう。

「だが、彼奴はめぐみんと付き合っている。そして私は彼奴に一度告白してはつきりフラれている。だからこんな私が彼奴に何かする権利は無い。二人とも私より年下だし、尚のこと横取りだの邪魔だのという真似はできない」

ダクネスの声が段々と震え始める。……これはもしかや。何だかとてももなく嫌な予感がする。

「なのにつ……なのに、めぐみんがカズマの名前を出す度に、カズマと秘密の会話をする度に、私の心はどうしようも無い嫉妬で満ちてしまうのだ！ どうしてそこにいるのが私ではないのか。どうして私ではダメなのか。何度考えても分からないし……こんなことを考えってしまう自分が嫌になる……っ」

——とうとう、切れた。

その青い瞳から一筋涙が伝った瞬間、次々に大粒の涙が零れ落ちる。ダクネスは顔を両手で覆い、しゃがみ込んで身体を震わせた。

……俺は恋愛をしたことが無い。

幹部になる前まで、自分は人間ではないのだから真つ当な恋愛などする意味も必要も無いと思っていたし、人間だと分かった今であっても、マフィアであるという事実が重くのしかかってきて、誰かを心から愛する気になどなれない。

だから、佐藤和真を純粹に愛し、叶わない恋に涙する目の前の女が、ひどく綺麗なものに見えても仕方が無いだろう。

俺は黙ってダクネスを立たせ、近くにあった椅子に座らせる。その間もダクネスはただ泣きじやくっていた。

「……今お前はそんな状態だから答えたくなければ答えなくていいんだが。……それで俺に恋心を殺してほしってワケか。どうやって殺してほしいんだ？ つーか恋心を殺すなんて方法あんのか？」

「……………多分、ひとつある」

暫くの沈黙の後、嗚咽混じりの声でダクネスが云う。そして無言で立ち上がり…………。

「…………ツ!？」

——俺の肩を強く押した。

先程まで傷心状態で泣いていた女の突然の奇行に、俺は為す術なくベッドに倒れ込む。背中とぶつかったスプリングが軋み、ギシツと嫌な音を立てた。

すぐさま体勢を立て直して反撃に移ろうとする前に、素早く俺の両肩と両太腿をそれぞれ手の平と膝で押さえつけたダクネス。…………この位置を押えられては上手く動けない。いや待て、いくらこの位置を押さえられたからってこんなに動けないわけが…………。

…………。

「おい、お前太つてない癖になんでこんな重いんだよ…………！ まさか俺より重いんじゃない…………」

「し、失礼な！ そんなわけ…………ない…………と思う…………」

「自信なさそうだな」

「うるさいー!」

というかこれはどういう事だ。混乱していると、ダクネスがずいっと顔を近づけて。

「私を抱け」

「……………ダクネスさんすいません冗談キツイです」

「なんなんだ貴様！ ヘタレか！ マフィア幹部ともあろう者がそんなヘタレで良いのか！ まさか童貞なのか！」

「違えわ莫迦！ 何が悲しくて手前みたいなドMとワンナイトしなきゃなんねえんだ！ つーか俺達このパーティーである天使捕まえなきゃならねえんだろ!? だったらこんなことしてる暇無いだろが…………!」

「言ったな!? 捕まえると聞いたな!? 殺さないんだな!」

「もうめんどくせえんだよ手前はああああああああ!!」
「しかしまずい。このままだとダクネスに襲われてしまう!」

打開策を考えている間にも、ダクネスは勝手に俺の服を脱がそうと
……。

「……なつ、」

「ー」

そうか、そういうえばこの手があったか。

ダクネスが怯んだ隙に『ソレ』を握ると、ダクネスの首元に突きつ
けた。

「退け。死にたくなければな」

——俺のベルトに手をかけたダクネスが目にしたのは、ベルトのウ
エストポーチに入ったナイフだった。

その鋭利で危険な輝きに一瞬目を奪われたダクネス。俺はそのナ
イフを抜いたのだ。

「……そんなに私が嫌か? 一応満足はさせられると思うのだが
……」

「そーいうことじゃねエよ。過去の恋愛を忘れてたくて襲いかかって
くるような痴女はお断りだって云ってんだ」

「誰が痴女だ、誰が! ……それに、」

そんなに私を甘く見てもらっては困る。

ダクネスは不敵な笑みを浮かべると、上体を逸らしてナイフの届く
範囲から首を脱出させると同時に、俺のナイフの刃を素手で掴んだ!

「おい莫迦、怪我……!」

するぞ、と云いかけて言葉を呑み込む。……ダクネスの掌には傷ひ
とつついていない。

「悪いが、硬いのが取り柄のクルセイダーなのでな。こんな危険な
物は捨ててしまおう」

「あっ」

ダクネスはナイフを取って投げ捨て、再び俺を押し倒し……!

「ダクネス何やってんの!」

「この痴女どうにかしてくれクリス！」
俺は部屋の扉を開け放ったクリスに全力で助けを求めた。

第20話 世界を救った冒険者達（ヒーローズ）

煌めく朝日が顔を出す——パーティー五日目の朝。

「はあ……全くもう、ダクネスってば。気持ちは分からなくもないけど……チユウヤを巻き込むのは良くないよ。それに、そんなことしてめぐみんにそれが知られたらどうするつもり？　めぐみんきつと悲しむよ。自分のせいにしちゃうかも」

「う……すまない、少しどうかしていた……チユウヤ、本当にごめんなさい……」

「……まあいい。とにかく、出来れば今日中にカタをつけたい。昨日盗られた帽子に発信機を仕込んである、それを頼りに追うぞ」

項垂れるダクネス、悲しげな表情のクリスを連れて、めぐみんを部屋に迎えに行く。めぐみんは不思議そうな表情で俺達三人を見ていたが、クリスが「めぐみんが寝てる間にボンツてなったら嫌だなって思っただけ部屋を移った」と言い訳すると目を紅く光らせてクリスの首を絞めにかかっていた。この分だと昨夜のことはバレないだろう。

「ところでチユウヤ、相手は天使ですよ？　発信機で追跡できるとはいえ、対峙した時にまたやり込められたらどうする気ですか」

「いや、二度目はねえ。……やられる前に殺る。それだけだ」

俺の言葉から滲み出ていた僅かな殺気を受け、俺以外の三人がぞくりと身体を震わせたのが分かった。

——否、めぐみんだけはフツと口元を緩めると……。

「そう言うと思っていました。……チユウヤ、私達の目の前で堂々と人殺しだなんていい度胸じゃないですか。今回はさせませんよ」

「ああ？　手前が俺を止めるって？　俺も舐められたモンだなア、手前の爆裂魔法如きで死ぬんでも思ってたのか？」

めぐみんの耳がピクリと動く。……これはハツタリではない。恐らく、”汚濁”状態の俺ならば余裕で耐えられるだろう。

だがめぐみんはそれでもなお余裕の笑みを崩さない。

なんだ、何があるんだ？　それ程までに此奴が平静を保てる何かなんて……。

「こんにちは中也さん」

「うおおああああああ!？」

次の瞬間、背後から現れたジャージ姿の少年に蹴りを食らわせた——と思ったのだが、焦りながらも正確に振った筈の足先はヒュッと空を切る。どうやらかわされたようだ。

「手前……佐藤和真か。めぐみんが呼んだんだな？」

「ご名答。えーっと、中也って呼ばいいんだっけ？」

ごく普通の少年……佐藤和真は、心做しか青い顔でポリポリと頬を搔く。それにしても、背後をとっていたとはいえ俺の蹴りをかわすとは……。年上に対してタメ口をきいていることはこの際大目に見てやろう。

「手前凄エな。俺の蹴りをかわすか」

「いやあそれ程でも……」

「カズマ、自動回避スキルが発動したことを自分の手柄にしないでください」

俺は今度こそ佐藤和真に蹴りを食らわせることに成功した。



驚くべき佐藤和真のスキル。

まず、どうやって此処に来たかと云うと……。

「いや、何故かこの前ゴミ捨て場でマナタイトを幾つか見つけてさ。千里眼スキルで船の座標を特定して、マナタイト一個使って『フリーズ』で船までまっすぐ海上凍らせて歩いてきたんだ」

「信じられない……助手君ってホント訳わかんないことするよね」

フリーズとは、その名の通り氷結の魔法。……ただし初級。人間に向かってかけても、保冷剤を当てた時程の冷たさしか感じないらしい。しかしそれを『マナタイト』という魔力の結晶に魔力元を依存することで、船までの道を凍らせた。確かに上手い。

「しかしカズマ、策はあるのか？ 相手は天使だぞ？」

「それは分かっている。まあ……天使だろうがなんだろうが、人類最強の攻撃魔法には耐えられないだろ」

「あつー！」

その言葉に、めぐみんの瞳が紅く輝いた。

……いや、あんなの使ったら俺らまで巻き添え食らうだろうが。手前らの嫌いな人殺し、それも大量殺人ルートまっしぐらだぞ。

「まあまあ中也、俺はそここの所をちゃんと考えてるんだよ。持ってきたマナタイト結晶は残り三個。これプラス俺の魔力で、この船から陸まで広い氷の道を作る」

「……まさか手前……」

とてつもなく嫌な予感が脳裏を駆け抜けるのと同時に、心の奥底から何かが湧き上がってくるのも感じていた。例えるならばそう——昔、太宰から指示を受け、敵組織のビルに突っ込み、最終的に無傷で敵組織を壊滅させたあの時のような。けれどあの時とは決定的に違う、誕生日のプレゼントを待つ時のような心の弾み。

「氷の道を通らせて客を逃がす。……ああ、逃がす理由なら考えてあるし、何なら客は全員逃げることに賛成した」

「どうせまた変なこと吹き込んだんじゃないんですか？」

「何言ってるんだめぐみん、お前の言動よりよほどまともだから安心してしろ」

「ぶっ殺」

杖を振り回すめぐみんの頭を押さえ、カズマは笑った。

「あとは、中也が仕掛けた発信機を使って彼奴を追い詰めて——」
そしてカズマは語った。

この世界では考えられないような、単純でいて明快、加えて失敗するイメージが湧かない、莫迦みたいな作戦を。

それを聞いて俺が思ったのは、此奴は太宰とは別の意味で凄いのかもしれないということ。

太宰のように超人的な作戦立案能力を持っているわけではないのだろう。ただ、全てにおいて平均より少し上なのだ。状況を見通す能力。敵の性質と有効打。地の利。太宰が敵の動きを読むことに長けているのだとしたら、此奴はあるものを最大限に生かすことができる能力をもっている。

「……って訳だが。犯罪組織の幹部としてはこれでもいいのか？」

「本当に手前ってやつは人の扱いが雑だな……俺一応マファイア幹部だぞ?」

「マファイアも魔王軍も似たようなモンだろ。どうせどつかの頭おかしい連中に望遠鏡で部屋覗かれたりしてんだろ?」

「してねえよ莫迦野郎」つーか魔王軍は部屋を覗かれてんのか。

「しかし……待てカズマ。私の役目が無いような気がするのだが」

「いつものことだろ」

「そんな!」

いつも通りに莫迦なやり取りをしているカズマとダクネス。ダクネスは一晚で立ち直れたようだ。

「よーし、じゃあ作戦開始ー!」

カズマの高らかな宣言の傍ら、めぐみんが俺にぼそつと。

「……ダクネスが元に戻って良かったですね。あと、ダクネスに襲われなくて良かったですね」

……いつか紅魔族というのは知能が高いとかなんとか聞いたことがあったが、あながち間違っではないのかもしれない。

第21話 最後はやっぱり爆裂魔法（エクスプロー ジョン）！

「ったく——しよーがねえなああああああ！ 行くぞお前ら！」

嬉々とした声音と表情で。とてつもなく弱く、ズルく、下品で、男の風上にも置けない……けれど、こういう時にはとてつもなく頼もしい、私の片想いの相手は元気良く右手を突き上げ、背後の私達を振り向いた。

私とめぐみん、クリスにチュウヤ。珍しい組み合わせで、がらんとあのパーティー会場内を駆け抜ける。

「なあ、何で彼奴が仕切ってたんだ？」

「さあ……。まあ、今回の作戦立てたのって助手君だしね。それに、助手君に任せておけばなんか大抵のことは上手くいくっぽいから大丈夫だよ」

「……不安でしかねえ……」

後ろからチュウヤの不安げな声が聞こえる。だがこれはクリスの言う通りだ。きつとこの中の誰よりも弱い此奴は、この中の誰よりもありえないことを成し遂げた回数が多いだろう。

冒険者にして職業冒険者。スキルは多彩だが効果は本職に劣る。それでもカズマは、私達の尖った力を上手く使いこなし、自らの弱いスキルも巧みに使って、目の前に立ちはだかる敵を確実に討ち取っていった。

——こんな男、惚れるしかないだろう。

「あ、おい待て！ カズマ、そこに罠が……！」
「分かってる！」

チュウヤの制止の声を振り切って、カズマは走りながら軽く跳躍する。次の瞬間、カズマが先程まで走っていた床から鉄の突起が飛び出した。後ろから続く私達はチュウヤとカズマのお陰でその罠を軽々かわすことが出来たのだが……。カズマには罠感知のスキルがある

が、チュウヤは何故罨だと分かったのだろうか。

「チュウヤ、どうして罨があると分かっていたのですか？」

「……彼処だけカーペットの色が違ったつーのと、カーペットから殺気を感じた。あとは勘だな」

「……」

めぐみんはそれきり口を噤んでしまった。

これがポートマフィア幹部なのか、という驚愕の色を押し殺した表情。普段は私達に注意ばかりしてくる引率係という印象しか無かったが、やはりチュウヤもまた強者だということを実感したらしい。私と同じだ。

——そこからは罨との戦いだった。

天井から鋭利な金属片が降り注いできたり。単純な落とし穴、両側から私達を押し潰そうと迫ってくる壁——。天使がキャンバスで具現化したらしい罨が次々と私達を襲う。

「くっ、な、なんて卑劣な罨なんだ……！ きつと此処で私を罨にかけ、捕らえ、日頃の鬱憤を私の身体で晴らす気なのだろう！ やれるものならやってみろ！ 望むところだ！」

「お前今望むところだって言っただろ」

「ああ言っただも！ それがどうしたのだカズマ！」

「……とうとう開き直ったな……」

その場にいた全員から呆れたような冷たい視線を注がれ、私は思わずぶるりと震える。くっ、この感覚、堪らない……！

「ねえ助手君、あれじゃないっ？」

そうして走って走って走り続けた先に見えてきたのは、絶対にこんなもの無かっただろとツツコミたくなるような重厚な扉だった。

黒地に金の装飾が施されたその扉。……どう考えてもこの先に天使がいる。

「よし、お前ら作戦は分かってるな？」

カズマの言葉に皆が頷く。カズマはそれを見て満足気に笑うと、

「相手は天使だ。たかが天使だ。キャンバスに描かなきゃ力すら使えない雑魚天使だぞ。全員、全力でかかれ。準備はいいな？」

「勿論です！」

「おつけーだよ！」

「望むところだ！」

「マファイア幹部の本気、見せてやるよ！」

「よし。じゃあ、突撃——！」

サツと左右に分かれた四人。空いたスペースに私が突っ込み——
重厚な扉がバキバキに両断された瞬間、背後から黒い影が飛び出した。

その影はまるで重力など存在しないかのような軽やかさで部屋の中に降り立つと、黒いマントを翻し。

「ポートマファイア幹部、中原中也だ。首領の命令で、ちよっくら面倒な異世界からの客をもてなしに来てやったんだが……俺の帽子を盗りやがった手前がそうなのか？」

突き出した右手の人差し指を、部屋の奥の椅子に腰掛けている白いローブの青年に突きつけた。

「な、か、カツコイイ……！ 仮面盗賊団の人達と同じくらいカツコイイです！ なんなんですか、あの人紅魔の里に招いたら絶対人気者になれますよ！」

……チュウヤに少しだけ同情した。あんな辱めをするような里の住人に人気が出そうなど、屈辱以外の何物でもない。

「へえ、マファイア幹部？ そんな貴様が、オレにこの帽子を簡単に奪われたのか？ ……この帽子はただの帽子じゃない。貴様が『切り札』を使うのに必要な物だ。そうだろうか？」

「……！」

中也の表情が苦々しげに歪められる。中也の切り札——それが一体何を指し示しているのか私には分からなかったが、重要なことではあるのだろう。

しかし腐ってもマファイア幹部。その表情も刹那のことで、チュウヤはすぐさまいつものニヒルな笑みを浮かべた。

「それはどうだかな。さて……そろそろ手前もただのおしやべりには飽きてきたんじゃないか？」

「フン。マファイア幹部がなんだ、異能力者がなんだ。此方には現実操作の神具が——」

天使の言葉が途切れる。

天使はキャンバスを取り出そうとしたその体勢のまま、部屋の最奥の壁にめり込んでいた。

「なっ……!」

これには私達も驚くしかない。なんだ、一体何が起きたと言うのだ？

「ハッ。異世界がなんだ、天使がなんだ。その程度で俺を倒せるとでも思ってたのか?」

振り出した脚をそのままにふわりと着地したチュウヤを見て、瞬時に状況を理解する。

チュウヤが天使を蹴り飛ばしたのだ——視認できないようなスピードで。

「……おいカズマ。クリス。お前ら自分の役目忘れてんじゃねエだろうな」

「……あ、そ、そうだったっ」

じろりと背後のカズマとクリスにチュウヤの呆れた視線が向けられる。……目の前でこんな芸当をされたら誰だって注目してしまうだろう。

——今回の作戦の概要はこうだ。

チュウヤが天使と戦闘。その隙にカズマとクリスが天使にバインドをかけ、私が天使からキャンバスを奪う。めぐみんはチュウヤのスマホで状況をリアルタイムでマファイア本部に送る。これで天使を確実に捕獲できる。

ちなみに、当初の天使を「殺害」という計画はマファイア本部からの通達で帳消しになり、無傷で捕らえて本部に連れていくという形になった。……めぐみんが拷問班の誰かを「もしこの話を通さないとなれば、何かの呪いでマファイアのビルが爆裂するかもしれませんよ」と脅迫したとかいう話は嘘だと思いたい。

「後は頼んだぜ異世界組!」

チュウヤはそれだけ言うと、壁にめり込んだ天使に追撃をかけるために異能でふわりと浮いた。黒いマントが翻り、天使の方へ向かっていく。

「……すげえなあ。異能力者って」

「うむ、あれならば私達の世界でも優秀な戦士としてやっていけそうだな」

「それはそうと助手君、結局めぐみんは使わないんだ？」

「そうですよ。私も爆裂魔法を使いたいです」

チュウヤに任せておけば取り敢えず安心だと分かった私達が好き勝手に喋ると、カズマは腕を組み。

「いや、まあ使わずに捕らえられるならそれでもいいんじゃないか？」

「ってか使ったら消し炭になるだろ」

「大丈夫ですカズマ。彼奴からキャンバスを奪い、あの天使が爆裂魔法で瀕死の状態になる絵を描けばいいのですよ」

「……………お前ってホントこういう時だけ頭働くよな」

「おい、それはどういう意味か聞こうじゃないか！」

勝利ムードが漂い、めぐみんが怒って杖を振り上げてツツコむような余裕が出てきたその時だった。

——吹き飛ばされたチュウヤが私達の目の前の地面にめり込んだ。

余程勢いが強かったらしく、チュウヤの身体を中心とした小さなクレーターが出来ている。

轟音と煙に目と耳を覆いながら、衝撃の隙間に響いたチュウヤの声を聞き取ると……………。

「…………クソ天使…………キャンバスで”荒覇吐”を具現化しやがった…………あのキャンバス何でもアリかよ…………」

「アラハバキ？ おい中也、アラハバキってなんだ？」

「…………獣だ。重力の獣。この世に存在するだけで周囲の生命を損なう——」

何言っただめぐみんモドキ、というカズマの声なき声を私は聞いた。

…………けれど、それよりも先に大気を震わせたのは咆哮だった。たっ

た一度の咆哮。獣の産声が、部屋のステンドグラスや窓ガラスを粉碎する。

……。

「どうしようカズマ、あの獣は何かダメだ！ 全くそそられない！」

「安心しろ、あの獣よりもお前の方が遥かにダメだ！ この状況でバカみたいなこと言ってんじゃねーよド変態が！」

「んっ、そ、それは……！ そんな罵倒、なんというご褒美！」

「頼むから黙ってくれ。……で、中也。あれを倒す方法は？」

く、冷たい反応も中々良い……。私がカズマのご褒美、じやなかった罵倒を味わっていると、チュウヤがゆつくりと起き上がった。

「ある。これに近い現象が起こった時、その方法で倒した」

「だったらそれでいいじゃん」

「………帽子が無いからできない」

……あの帽子は結構重要なアイテムだったらしい。

静まり返る一同。再び咆哮の準備を整える獣。

絶体絶命のように思われたのだが……。

「……あれ？」

声を上げたカズマが指を突き出す。

その先にあつたのは、咆哮で破壊された家具や小物の中で唯一無傷を誇っている白いキャンバス――



私達は飛んでいた。

真昼の強い日差しを受け、眼下に広がる煌めく海を見つめながら。

「凄いなチュウヤ……。こんなこともできるのか」思わず感嘆の声を漏らす私。

「……帽子がなくて、あの天使倒せなくて悪かったな」暗い声のチュウヤ。

「根に持たないでよチュウヤ。倒す方法が見つかって良かったじゃん」そんなチュウヤを励ますクリス。

「なあ、本当に倒せるのか？」

「当たり前だろ。これに耐えられたやつを俺は見た事がない」カズ

マはチュウヤの疑問に堂々と答え。

「——この私とこれがあれば、敵はいませんね。どこからでもかかってくるがいい！」

紅く瞳を煌めかせたためぐみんがそこにいた。

……作戦は再び始まった。

キャンバスという名の神具的道具は回収したので、マフィアに現状を報告し、「あまりにも危険だからそいつはもう殺していいよ。でもね、そのキャンバスは解析させて欲しい」と首領からの条件を貰った。そして、部屋の中にあつたカーペットに全員で乗り、チュウヤが重力を操って空飛ぶ絨毯を再現して今に至る。

私達は、カーペットに乗って飛んでいた。

——チュウヤ曰く「倒せない獣」を倒す。方法は簡単だ。

めぐみんが爆裂魔法を撃つ。それでも足りなければ、マナタイトを使ってもう一発。足りないなら追加でもう一発。それでも足りないなら……と、魔王戦の時のように何回でも撃ち込む作戦だ。けれど今回は数に限りがあり、今持っているのは四つだけ。四つプラスめぐみんの一発で決められなければどうしようも無い。

「安心しろダクネス」

「……！」

私の不安をくみ取ったのか、カズマが振り向いてニヤリと笑ってくる。

「こういう場面で、俺がいて失敗したことがあつたか？」

「失敗だらけのような気がするが……」

「おい」

……あのままが良かった。

四人でバカみたいに騒いで、問題を起こして笑い合う。四人で平等が良かった、あの時の私。

「では、いきますよ——！」

めぐみんの詠唱が始まる。魔力が少ないこの場所で無理に魔力を集め、その上体内からも無理な量の魔力を引き出そうとしているからか、めぐみんの周囲でパリパリと静電気が生じ始める。

——でも今は、このままがいい。

カズマとめぐみんが付き合っている。

「おい、それで俺の帽子消し飛ばされたりしねえよな……?」

「……チュウヤ、覚悟しとけよ」

「うあああああああーっ!」

それでも、カズマもいて、アクアもいて、めぐみんもいて、私がい
る。

どんな関係になっても、私達は私達だ。

だって、あの夜熱烈に告白したはずの私に対して、こんなにも悪
戯っぽく笑える此奴がいるから。

「いきますよ——『エクスプロージョン』っっ!」

一発——重力をも捻じ曲げる魔力の奔流が、重力によってところど
ころ押し潰された船の上に浮かぶ獣に直撃し、文字通り爆裂する。

けれど足りない。獣は生きている。

「まだまだっ……『エクスプロージョン』っ!!」

足りない……まだ足りない!

残るマナタイトはあと二つ。

「はあああ……『エクスプロージョン』っ!」

「まだだめぐみん! お前の力はそんなものなのか! なんちやつ
て紅魔族のまま終わっていいのか!」

「カズマ……いくら恋人といえども、今の発言については後で問い
詰めますからね……!」

そしてもう一発。……マナタイトはもう無い。

獣を見れば、苦しそうに身を振って——キャンバスの効果が切れか
けているのか、数秒に一度、砂煙のようなものに混じって元の天使の
姿が見える。

「めぐみん、やっちゃえ!」クリスの声援と。

「やっちゃえ!」カズマの野次と。

「ここでやらねえと、もう誰も止められねえぞ!」チュウヤの叫び
と。

「めぐみん……倒せ!」

私の最後の叫び声は、めぐみんの高らかな声によって掻き消された。

第二部

第22話 法則とともに歩く男

どこからか、若い少女の声が聞こえた。

世界の法則に呼びかけているような、そんな高らかな声音が青い空を貫いて――

「おい佐藤和真！ あの爆裂娘を何とかしろ、このままだと社が壊れる！」

「うるせえ俺に言うんじゃないやねえ、俺に対して怒ってんだから俺がどうにか出来るわけねえだろ！」

それは確かにごもつとも。

……現在、七日間連続で、新入ポトマファイア構成員のおかしな女の子の放った爆裂魔法という名の迷惑な破壊魔法が探偵社の上空で炸裂し続けています。



悪いのはカズマ君だと思う。

どうやら、カズマ君はめぐみんちゃんと付き合っていて。めぐみんちゃんが違法パーティー居る時、インカム越しに真剣な声で『その任務が終わったら、めぐみんに言いたいことがある』とか云つたらしく……まあ当然めぐみんちゃんは、『私に愛の言葉を囁くのでは？』と期待してしまう。けれど、キャンバス事件が大方片付いた後、幾つかトラブルが起きた。

まずひとつは、めぐみんちゃんとカズマ君のそれ。カズマ君は、沈んでいく船を見ながら、めぐみんちゃんの肩に手を置き、真剣な表情でこう云った。

「爆殺魔人もぐにんにんって俺達が倒したよな？」

真顔のめぐみんちゃんの全力パンチがカズマ君の顔面に炸裂したのは云うまでも無い。ちなみに連日探偵社の上空で爆裂が起きている原因はこれだ。

そしてもうひとつのトラブル。

キャンバスを持っていた天使とやらは殺せていなかった。
加えて、中也達が押収したキャンバスは偽物だった。

「ねえカズマさん、いつになったら私達は元の世界に帰れるの？」
……アクアちゃんが無邪気な質問が胸に刺さる。普段は莫迦で迷惑でしかないこの子も、元の居場所に帰れないのは流石に可哀想だ。

「……はあ。でも分かったら、今探偵社が取り扱ってる案件の中心に居るのは爆殺魔人もぐにんにんだ」

「……………本当だったんですね」

数日前……中也達が任務の真つ最中だった頃、探偵社に舞い込んできた依頼。

それは、意味不明なことを云いながら追いかけてくる忍者のような姿のロボットが民間人に被害を及ぼしているから解決して欲しいとのこと。更に、カズマ君はその正体を知っていて、元の世界で倒したこともあると。

「それにしても、もぐにんにんなんて名前、突然云われても信じられないねエ。あの爆裂娘も証言したから真実らしいと分かったが……」

「与謝野さんまで酷いですって！ 流石の俺でもそんな無駄な嘘つきませんから！」

流石のカズマ君も、与謝野さんに対しては敬語を使う。まあ、もぐにんにんとか云われても信じられないよね。与謝野センセイに激しく同意します。

「でも、七日間全力で探しましたが、手がかりゼロですよ？」

聞き込み調査に関して右に出る者は居ない賢治くんですらこの発言。もぐにんにんの手がかり捜査はかなり難航している。

「ねえカズマ、効くかどうか分からないけど、『フォルスファイア』で——」

「それだけは止めてくれ、もうあんな死に方したくない」
……肝心の異世界組も完全にサジを投じている。

このままでは社全体のやる気が地に落ちたまま日々を過ごすことになると思われたのだが——

「だったら、この捜査にあたる人をくじ引きで決めたらどうですか

？」

くじ引き……しかも発案者は賢治くん。ズルは出来なさそうなので、上手く言い訳してその場を逃れようとしたのだが、賢治くんは笑顔でこう続けた。

「前にくじ引きをした時はイカサマが起きたって国木田さんが云っていたので、ここは平等に「すまほ」のくじ引き「あぷり」を使いましょう！ 都会って便利なんですね！」

……そのイカサマは、敦くんが探偵社に入る前日に行ったものだ。私が。

背後から冷たい殺気。両肩をがしりと掴まれたので振り向くと……。

「太宰。引け」

……その時の国木田君の表情はあまりにも恐ろしくて文章にするのはばかられる。



結局、爆殺魔人もぐにんにん捕獲のメンバーは三人に決まった。

異世界組から俺。探偵社からは太宰と鏡花。どうにも尖ったメンバー構成だ。

「はあく……最悪。面倒。カズマ君達が来てから面倒に巻き込まれる確率が上がった気がする……」

「なわけねえだろ、アクセルで一、二を争う幸運持ちのカズマさんだぞ？ ……いやごめんなさい、俺の比にならないレベルで幸運値が低い駄女神が居ました本当にうちの駄女神が迷惑かけてすみませんでした」

「アクアだけに責任を押し付けるのは良くないと思う」

「………鏡花、多分アクアを何日か連続で観察してたら手の平返すことになるぞ」

成り立っているのかも分からない会話をくだぐだと交わしながら街を歩く。昨日爆殺魔人の目撃情報が上がったのは交番の前らしい。

俺が思うに、この爆殺魔人は、中也達を取り逃した天使がキャンパスで具現化させた物だろう。つまり爆殺魔人から何らかの手がかり

を得られれば、天使を捕まえることができ、俺達が元の世界へ戻ることも可能となる。……まあ、手がかりを得られればの話だが。

天使についてはクリスも独自で調査してくれているらしいが……こちらでのコネが無い状態での調査だ、期待はしない方がいい。

「交番の人に話聞いてきたけど、やっぱり手がかりは無しだね。警察官を見て『違う……コイツハ違う……』って云いながら何処かに消えたらしいけど」

そりやそうだ、あいつが反応するのはチートハーレム型リア充日本人なんだからな。

……多分、俺がアイツに会えば反応されるんだろう。実際は勘違いもいいところだが。

「実際に被害を受けた人の数は、目撃者数に対してとても少ない。異能特務科に協力を仰ぐのも難しい」

「鏡花ちゃんの云う通りだよ。八方塞がりだねえ……」

道端のベンチに腰掛けて空を仰ぐ。はあ、さっさと姿を現してくれれば、探偵社の協力も借りて討伐・捕獲するものを……。なんて考えていたのが間違いだったのかもしれない。

『……チートハーレム型リア充日本人。黒髪黒目』

機械的な——聞き覚えのある声。背後から投げかけられた無機質な言葉。

太宰が目を細め、鏡花が懐に手を添える。

そして俺は——

『——爆発セヨ』

「誰がチートハーレムだコラアアア!!」

バインドでもぐにんにんを拘束すると、鏡花と太宰の襟を掴んで駆け出した！

第23話 人はまずリア充に寛容になる必要がある

「ちよつと待ち給えよカズマ君、どうして逃げるの!? 此処で逃げても意味が無いと思うのだけれど……!」

「んなこた分かってんだよ!」

私と鏡花ちゃんの体重つて、合わせたら百キロは超えてると思うんだけどね。そんな私達を軽々引つ張って凄まじいスピードで走るカズマ君の筋力が特別という訳では無いだろう。日頃の行いからして。つまりこれは火事場の馬鹿力。……あのカズマ君が火事場の馬鹿力を出す程焦っているのだ、あの忍者ロボはかなり強いのだろう。

『チートハーレム型リア充日本人。殺戮。殺戮』

「くそ、もうバインドが解かれて……! あのクソ忍者!」

ふと背後を振り向くと、モノアイを殺意に紅く輝かせた忍者型ロボットが機敏な動きで迫ってきていて……。

……。

「どうしようカズマ君、此処で止まったら殺してもらえるかもしれないか思ってる自分がいる」

「……すいません、言ってる意味がよく分かりません」

「この人は自殺が趣味」

「つまりダクネスと同類だと」

「やめて、お願いだからあの子とだけは一緒にしないで」

とてつもなく切羽詰まった状況の筈なのに、脳内にパツと浮かんだのはあの金髪のお嬢様。切れ長の碧眼を欲望に濁らせ、頬を上気させる不審な女の子。黙っていれば綺麗な子なのに、中身が残念過ぎて出来れば関わりたくないタイプの子。

莫迦な云い合いをしながら、三人で必死に走って逃げる。いつの間にかカズマ君に引つ張られる形ではなく、それぞれがそれぞれの足で全力疾走していた。

けれどそれでもあの忍者は速い。機械の癖にとてつもないスピードだ。対する私達は、身体強化の異能を持っている訳では無い。

万事休すか——私が諦めかけたその時だった。

「夜叉白雪——！」

涼やかな金属音が響いたかと思うと、下半身が宙に溶けている着物の仮面夜叉が、愛用の刀で爆殺魔人ロボの身体を受け止めていた。その傍らには、厳しい面持ちで携帯を握る鏡花ちゃんの姿が。

「鏡花、お前……！」

「貴方達は頭が回る。夜叉と私が応戦している間に作戦を考えて」

「ちよつと鏡花ちゃん、夜叉と”私が”って……」

「そのままの意味」

鏡花ちゃんは携帯を首から下げ、夜叉を顕現させたまま懐から小刀を抜いて爆殺魔人ロボに飛びかかっていった。

「おーい鏡花、そいつは爆発系の魔法を使う！ 目が紅く光ったら

距離をとれ！」

呑気なカズマ君の助言に、鏡花ちゃんは着物の裾を翻して応えた。周囲の一般人は、あまりの異常事態に既にその場から退避してくれている。この方が私達も戦いやすい、のだが……。

「カズマ君、あのロボって弱点とか無いの？」

「いや……前回はめぐみんの爆裂魔法で倒したんだけどな。ある程度ダメージを受けたら逃走するんだよ、彼奴。だから多分、今倒すのは無理だ。一旦鏡花がダメージを与えて彼奴を逃走させて、改めて戦闘力が高いメンバーを連れてこないといけないと思う」

「うーん……らしいよ、鏡花ちゃん！」

鏡花ちゃんがチラリと此方を一瞥し、再び戦闘に戻る。カズマ君との会話に夢中で気が付かなかつたけれど、先程から爆音と共に歩道や道路にクレーターができていつている。短時間でこれだけの数のクレーターを……。これが爆殺魔人もぐにんにんが恐れられる理由だろう。

「あ！ ちよつとあんた、こないだあたしの下着盗った男じゃない？」

「「え？」」

と、背後から甲高い女の人の声がしたので振り向くと。

「やっぱり！ 『お前、ギルドのあの憎たらしい女冒険者に似てるん

だよゴルアアアアア!』とか意味分かんないこと言って私の下着を不可思議な力で盗ったあいつよね! 今日という今日は許さないわよ!」

「ねえカズマ君、何やってんの? 君は本当に何やってんの!」

「いや待って待って待って、いくら俺でもそんなこと………:………:したわ」

「わあああああああああー………:………:」

あの日は酒が入ってただのちよつとストレス発散だの意味不明なことを口走るカズマ君に二人揃って掴みかかった瞬間、足元に吹っ飛んできた仮面夜叉の姿で一気に現実に引き戻される。

「鏡花ちゃん、夜叉白雪が!」

「……:大丈夫。彼奴は追っ払った」

「よし、そういうことだからじゃあな女冒険者。俺達は街を守るために一肌脱がなきゃならないんだ……:」

「ちよつと待ちなさいよ、あたしは女冒険者なんて名前じゃないわよ! しかも下着ドロしておきながら街を守るとか抜かすんじゃないわよ!」

「いわよ!」

……:……:。

「うるせえクソ女! 俺はこれでも武装探偵社の……:……:っておい鏡花、太宰、何やってんだよ」

「私は下着泥棒を通報してる」

「私は今から社に戻って電話でめぐみんちゃんを呼び出そうと」

「すいませんでしたあああああああああ!」

終盤の下着泥棒騒動のせいで、私達は結局ろくな情報を持ち帰れないまま社に戻りましたとき。



「カズマさん、どういうことですか? さっきからずっと『探偵社は下着泥棒を雇うのか』と意味不明な電話が鳴りっぱなしなのですけれど……:」

「すいません、わざとじゃないんですすいません、酔った勢いではないです!」

白を基調とした、探偵社内での会議室にて。

集ったメンバーは俺、アクア、太宰、敦、乱歩、鏡花、谷崎兄妹。与謝野女医は病院の手伝い、社長と国木田は重鎮との会合、賢治は急用で里帰り——残る社内のメンバーを集めた結果こうなったのだが、俺は首を傾げるナオミに平謝りするしか無かった。

「前から思ってたんだけど、カズマ君って結構クズい？」

「……」敦の純粋な言葉が一番胸に来る。俺ってそんなにクズなの？

「今それは問題じゃない。その爆殺にんじんをどうにかしないと、社の評価が落ちるって社長が云ってた」

「もぐにんにんな。……や、まあ、今思いついただけでも案はいくつかあるんだけどさ」

俺は真つ白なホワイトボードにペンで作戦を書き込んでいく。

『①アクアのセイクリッドクリエイトウオーターで動作不能に追い込む』

②谷崎の異能でチートハーレム型リア充日本人を映し出し、その隙に倒す

③クリスを呼び、俺と二人でバインドを仕掛け、その隙に社の全戦力を投入して倒す

④最終手段。めぐみんを呼ぶ』

「こんな感じでどうだ？」

「ねえ、①って街中でやったらどうなるの？」

「どんな建物でも半壊するな」

「却下」

太宰の意見で①はボツ。

「②は……ボクはやってもいいけど、ロボットなんですよ？ 幻なんて効くの？」

「大丈夫だ谷崎、もし効かなかったらお前を囮に俺達は逃げる」

「却下」

谷崎の意見で②もボツ。

「ねえカズマさんカズマさん、ここの社員って戦闘になると過激じゃない？ 人混みの中でもぐにんを発見して戦闘になったら周り

の人も巻き込んでもぐにんを倒すのよね？ 安心して、誰が死んでも怪我しても、この女神アクア様が元通りにしてあげるから！」

「却下」

「なんでよー！」

アクアは鏡花と敦の手によって会議室から締め出された。当然、③もボツ。

残るひとつは――

「ねえカズマ。君、街を崩壊させた頭のおかしい女の子の恋人として名を馳せることになってもいいの？」

「嫌です無理ですごめんなさい」

……ダメだ。上手くいく気がしねえ。

会議室の空気が死に始めたその時――

「な、なんだこいつらあああああああ！ キヤベツだ、キヤベツが飛んでるぞー！」

「……………は？」

窓の外から奇妙な言葉が聞こえた気がした。

第24話 きらびやかでもないけれど

カズマ君、アクアちゃん、太宰さん、乱歩さん、鏡花ちゃん、谷崎兄妹の内、カズマ君とアクアちゃんは血相を変えて社から飛び出して行き、太宰さんは瞳を輝かせながら二人の後を追いつ、残りの四人は真顔のままその場から動こうとしなかった。

「えつと……皆さん、行かないんですか？」

「どーせあの二人絡みでしょ。行く気になんない」

「私もそう思う。行くだけ無駄」

「ボクが行っても出来ることは無いんじゃないかな……」

「私は兄様と一緒にいますわ♡」

つまりこの人達はカズマ君とアクアちゃんを見捨てたようだ。

……困ったなあ、最近カズマ君とアクアちゃんがとてつもなく厄介者扱いされてる気がする。それこそ太宰さん以上に。

「じゃあ僕だけでも様子見に行つてきます」

「気をつけてー」

乱歩さんの気の抜けるような見送りの言葉を背に、会議室の窓から飛び出した。

重力を受けて落下する最中に異能を発動、脚だけを虎化させて着地する。虎の脚が全衝撃を吸収してくれた。

「それにしても……」

人がいない。大通りに面している探偵社の周りはいつも多くの人で賑わっているものなんだけど……これはおかしい。

お店のシャッターも見事に全て下りている。そして貼り紙、『異常事態により一時休業』……異常事態……カズマ君とアクアちゃんが関わっていると見て間違い無いだろう。

「クソ……アクア！ スマホ貸すからめぐみんと連絡取つてくれ、俺はこいつらの出処を探る！」

「はあ!?! ちよつと待ちなさいよ、あの子誰に断つてスマホなんていう羨ましいもの持つてるのよ！ 私にも買いなさいよ！」

「今はそれどころじゃねえだろポケがああああああ！」

人を求めて全力で走り、ある角を曲がった瞬間——視界が緑色の大群に埋め尽くされた。

「え……!?!」

……数秒間を空け、ようやく脳が状況に追いつく。

キャベツだった。

大量のキャベツが、ひとつの方向目掛けて飛翔している。その緑の大群に体当たりされながら、道路の真ん中に必死に立っている探偵社の迷惑代表の二人。

ちよつと何云ってるのか分からないと思ったそこの君。僕がいちばん分かってない。

「ねえカズマさん、このスマホおかしいの! 『一時間後にもう一度試行してください』って表示されたまんま動かないの!」

「このバカ! 個人情報保護のために、パスコードを何回も間違えたらそうなるようにプログラムされてんだよ! ……つてお前何回間違ったんだ? この短い時間の間に何回パスコード解除しようとしたんだ?」

「女神の私にかかれば錠前破りと時間短縮なんてお手の物よ……痛い! どうして殴るのよカズマ! 酷いじゃないの痛いっ!」

こんな状況でもいつもと変わらない阿呆なやり取りをする二人に駆け寄って。

「二人とも、このキャベツは何なの!?!」

「これは私達の世界のキャベツよ。私達の世界の野菜はこっちの世界の野菜と違って遅いの」

「遅いとかそういう問題?」

「この前探偵社にも話しただろ、具現化キャンバスで俺達をイジメてるヤツがいるつて。多分そいつの仕業だ」

「なるほど……とところで太宰さんは何処にいるのか分かる?」

二人は僕から微妙に視線を逸らしながら、ある一点を指さした。

……歩道の端に、頭に大きなタンコブを作った太宰さんが倒れていた。大方、キャベツの内の一匹に激突されたのだろう。

「あくくそつ、めぐみん呼んで爆裂魔法で一掃してもらおうと思っ

たのに……お前のせいでスマホが使えないじゃねーか！」

「う、うううるさいわよクソニート！ いいわよいいわよ、どうせまた私のせいで街に被害が出て借金負うことになるんでしょ！ もういいわよ、殺すなら殺せー！」

「駄目だよアクアちゃん、このままだと本当に死んじゃうから！ キヤベツが死因になっちゃうから!!」

僕の異能ならこの規格外のキヤベツ相手でもある程度は粘れるかもしれないけど、この数の多さは流石に無理だ。迷っている間にもキヤベツは一点を指して飛び続け、その過程で街のあちこちに滅茶苦茶な破壊を振り撒いている。店がシャッターを閉めているのはこれのせいらしい。

もうどうしようも無いのか——思わず探偵社の皆と連絡を取ろうとした時だった。

「あら、こんなの為にウチが休業しなきゃならないの？ 笑わせるじゃないの、トラ猫ちゃん」

聞き覚えのあるソプラノが高らかに響く。目を凝らすと、キヤベツの大群を意にも介さず仁王立ちしている少女の姿が。

「あ、あれは……！」

フリルのついたドレス。真紅のお下げ髪。細くて白い足と腕、緑色に煌めく瞳。

嘗て僕達探偵社を苦しめた、空間系の異能者。そして今は、喫茶渦巻きでバイトをやっている——

「最近、探偵社に訳の分からない新人が入ったそうじゃない？ その新人のせいかしら、この頃変な爆発が起きてるのは。だったらこのキヤベツも、その二人に関係してるわよね？」

少女は流麗な動作で右手を上げると、親指をパチンと鳴らす。

先程まで勢い良く進軍していたキヤベツが、倒れている太宰さんが、喧嘩をしていたカズマ君とアクアちゃんが、何も出来ずに呆然としていた僕が、そしてその少女本人が、怪しげな桃色を基調とした異空間に立っていた。

「は……!?! な、なんだよこれ！」

「変なキャベツは全部ここに閉じ込めたわよ。そして、この空間は私の王国。アンを傷つけることはまかり通らないの」

背後にツギハギだらけの異能人形を従えた少女……モンゴメリちゃんは不敵に笑い、戸惑っているキャベツとカズマ君達をよそに僕に歩み寄ってきた。

「ありがとう、モンゴメリちゃん。君が居なかったら横浜は滅茶苦茶になってたよ」

「べ……別に、お礼を云って欲しかったわけじゃないわよ。ただ、こんなキャベツのせいでウチの店の収入が減るのは納得が……」

顔を赤くして俯くモンゴメリちゃん。出会う方は少し過激だったけど、この子は本当に優しい子だと思う。

「カズマさんカズマさん、新しいタイプのタラシがいるわよ。職人技よ。これはきつと天然純粹系タラシね」

「うっ……カツラギと違って全く腹が立たねえ……」

……背後からなにか聞こえたような気がしたけど、気のせいだろうか。

「とにかく！ あたしのアンだけを頑張らせるなんて駄目よ。アンが可哀想。そうね……敦と、その迷惑組！」

「誰が迷惑組だクソ女、迷惑なのはこの駄女神だけだろうが！」

「そうよそうよ、私達は迷惑なんかじゃ……。……ねえカズマ、今私のこと迷惑って言った？ 言ったわよね？」

「ちよっと、喧嘩してないで話を聞きなさいよ！」

本日何度目かの喧嘩を始めた二人を叱りつけ、モンゴメリちゃんは云った。

「この空間の中にいる限り、基本的にはアンが守ってくれるから……貴方達もこのふざけたキャベツ退治を手伝ってよね！」

モンゴメリちゃん、僕、カズマ君、アクアちゃんが臨戦態勢に入る。探偵社の皆……今から僕は真面目な顔でキャベツと戦おうとしています。

……誰かこのふざけた状況にツツコミを入れてください。

第25話 雨二毛負ケズ野菜二毛負ケズ

『クリエイト・ウォーター』！ 『ファイアーボール』っ！ 『バインド』！ ……おいアクア、魔力が切れそうだ！ ちよつとドレインさせてくれ！』

「はあ!? 嫌よ、誰があんたなんか私の神聖なひあぎやあああああああ!?」

不意打ちでアクアから魔力をドレインし、襲い来るキャベツ達に再び魔法とスキルの猛攻を浴びせかける。敦は虎の異能でキャベツを引き裂き、モンゴメリという少女はツギハギだらけの人形を操ってキャベツを粉碎している。 ……あれ後で食べようと思ってたのに。

全員で対処にあたっている内に、いつの間にか部屋内の動くキャベツはいなくなっていた。残ったのは無惨に引き裂かれたキャベツの残骸。これは ……食べられないな。

思わず溜息をつきながら、足元のキャベツのゴミに手を伸ばすと ……。

「お …… おあああああ!?」

「どうしたの!？」

「カズマ君!？」

「か …… かじゆまが …… かじゆまが私の魔力を勝手に ……」

——キャベツが消滅した。

俺が触れたところから、煙のように蒸発して消えた。

俺があげた悲鳴に驚き、モンゴメリと敦が駆け寄ってくる。若干一名、全く違うことを言っている気がするが気にしないでおう。

「それ、カズマ君達が云つてた具現化キャンバスとかいうやつで具現化された物なんでしょう? だったら実態を保つのに時間制限があってもおかしくはないよね?」

と、急に話に割り込んできたのは、キャベツに体当たりされて気絶していた太宰だ。太宰がキャベツの残骸を拾い上げると、俺の時と同様にキャベツが煙のように消滅する。太宰は両腕を組んで、

「ふむ ……」

「真面目なポーズでそんな性格悪そうな笑い方すんな。太宰、お前アレだろ、本当はキャベツに気絶させられたのが悔しいんだろ」

「違うもん」

「もんとか言うな気色悪い。あとその顔やめて、ちよつと怖い」

俺の言葉に太宰はようやく悪魔の笑みを引つ込めた。こいつもこいつで、俺のパーティーメンバーと通じるところがある気がする。

「もうキャベツは居ないわよね。あなた達、異能を解除してもよろしくて?」

「オーケーだ」

モンゴメリは頷き、パチンと指を鳴らす。桃色の異空間が消え去った後に残っているのは、キャベツの暴走の傷痕が生々しく刻まれた、昨日までとは別物の商店街だった。



「おい小娘! 貴様、俺の珈琲を何処にやった!」

「珈琲なら置いてあるじゃないの、ほらそこよ」

「誤魔化すな、これはただの白湯だろうが!!」

「仕方ないじゃないの! 私の指が触れちゃったんだから仕方ないじゃないの! あんたそんなカタい頭してるから童貞なのよ!」

「なんだと貴様、今日という今日は許さんぞ……!」

社内で喧嘩が起こるのは日常茶飯事だ。今日の喧嘩は国木田とアキラらしい。昨日はアキラと太宰が社内の蟹缶について口論していたし(結果は太宰の圧勝)、一昨日は乱歩とアキラがおやつについて口論していた(これもまた乱歩の圧勝)。……あれ、あの駄女神毎日誰かと喧嘩してねえか?

「カズマさんカズマさん、ちよつと質問があるんですけど」

「ん? なんだ賢治」

俺に向かって手招きしてくる賢治の元に向かうと、賢治は自分のパソコン画面を開いて見せてくる。

「もぐにんにんの目撃情報が入ってきているんですけど、もぐにんにんって全身金色ですか?」

「違う。全然違う。それは偽情報だから無視していいぞ」

「はい」

——キャベツ大量発生事件から四日が過ぎた。

もぐにんにんの目撃情報はじわりじわりと数を増やし、その中には面白半分ではらまかれたデマも混じっている。キャベツの謎も、もぐにんにんの居場所も、もつと言えばキャンバス天使の居場所も分からずじまい。クリスとの連絡は途絶えている。

簡単に言えば、調査は非常に難航していると言ったところか。

なんの変哲もなく、日々慌ただしい探偵社内。変わったことと言うと……そういえば、昨日アクアと口論した後から太宰が姿を消している。社の皆はサボりだの拘置所だの川の中だの浄水場だの散々なことを言っていたが、俺の勘だとそのどれとも違う。

俺は自分のデスクに戻り、パソコン画面を凝視した。

——もぐにんにんに関係するメモを纏めたファイルを。

『キャベツの動き方について……逃走形態?』

『アクア曰く、「あれだけ速いキャベツは中々居ない』』

『キャベツは海に向かっていた』

アクアから聞いた情報。その場で確認できた情報。これだけでもかなり推測が立つ。

何かから逃げるために、海に向かっていた——。

そして、キャベツがやってきた方向は森の中だ。横浜のはずれにある、狭いが深い森。

……恐らく太宰も動いている頃だろう。そう思った時、パソコンがピコンと鳴り、メールを受信したことを知らせてくれる。

『from:太宰』

件名:紅魔の里の周りって森なんだよね?』

どうやら、俺と太宰は全く同じことを考えていたらしい。思わず口角が上がる。

——もぐにんにんを発見することは難しく無さそうだ。

しかし問題は、もぐにんにんをどうやって退治するか。

キャベツは消えた。時間制限があつたからだろう。だとするとともぐにんにんだってもう消えてもいいはずなのに消えない。この違い

は何か。

……生命活動？

キャベツは各々の方法で無力化した。その途端、触れると消える物になった。もぐにんにんも同じなのだろうか。

やはり、何とか破壊して、あとは触れて証拠を隠滅するしかないのか……だとすると破壊の方法は限られてくるよな……。

前あいつを倒した方法は――

『『エクスプロージョン』つつつつ!!』

――ああ、そうだ、俺まだこいつと喧嘩したまんまだったわ。

遙か遠くで俺の恋人の高らかな殺意の声音が響き渡ると同時に、嘗てもぐにんにんを破壊したチート威力の魔法が探偵社ビルの上空で炸裂した。

多分、もぐにんにんを倒すなら此奴に協力を仰ぐか、もしくは――

「……はあ。しよおがねえなあああああああ！」

「うるさいぞカズマああ!!」

国木田の怒鳴り声を背に受けて、俺は探偵社を飛び出した。

第26話 いつまでもシンプルで

「遅かったね、カズマ君」

横浜のはずれにある深い森――。

俺がそこに駆けつけた時、太宰は既にその入口に立っていた。

俺を見つければ、太宰は緩く口角を上げる。此奴はバニルに通ずるところがあり、正直一緒にいると腹の探り合いになる気がして落ち着けないのだが、こういう時は頼もしい。

「めぐみんちゃんは連れてこなかったんだね。つてことは……」

「ああ。気は進まないけど、お前の案に乗るわ」

「それは良かった。じゃあ行こう」

太宰と俺は口数少なな森の中へと足を踏み入れる。

――恐らく、もぐにんにんはこの森の中にいる。

これは俺の推測だが、あのキャベツ達はもぐにんにんが放つ強者オーラにあてられて(もしくは爆発魔法で燃やされてしまうのを恐れて)、炎が届くことの無い海に向かって逃げ出したのだ。燃やされないうようにするには水のあるところに、という単純な思考回路はやはり野菜ならではのものだろう。

太宰は太宰でひとりで調査を進めていたらしい。本人曰く、「私の情報網をもつてすれば、目立つ忍者ロボの居場所を探るのなんて簡単な事だよ」と云っていたが、詳しいことはよく分からない。

もぐにんにんは紅魔の里の周りの森の中にいたことから、今回も森の中にいてもおかしくはない。そんな事情から、俺と太宰はもぐにんにんを捕まえに森の中やってきたというわけだ。

「それにしてもカズマ君、君、私のこと信用してないでしょう？ どうして私の案に乗るのさ」

「……お前の案が確実だから」

「うふふ、ありがとう」

「褒めてねえ」

確実だから、という理由だけではない。

……太宰のこの案は、普段俺が考える案と酷似しているのだ。

だから少しだけ……ほんの少しだけ仲間意識を持った。それだけだ。

え、作戦内容？……どうして俺と太宰しか来ていないのかを考えたら大体分かるんじゃないか？

「……カズマ君、いた。あそこ」

茂みに隠れ、太宰が指し示した先を見ると……。

『……チートハーレム……排除……爆発セヨ……』

物騒なことを呟きながら同じ場所をぐるぐる動き回る忍者型のロボットがそこにいた。

俺と太宰は顔を見合わせ、もう一度作戦の確認をする。

大丈夫だ、これで全部上手くいくはず！

俺は太宰の立てた親指を尻目に、茂みから思いつきり飛び出した！

『……チートハーレム型……リア充日本人……確認』

もぐにんにんのモノアイが紅魔族を彷彿とさせる輝きを宿す。ヤバい、普通に怖い。爆死したらどうしようと思えば脳内を嫌な映像が駆け巡る。

「カズマ君！ そのまま南東の方向に走れ！」

——太宰の頼もしい声で、脳内の映像が煙のように消えた。

そうだ、今俺には此奴がいる。頭が良いけど自殺が好きとかいう意味不明な性癖を持つ此奴が。

俺は思わず微笑むと——

「……………太宰、南東ってどっち？」

「莫迦ああああああああ!! ちょっと頼もしいかもと思つた五秒前の私を返してよ！」



南東に向かってひたすら走り続ける。その後ろを超スピードで追ってくるもぐにんにん。そして、もぐにんから必死で逃げ続ける俺の前を走るのは太宰だ。時折俺の方を振り返りながら走っている。

『爆発セヨ！ 爆発セヨ！』

……そして、三秒に一回、俺の走っている地面のすぐ近くが爆発し

て焦土と化している。

もしこれが俺に当たったらと思うと……。

「ねえカズマ君、この忍者って意外と強いよね？ この爆発受けたら死ぬるかな？ ねえ死ぬるかな？」

「お前やっぱダクネスと同類だろ」

「それはない」

前方を走る太宰が馬鹿なことを口走っていたのでダクネスを引き合いに出すと太宰は一瞬で口を噤んだ。太宰って女好きらしいけど、露骨にダクネスのこと嫌ってるよな……まあダクネスは太宰に直接DM発言したらしいし、無理も無いか。

ぼんやりと考えながら走り続けると、迷彩色のドーム型建造物が見えてきた。

太宰が言っていた『目的地』は此処だ。

「カズマ君、作戦は分かってるよね!」

「当たり前だろ馬鹿野郎!」

目の前を走る太宰が直角に曲がって横に移動、俺の視界から消える。

視界が開けた俺は、ドーム型の建物に向かって全力疾走し――

『爆発セヨ!』

『クリエイト・ウォーター!』

壁にぶつかる寸前、地面に向かって全力で『クリエイト・ウォーター』を使用。俺の全魔力を注ぎ込んだ水流によって、俺の身体が上空へと押し上げられる。

そもそもぐにんにんの強力な爆発魔法は、俺がさっきまで居た場所を通過して建物の壁に直撃。迷彩の壁面を粉碎した。

爆発のエネルギーが草木に飛んだのか、砂煙の中に火の粉が混じる。こんな戦闘らしい戦闘、あのクソみたいな世界でもしたことねえぞ。

「……おい……」

と、地の底から響くような迫力を持った声があった。何か激しい感情を必死に抑えているような、そんな声だ。

声を聞いた太宰がニヤリと笑い、声の聞こえた方向ともぐにんにんの間に入る。俺は声の主、太宰、もぐにんにんというラインを作るために、こっそり横に立ち位置をずらす。

その声の主は煙の中から颯爽と現れると……。

「何やってくれてんだ糞鯖!! 手前何でマファイアの極秘実験室の場所知ってんだ!」

そいつが夕陽色の髪をなびかせながら、美しい姿勢で放った重力を纏った飛び蹴りは、軽やかなステップを踏んでラインから離脱した太宰のお陰で、未だにモノアイを煌めかせる忍者型ロボットに直撃した。

——簡単な話だ。

太宰はもぐにんにんをスマートに倒せる人材は探偵社内には居ないと踏んで、マファイアの力を借りることにした。

……早い話、中也に押し付けた。

ただ頼むだけでは探偵社の私情だと割り切つて了承してくれないだろうと考えた太宰は、自分に対して攻撃をさせ、その攻撃をもぐにんにんに押し付けければいいと考えた。

「流石だな、太宰。面倒事を押しつける手腕……俺の次くらいに凄いわ」

「ありがとう。今度カズマ君の押しつけ作戦も見せてね」

「なあ、何いい雰囲気だ莫迦みたいな会話してんだ? 殴っていいか? なあ殴っていいよな?」

「あれ、極秘実験室の場所知られたなんちやってマファイア幹部が何か云ってるうー」

「一回死ね」

太宰と中也が喧嘩を始めた。……まあ、止めなくていいだろう。

取り敢えず、もぐにんにんの件は一見落着だな。俺は探偵社にメールを送るためにスマホを起動すると——

「——フハハハハハハハハ! この世界を存外嫌ってはいない幸運値だけが取り柄の冒険者よ、気分はどうだ? 自分が必死に追い、マファイアに押し付けるといふ危険すれすれの行為をはたらいた結果が

これだと知った気分はどうだ？」

……ひしゃげた忍者型ロボットの中から、白と黒の胡散臭い仮面を被ったスーツ姿の悪魔が出てきやがった。

第27話 争われない事実

太宰はどこかバニルに似ている——それは俺がずっと思っていたことだ。いや、俺だけじゃなくてアクアもだな。

アクアは太宰と初めて会話を交わした時、「邪悪な気配が云々」とか言って殴りかかっていたな。懐かしい。

そうだなあ、こっちの世界に来てからかなり時間が経ったんだなあ。こっちの世界も嫌いじゃないけど、あのクソみたいな世界も案外悪くないんだよなあ……。

「おいカズマ、現実逃避してねえでこの状況どうにかしろよ」

俺より若干身長の高い中也が、遠い目をしていた俺の頭を掴んで無理矢理『その方向』に向けさせる。

……視界に入ってきたのは、俺が先程から見るのを避け続けていた恐ろしい光景だった。

「フハハハハハ、普通の人間の数倍は頭が良く、数十倍は重い過去をもつ男よ。先程我輩は貴様が大事にしているあの墓を見に行ってきたが、実に殺風景だったな。まるで貴様の心のようだ」

「うふふ、突然現れたと思ったら何さ、人の過去を詮索して何が楽しいの？ 渴いているのは君の心の方じゃない？」

「そんな時には此方の『うるうる☆魔力オイル』がおすすりめである。このオイルを塗れば、誰もがたちまち豊かな感性を手に入れる。その代わり理的思考能力を一切失ってしまうがな」

「要りません」

——静電気でも発生しているんじゃないかと思うほど渴いた空間で、二人の男が向き合っている。

片方は、人を舐めたような黒と白の仮面を被っている長身の悪魔。もう片方は、ぼさぼさの蓬髪に全身包帯の男。

似た者同士が初めて対面するところな風になるのか。初めて知った。

「莫迦なこと云ってんじゃねえ！ ンだよ、あの変な仮面野郎。お前の知り合いか？」

もつと言うと、キャンバスによって生み出されたキャベツが横浜の街に向かうのを目にし、もぐにんにんの姿でキャベツを追い散らし、俺達が退治するように仕向けたのもバニルなのだと。面倒事を増やすなど言いたいが、キャベツの被害は最小で済んだのだから強くは言えない。

「全くもう。どんどん変なのが増えるねエ。カズマ、アンタがどうにかしなよ、この意味不明な悪魔。妾達はただでさえカズマとアクアが来てから満身創痍だったのに、悪魔まで増えたって対処し切れないさ」

「安心しなさいアキコ、この女神である私がいるからにはこんな悪魔……！」

「妾達からしてみればアンタも悪魔みたいなモンだよ」

冷静な判断を下した与謝野女医センセイにアクアが掴みかかるのを横目に、俺はバニルに向き直り。

「つていうかお前、どうやってこっち来たんだよ。方法次第では、俺達もあっちに帰りたいんだけど……」

「それが我輩にもよく分からのだ。あの貧乏店主が仕入れた怪しげな薬を面白半分飲んでみたら、こんな変な街に飛ばされてしまったらしいのでな。そこからは我輩お得意の見通す力で状況を理解し、汝らの気を引く為に爆殺忍者に成りすましたというわけだ」

「そういうクソ迷惑なアピールは止めてくれると助かる」

「だけどもあ、こいつのお陰でキャベツ被害は抑えられたしなあ……」

微妙な感情を持って余して黙っていると、バニルはニヤリと笑い……。

「ところで、不可思議な力と重い過去を持つ探偵達よ、汝らに良い事を教えてやろう。これから数日間、天使がキャンバスを使って厄介なものを次々に具現化するであろう。だが目先のことに気を取られているともっと大事なことを見落とすので要注意。削足適履という言葉を忘れるでないぞ。フハハハハハハ！」

「バニル、と云ったな。貴様の言葉をどこまで信用するかは俺達探

偵社員が決める。その忠告は程々に受け取っておこう」

「あ、国木田。此奴の予言は百パーセント当たるから、本気で信用した方がいいぞ」

「えっ」

俺の言葉に、国木田含む探偵社員数名が声を上げた。

……どうやらバニルが胡散臭すぎて、程々にどころか全く信用していなかったらしい。

「でも、今は正直、そういう……カズマ君達の世界絡みのトラブル対処をしている暇はないんですね。他の案件がかなり詰まっています……」

「そうそう。私達も忙しいのだよ」

「普段サボってるお前が云うな」

敦を筆頭に、太宰、国木田と、次々と断りを入れる探偵社員達。

全員、真面目な声で云っている。……のだが、その目は泳いでいる。これはアレだ、面倒なことから逃げようとする人間の目だ。

「ねえねえカズマ、もうすぐこのお店のミックスシエイクが発売するんですって！ 一緒に飲みに行きましょう！」

「ちよ、おま、話聞いてたか？ 今から変なのが大勢押しかけてくるんだぞ？ そんなことしてる暇あるわけねーだろ！」

「シエイクを飲んだ後は、八百屋のハシモトさんと魚屋のオイカワさんから採れたての食材を貰って……」

「現実逃避すんな駄女神」

探偵社員達は何事も無かったかのようにそれぞかのように戻り、駄女神は目を泳がせながらお洒落な喫茶店の広告のビラを眺めている。こんな空気を作った仮面の悪魔はいつの間にか社内から消えていた。

……どうして俺は平穏な生活を送れないのだろう。そういう星の元に生まれてしまったのだろうか。

途方に暮れて虚空に視線を投げたその時、ポケットに入れていた携帯が振動した。

誰からだろうと携帯を起動すると、表示されていたのは「非通知」の

文字。少し迷った結果、電話を受けることにした。

「あー、もしもしどちら様でしょう」

『お前、カズマだよな？ 佐藤和真だよな？』

「は……中也？ 何でお前、俺の番号知って」

『それはどうでもいいんだよ！ 今すぐ来てくれ、大変なことになってる』

「はあ……？」

悪魔の次は、犯罪組織の幹部からのヘルプコール。一難去らない内にまた一難。

……エリス様、俺は一体どうすべきなのでしょう。

第28話 汚れつちまつた…

渋々ながらも、否、内心神頼みレベルで佐藤和真に電話でのヘルプを求めた前日の話。

——その日は朝からマフィア本部内が混沌の渦中にあった。

「何なんですか！ 喧嘩を売っているんですか！ 売られた喧嘩を買わない紅魔族などいませんが、貴方はそれで後悔しないのですね!?!」

「上等だ。貴様のような小娘如き、僕の羅生門で八つ裂きに……!」
「すんな！ 八つ裂きにすんな！ お前もすぐ喧嘩を買うな！」

マフィアの玄関ホールに人集りが出来ていたので何事かと思い、観衆が見守る騒ぎの中心に目をやると、他称ポートマフィアの黒いなんとかと自称頭のおかしい爆裂娘が睨み合って火花を散らしていた。

思わず人集りに飛び込んで二人の間に割って入る。この二人は血の気が多くて困る。……否、主に爆裂娘が原因か。

「おい、誰のことを爆裂娘と呼んでいるのか聞こうじゃないか！」

「お前そろそろ脳内覗きキャラが定着してきたな」

「ぶっ殺」

魔法使いのアイデンティティである杖を捨てて殴りかかってきた脳内覗き魔は無視することにした。

仕方が無い、芥川に話を聞こう。

「おい芥川、何があった」

「……僕が玄関ホールに入った瞬間、待ち構えていたこの小娘が突然殴りかかってきて……」

「おい」

俺がめぐみんを見ると、めぐみんはスッと目を逸らしながら。

「仕方が無いのですよ。ええ仕方が無いのです。このままだと夜中に私がボンツてなって横浜が消し飛んでしまうのですよ。だからこのアクタガワと戦い、その流れで自然に爆裂魔法を放つことによつて、私がボンツてなって横浜が消し飛ぶのではなく私の意思で横浜を消し飛ばそうと」

「成程な……まあ自然に消し飛ぶんじゃなくてっってお前最後何て云った？」

俺が二人と話し始めたことで、内容を聞いて安堵した野次馬達が本部へと戻っていく。芥川もひとつ溜息をつくど、めぐみんを射殺さんばかりの視線を残して本部内に戻っていった。

残されたのは俺とめぐみん。

「ところでチュウヤ、私はそろそろ爆裂魔法を撃ちたいのですが。どうして一週間も禁止されなければならないのですか？ このままだと私は爆裂魔法を撃つ衝動を抑えきれずに爆裂魔法で横浜を消し飛ばしてしまいそうです」

「……もう手前の無茶苦茶な長文にツツコむの止めるわ。疲れた」

「ツツコミなんて要りませんよ。私が爆裂魔法を撃てば全てが終わりますから」

「莫迦野郎、この物語まで終わるだろうが！」

ああ、とうとうメタ台詞を云ってしまった……。メタ台詞は世界観が崩れるから必死に抑えていたのに。クソ、この厨二病、いつか絶対痛い目見せる。

「チュウヤのその独白がいちばん世界観を壊していると思うのは私だけでしょうか……。あ、チュウヤ。爆裂魔法に関しては仕方が無いので我慢しますが、今日はチュウヤは暇でしたよね？」

「はあ？ ……暇だって云ったらどうなるんだ？」

「オウガイに直接許可を得て、特別な任務を行えることになったんです。ダクネスは既に現地に到着しています。私とダクネス、チュウヤの三人で特別任務に行きましょう！」

「あーやべえ俺今日友達と飲みに行くんだったわーまたいつかな」

「おい、朝っぱらから酒を飲み出すマファイア幹部が何処にいるのか教えてもらおうじゃないか！」

……こうして、最悪の一日が始まった。



「——そして其奴はこう言うのだ！ 『代償はお前の身体で払って

もらおうか……!』と! 下卑た笑みを浮かべながら、私の身体をまさぐって欲望に満ちた瞳で……んああっ……!」

「さあチュウヤ! 作りますよ秘密研究所を!」

「なあ、俺もう帰っていいか?」

「駄目です」

横浜のはずれの森の中。

俺とめぐみんが向かったそこには、気が早い妄想に興奮して頬を上げさせる変態女が一人。

反射的に110番を押しそうになった俺の心情を理解するには、この女と直接対面するしかないと思う。

——めぐみんとダクネス曰く、この森の中にポートマフィアの『何でも研究所』を建設したいのだと。

一週間の内、一日につき一人が自由に使える研究所。目的は問わない。合法でも、非合法でも。

首領がめぐみんの案を呑んだ理由は、『マフィアらしくないがマフィアの活動の幅が広がりそうな良案だと思ったから』らしい。ただ、今はその案に裂ける人員が無いので、建設は三人で行えとのこと。……そう云われればもっともらしく感じるのだが……。

「この研究所が完成した暁には、男を興奮させる薬、もしくは男を呼び寄せる薬を……!」

「この研究所では、爆裂魔法の威力向上の薬を何処かの異能者と共同開発出来たら……!」

もう駄目だ。此奴らが暴走する前に、俺が研究所の使用スケジュールを埋めなければ。

首領がこの案に賛成した以上、取り消すことは出来ない。一刻も早く完成させて、一刻も早く予定表を埋めなければ。

……そんな、俺の密かな決意とともに研究所建設が始まったのだが……。

「チュウヤー! こっちの岩はいいぞ! 硬い! こんな硬い岩で殴られたら私はどうなってしまうんだ!」

「多分死ぬと思うぞ」

「ああ！ 研究所を硬く造れば造るほど、壊す際の快感は数倍に……！」

「何で壊す前提で研究所造ってんだこの莫迦！」

俺が近くの山の岩盤から異能とノコギリで岩をブロック状に切り出し、ついでに表面を滑らかに整えてダクネスに渡す。ダクネスが簡単な設計図を見ながら積み上げる。めぐみんがマファイアお抱えの異能者特製の接着剤でブロック岩を接着する。

ダクネスはパワーとスタミナがあり、きびきび動いてくれるので仕事が進む。めぐみんは意外にも頭が良く、ブロック岩が崩れることなく正確に接着し、積み上げていく。

これで黙ってくれていれば優秀な部下だと思えたのに……口を開いたかと思えばロクなことを喋らない此奴らを、誰かどうにかしてほしい。

——そんなこんなして、五時間程が経過しただろうか。

「で……できた！ 完成だ！」

俺達の努力の結晶——ポトマファイア極秘研究所が、小さいながらもここに今、堂々と立っていた。

既に暇な研究員数人（梶井の部下）を呼んである。俺達は嬉々として中に入り、研究員と今後の使い道について話し合っていた。

……問題は此処で発生する。

「その薬……！ 異能生物を再現だと!? 触手!? ヌルヌル……!! んんっ、もう駄目だ我慢できない！」

「ええ!? この薬はあの史上最悪兵器の縮小モデル!? 有害物質は生じず、純粋な爆発エネルギーだけを……分かりましたこの試薬にこれを混ぜればいいんですね！」

「良くねえよ！ お前らマジで大人しくしてろ!!」

次の瞬間、俺達の努力の結晶の一部の壁面が外部から爆破され——



「……はーん。でも悪いけどそれって俺のせいじゃないんだよね」

「それで済むと思ってるのか？ 研究所自体はともかく、あの薬が風に乗って横浜中に飛んで行ったのとかかなり拙いと思うんだけど

な」

中也に呼び出された先は、昨日の森の中。

俺は一人。中也も一人。てつきりダクネスとめぐみんがいるのかと思っていた俺は思わず拍子抜けしたのだが、もぐにんにん（もといバニル）の爆破のせいである厄介な異能生物の卵が散乱し、風に乗って飛んで行ってしまったらしい。

「ダクネスとめぐみんには云ってねえ。あいつら……特にダクネスにバレたら厄介なことになる」

「ダクネスにバレたら厄介……」

あのDMが喜びそうなこと。俺はひとつしか心当たりがない。

「その異能生物……触手か？」

「その通りだ。佐藤和真、今から俺とお前で触手の本体を潰しに行く」

その触手はあちこちで増えるのではなく、あちこちに飛んでいき、ある一箇所を根を張り、そこから増えていくらしい。だからその根を張った箇所のみを叩けば全てが自然消滅するのだと。

「もしこれが出来なかったら……ダクネスが興奮して性犯罪を犯すかもしれねえ」

「よっしややるぞ中也！」

もう本当にやだ。

第29話 歪んだ門

カズマ君が社員寮に帰って来なくなってから三日が経った。

「ちよつとやめてよアキコ！ 何も私は変なことしようとしてる訳じゃ……！」

「アンタが淹れた珈琲ってのは全部水なんだからアンタに淹れさせる訳にはいかないねエ！」

今日はアクアちゃんと与謝野センセイが喧嘩している。カズマ君とは音信不通、毎日午前十時きっかりに探偵社を襲撃してくるバナルさん、日に日に殺気立っていく探偵社の皆……。カズマ君が来てから探偵社の平和は明後日の方向へ飛んで行ってしまった。

「敦。この書類は貴方のもの」

「え？ あ……ありがとう鏡花ちゃん」

けれど、殺気立っていく探偵社員達とは対照的に、鏡花ちゃんは何だか機嫌が良い。何かいいことでもあったのだろうか。

「……カズマが居なくなってから、探偵社が少し静かになった。あとはアクアを消すだけ」

「鏡花ちゃん……」

この子はどうしてそんなにアクアちゃんのことを嫌いなんだろう。……いや、まあ、あの子がとてつもなく変な子なのは分かってるけど。迷惑噴霧器を他称されている太宰さん以上に迷惑を振り撒いてるのは分かってるけど！

……あれ。太宰さんと云えば……。

「国木田さん、今日は太宰さん居ませんよね？」

『カズマ君が居ない内に自殺してくるね』と云いながら出ていった。今頃川の中かビルの屋上か拘置所か……」

相変わらず太宰さんの社内評価は異常だ。

「はーあ。あのヒキニートったら何処行っただのかしら。いたら邪魔だけどいなかったら私の仕事が増えるわね」

「貴方は何もしていない。いつも仕事を私達に押し付けて遊びに行っている」

「はあー!? なーに言ってくれちゃってるんですかー! 私は近所の人と親交を深めるために、八百屋のおじさんと魚屋のおばちゃん連れてカラオケ行ってきただけなんですけどー!」

「それを遊んでると云ってるんだこの小娘がああああああああ!!」

いやああああああ私の羽衣返しなさいよ童貞メガネー! アクアちゃんの情けない悲鳴が響き渡り、国木田さんの怒号が社を震わせ、他の皆は何も見えていないフリをして無言で仕事にとりかかる——そんな、カズマ君達が来てからの『いつも通り』の日常は、一瞬にして崩れ去ったのだった。

「あのう、すみません。此処に私の駄目な恋人は居ませんか?」

控えめな声と共に社内には足を踏み入れたその人物を見た瞬間、社内に緊張が走る。

「賢治! もしもの事があつたらあの小娘の杖を奪え!」

「了解です国木田さん!」

「与謝野女医、手段は選びません。あの小娘を解体しても構いませんから……!」

「死ぬ気で社を守れて云うんだね国木田! 望むところさ!」

「国木田さん、矢張り此処はボクの異能で……!」

「ちよ、ちよと待ってください! どうしてそんなに怯えるのですか、私が来たというだけでそんな……」

傍から見れば、黒髪の女の子に向かって失礼な発言を連発している異能力者達という世にも奇妙な構図が出来上がっているのだが、この子の正体を知っている者ならこの状況がよく理解できるだろう。……この子を甘く見ていると、終わる。

——カズマ君の冒険者仲間だと云う、魔法使いの女の子。名前はめぐみん。厨二病じみたノリが謎なこの子だが、一応カズマ君の彼女……らしい。

そして、ここ数日間にわたって探偵社上空で『爆裂魔法』と云う名の凄まじい威力の破壊攻撃を炸裂させ続けている張本人でもある。

「私が来たというだけ!? 貴様、次そんな台詞を云ってみろ! 本

気で刑務所に連行するぞ！」

「なんなんですか、私には正当な理由があると言うのにその態度は酷いじゃないですか！ ええいいでしょう、喧嘩なら買いますよ！」

——黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我が真紅の混交を——」

「めぐみんちゃん落ち着いて！ お願いだからそれだけはやめてええええええええええええ！」



「なんだ、探偵社の人々は知らないのですか。何だか私が無駄に情報を漏らしたみたいではないですか」

僕の必死の説得が功を奏し、僕は今、国木田さんと一緒にソファに座ってめぐみんちゃんと話し合いをしています。

ちなみに、めぐみんちゃんの隣に座っているのはアクアちゃん。「あの芸はダメね……やっぱりビー玉を……」とか意味不明なことをブツブツ呟きながら白湯を飲んでいる。

「異能触手生物、か……名は聞いたことがあるな。何でも、ある異能者をモデルに作ってみたら案外上手くいったらしいが」

「その辺の事情は知りませんよ。私マフィアって言っても形だけです。最近の仕事はロリっ子の世話です」

「めぐみんめぐみん、その呼び名はただのブーメランだと思うの」「ぶっ殺」

……まあ、簡単に言えば、太宰さんとカズマ君の暴走のせいで、異能触手生物の種が風に乗って飛んで行ってしまったしまったらしい。

このことを知るのはマフィアの研究部の一部のみらしいけど、情報はどうしても噂となって広まってしまおう。これでも抑えられた方だろう。マスコミには取り上げられてないし。

「じゃあ、今ダザイとカズマが居ないのは……」

「カズマは恐らくそうだろうな。だが太宰は違う。さつき拘置所から『この男をどうにかしてくれ』と連絡がきた」

「なんか、太宰さんって知れば知るほど失格人間ですよね」

太宰さんのあの性格はどこから来ているのだろう。いつも気になっっているけど、未だに理由は不明だ。

「いえ……カズマもいないのですか……実は、ここ数日……三日ほどでしょうか、チュウヤが居なくてですね……爆裂散歩に付き合ってくれる人がいないのです」

「待ってめぐみんちゃん、君はマフィアの幹部をそんなものに付き合わせたの？」

「おい、そんなものとはどんなものなのか聞こうじゃないか！」

瞳を赤く光らせて掴みかかってくるめぐみんちゃんを必死にいなす。もうやだ、この子本当に怖い！

「ねえ、私とつてもいいこと思いついたんだけど！」

瞳を輝かせながら、アクアちゃんが立ち上がり——危険を察知した僕達が耳を塞ぐよりも早く、アクアちゃんが言葉を零してしまった。

「みんなでカズマとチュウヤを探しに行きましょうよ！ それに、異能の触手っていうのもなんか消しといた方がいいっばいし！ ね、そうしましょう！」

僕達はこの一瞬だけ思考を共有していた。——多分、この子がこういうこと云う時はロクな展開にならない。

第30話 眠りの触手の彼方に

——三日だ。三日経ったのに……。

「中也あああああああ!! ヘルプ! マジやばいつて助けてあああああああああ!!」

「だあああああああ少しは抵抗しろよおおおおおおお!」

……触手の本体見つかんねえなあ……。



三日。

倒した触手の数——五十を超えた辺りで数えるのをやめた。早い話、絶望した。

しかもその触手ときたら、どれもこれもヤバいのばかりだ。あのドMが見つけたら間違いなく興奮して変態行為に走って警察のお世話になってマフィアの名に傷がつく。そして額に青筋を浮かべた中也が俺のところ飛んできて社員寮を吹き飛ばされる。……このままじゃダメだ。

「はあ……どうすんだよ中也、このペースだと何年経っても見つかりそうに無いぞ」

「真逆あの研究員がこんなに潜伏能力の高い異能生物作ってるとはな……俺も何か作って貰おうか……」

「お前が現実逃避してどうする」

新作の帽子をとかなんとか云いながら遠い目をする中也の肩を掴んで無理矢理顔を突き合わせる。

「中也……ダクネスが面倒起こしたらお前が泥被るんだぞ? もしかしたらお前まで被害受けるかもしれないな」

「よしカズマ、次は中華街だ。路地裏のゴミ箱の中とかに潜んでる可能性が高いな」

……ダクネスって、太宰と中也から異常なまでに嫌われてるよな。めぐみん、アクア、ダクネスという見てくれだけはいい三人の中でも特に綺麗なのはダクネスだと思うんだが。まあ、人間は結局中身だから仕方がない。

「——あ！ ねえ居たわよクニキダ、私の言った通りじゃない！
アンタの土地勘なんて信用なりませんー！」

「云ってる小娘、貴様と話していると頭が痛くなってくる……」

「こういう時だけはアクアの悪運が発揮されるんですね……」

「でも、カズマ君達に被害が及んでなくて良かった」

……この声は……。

俺と中也は同時に振り向き、後方からの悪魔の声の主を確認した。

「ここにいたのねヒキニート！ アンタがいない間、私が仕事をし
てあげ……って、ねえ、どうして逃げるのよー！ 待ってってば、ね
え！ こんな所で置いてけぼりにされたら私帰れなくなっちゃうか
らあああああああああああ!!」

「俺が場所を知っていると云っているだろうが馬鹿娘があああああ
あああああああ!!」



まあ、そんな経緯で俺、中也、めぐみん、アクア、敦の五人で触手
退治をすることになったわけだが。

「僕が虎の嗅覚で触手の臭いを覚えて、本体の居場所を探すよ。そ
の方が効率いいでしょ？」

朗らかに笑う敦。……この時ほどこの優しさ溢れる常識人を抱き
しめたいと思ったことは無い。

日頃奇人変人（主にパーティーのメンバー達）に苦勞させられている
身としては、常識的な人間と話すだけで癒されるのだ。え？ ゆんゆ
んは……。……ま、まあ、あの子もちよつと特殊だからなあ……。

そして、敦の異能で触手を探し出したところ、それはもう昨日まで
の俺と中也の苦勞はなんだったんだと怒鳴りたくなるぐらい簡単に
見つかった。

——異能生物の本体、

「……これって……」

……らしきものが。

「おい待てよ……敦、手前マジで此奴がそうなのか？」

中也がとてつもなく引いている。角砂糖五十個を一度に食べたか

のような苦しげな表情で。

「はい、確かに臭いはここから……。……どうかしたんですか中也さん、何か様子がおかしいですけど」

「そ、そそそそそそんなことあるわけねえだろ!? 別にこういう蛸っぽい何かが悪手とか、双黒復活早々酷い目に遭わされたとかそんなんじゃない?!」

「思いつ切り顔見知りじゃないですか。っていうかなんなんですかこの……。この……」

めぐみんが呼称を決めかねて指さしたその物体は——地面から生える黒い触手。

この触手のことを中也はどうやら知っているみたいだけど、触手と知り合いつてどういう状況なんだろうか。

「……あ、もしかしてこの人、太宰さんが云っていた……。組合の異能者の……」

「聞いてたのか。なら話は早エな」
そして中也は話し出した。

今から少し前、組合という海外の金持ち異能組織とマフィアと探偵社が三竦みの戦争をしたことがあったと。

その際に、太宰と中也が組んで組合の異能者と戦ったのだと——その異能者こそが、この黒い触手（中也曰く、これは髪の毛らしい）だと。

「つつても、このタコは異能者じゃねエ。太宰の異能無効化が効かなくて、仕方無く俺の切り札で倒したんだ」

「ということは、此奴は我が爆裂魔法で消し飛ばしても良い相手なのですね!」

「誰がそんなことを云った! 本当に貴様は……。マフィアとは思えん程のトラブルメーカーだな!」

「何なんですか、喧嘩ですか! やってやりますよ、受けて立ちます! では負けた方は晩御飯を奢るといふことで……!」

「喧嘩買った上に奢らせようとすんな馬鹿!」

……。そんな風に、いつものノリで馬鹿騒ぎしていたのが良くなかつ

たのかもしれない。ぎゃあぎゃあ喚く俺たちの足元で、『そいつ』は静かに大地から身体を現し――

「……眠い。仕事、もう無い」

「……っ!?!」

低く、無機質で感情を読み取れない声が響いた瞬間、俺達は瞬時に臨戦態勢に入っていた。アクアが構え、めぐみんが杖を持ち、中也が警戒心を顕にし、国木田が眉をひそめ、敦が表情を引き締める。……油断していたら”何か”が来る。説明しようのない状況に苛立ちを覚えながら、そいつの一挙手一投足に注目した。

波打つ黒髪。恐らく”異能ではない”触手という攻撃手段。白いシャツ、黒いズボン。ここはごく普通だが、折れ曲がった首がその格好とのギャップによる異様さを醸し出している。

「……組合の異能者、ハワード・フィリップス・ラブラフト……」
緊張を孕んだ国木田の呟きが零れ落ちた。……本気で戦わないと、殺られる。

「……お前達……確か、『ターゲット』……目的は……足止め……」
黒い髪が波打ち、徐々に肥大化していく。死人のような瞳から光が完全に抜け落ち、人間を逸脱した何かへと昇華する。

「まずい――此奴の身体は……」

呆然とした表情の中也が呟き、俺達の方を振り向いた。

「国木田。異能で手榴弾を作れ。めぐみんは後方で待機、敦は俺と一緒に来い。アクアはカズマと動け。……どうやらこのタコ、俺達を狙ってるみてエだ」

「ちよつと、意味分かんないんですけどー！　なんで私達が狙われなきゃなんないのよひぎゃあああああああああ!?!」

頭上を触手の一撃が掠めて地面をのたうち回るアクアを尻目に、めぐみんは後方に下がり、国木田が手帳を取り出し、敦が両手足を虎化させる。そこに来て俺は漸く本気で戦わなければならないことを悟った。

「おいカズマ。前俺がこいつを倒した時は――」

中也が真剣な表情で語っている間にも、俺の脳内にはひとつの文句

がぐるぐると回っていた。

……ついさっきまで馬鹿話してたのに、なんでこんな戦闘シーンに入ってるんだろう。

第31話 光と風と爆裂魔法

めぐみんは後方待機中。

国木田は手榴弾を作って中也に渡し、中也はそれを持ってタコに襲撃をかけるものの触手の可動域が広すぎて上手く距離を詰められない。敦も様子を見ながら触手を切り裂いているが、切っても切っても触手が増える。その上、人の形をしたタコは最早完全に怪物の形をしたタコに成り果てようとしていた。

「カズマさんカズマさん、私達ってこういう時役立たずよね」

「当たり前だろ、ハンスの時みたいなモンだ。マジで強い敵がきた時は、いつもの小細工でどうにかできる訳じゃねーんだよ」

——そして、そんなみんなを見守る俺とアクア。

アクアは敦と中也に支援魔法をかけていたが、それ以来何もしていない。俺はというと普通に何もしていない。というか何も出来ない。だってそうだろう。こういう時に俺が前に出たところで、足でまといになるだけだ。

対人の嫌がらせ戦法なんて、こんなタコの化け物には通用しない。

「おいカズマ！ 貴様は何もせんのか！」

「しないんじゃないんでできないんだよ……」

アクアと二人で大人しく戦況を見守っていると、案の定国木田から檄を飛ばされたのでげんなりしながら説明をする。

「……成程な……。人相手には最高の嫌がらせに使える貴様の能力も、あれ程の規模となると効かん訳か」

「そういうことだ。アクアも対悪魔戦じゃない限りサポートに回るしかないからな」

「そういうことよあああああーっ！ 助けてカズマ、今、私の頭のチャームポイントをタコ足が掠めたの！ このまま突っ立ったら私達も攻撃対象にされるわよ！」

悲鳴をあげて蹲るアクア。ふと正面を見ると、確かにタコの攻撃範囲はどんどん広がっていて、中也と敦が対応し切れていない時の触手は全てこちらに向けられている。

「はあ……つたく、しよーがねえなああああああああ！」

「え、カズマ何も出来ないんじゃない!? 死んじゃうと思うんですけどー!」

「どうぞカズマ、貴様が出たところで……!」

——こんな場面、今までだって何度もあった。魔王軍の幹部と戦って、果ては魔王とも戦った。

それだけじゃない、冬將軍にリザードランナー、俺は何度も死んでいる。

それでもこうして、馬鹿な此奴らの隣で最悪の冒険を続けているのはきつと、俺の幸運値が高いからに他ならないのだろう。

派手な戦闘なんて出来ない。俺はラノベのチート主人公じゃないから。

カツコよくもない。俺は元々ただの引きこもり高校生なんだから。だけど——今、俺にしかできないことが確かにある。

「国木田、手榴弾一個くれ!」

「……やるんだな。死ぬかもしれないぞ?」

「誰に向かって言ってるんだこの野郎」

「上司には敬語を使え!」

国木田が異能で出した手榴弾を受け取り、蹲るアクアを振り向いて。

「アクア、支援魔法くれ。最高のヤツ」

「……カズマさんって時々私よりも馬鹿だと思うの」

アクアは立ち上がり、言葉とは裏腹に晴れやかな笑みを浮かべて支援魔法をかけてくれた。

……さつきから中也は、手榴弾を持って敵に近づき、手を伸ばしたところで触手に狙われて慌てて回避するという状況を繰り返し返している。さつき聞いた話からして、彼奴がやりたいのは多分——

「中也あー! 敦! サポート頼む! 国木田とアクアはここから離れてろ! めぐみんは俺の合図で爆裂魔法を使え!」

三人の反応を見ることなく、俺は強化された脚力で駆け出した。

……視界の端で、中也が、敦が、めぐみんが笑っているように見え

たのは気のせいだろうか。



云うが早い、カズマ君が駆け出した。

カズマ君のやりたい事はよく分かる。だから、カズマ君が『それ』を成功させられるように、僕達はサポートしてあげなければならぬ。

中也さんに視線を走らせると、バッチリ目が合った。……考えていることは同じらしい。

僕達は同時に頷くと、肥大化したラブリフトに向かって全速力で駆けるカズマ君を狙う触手に狙いを定める。

僕達のやることは——カズマ君が攻撃を受けないようにすることだ！

「こつちだ糞タコ、余所見してんじゃねエ!!」

カズマ君に向かって一直線に走る触手を押し潰す重力。けれどそれだけでは足りない。後から後から、何本もの触手が己の身を守る為にカズマ君に触手を伸ばす。

「中也さん、そつち側お願いします!」

「上等だ、そつちは任せませ!」

カズマ君の右手側に迫る触手を僕が虎の爪で切り裂き、左手側に迫る触手を中也さんが重力で吹き飛ばす。今日は何だか身体が軽い。アクアちゃんの支援魔法のお陰だろうか。

そうこうしている内にも、カズマ君はラブリフトの触手を掴んでその巨体を山と見立てたように登っていく。すかさず殺意を持って飛んでくる触手をひとつ残らず切り飛ばす。きつと、僕の後ろでは、中也さんが異能で触手をどうにかしてくれているのだろう。

……カズマ君は本当に不思議な子だ。僕より歳下とは思えない。

普段は誰よりも頼りないのに、この子が居ればどんなことだってできる気がしてくる。

「ありがとな中也、敦! あとは俺に任せろ!」

頼もしい声に振り向くと、ラブリフトの身体を中心に僅かに空いた隙間のような所に手をねじ込むカズマ君が見えた。

「任せろじゃねえよ、そのままだと死ぬぞ!」

叫んだ中也さんがカズマ君の腕を引いて後退した瞬間、ラブクラフの全身から閃光が迸る。

直後——衝撃。

中也さんがカズマ君と共に地面に投げ出され、アクアちゃんと国木田さんが爆風によるめいた。

『——彼奴を前倒した時は、糞太宰が彼奴の内部に仕込んだ爆薬と、俺の異能を使った。今回も上手く内部から攻撃出来りゃ、あとはめぐみんでどうにかなるだろ』

この戦闘が始まった最初の中也さんの言葉だ。

そう……内部からの手榴弾で怯ませた後に、外部からの膨大な威力の攻撃をぶつける。

「ふっふっふ……ついに私の出番が来ましたね！」

目が痛くなる爆風をもともせず、紅い瞳を煌めかせてマントを翻す魔法使い。

「——我が名はめぐみん。紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者！……訳の分からないタコ型モンスターよ、我が究極奥義で美しく散るがいいっ！」

「みんなっ、急いで逃げろ！……巻き添え食うぞ！」

カズマ君の合図で弾かれたように駆け出した僕達は、高らかな声と眩い閃光を最後に意識を失った。

第三部

第32話 この孤独な青年にコミュニケーションを！

それは、カズマ君達が来てから最早当たり前となっていた、莫迦み
たいな一日の始まり。

「ちよつとこれどういうこと!?!」

その莫迦みみたいな一日の始まりに私が加担しているというのは非
常に嫌なのだけれど、仕方が無いと思う。

……仕事机のパソコンを開いた瞬間、「購入完了」という文字と共に
表示されたとんでもない値段——「世界三大珍味、三ツ星シェフの料
理直送コース ? 870000」が目に入ったのだから。

「あ、ダザイじゃない。なんか美味しそうだったから、社の人みんな
食べようと思つて買ったわよ?」

「ねえ、君の目は節穴なの? この値段について何も思わなかつた
の?」

無邪気な笑みを見せるアクアちゃんを見ると、純粋な殺意が湧
いてくる。とかどうかどうやって私のパソコンのロックを解除したの
だろう。機密保持の為に何重にもパスワードロックをかけていたと
いうのに。この子は時々摩訶不思議な行動で私を驚かせる。

「円って日本の通貨よね。八十七万ってそんなに高いの? クエス
トに行けばすぐ稼げるでしょうに」

「君達の世界と違って、こっちはモンスター倒してすぐ稼ぐなんて
ことは出来ないの!」

「でもカズマさんが『いいかアクア、この世には教師っていうモンス
ターがいてな、悲しい悲しい不登校の少年を無理矢理外へ連れ出そう
とするんだ』って……」

「罰としてこれ没収ね」

「あつー!」

アクアちゃんの言い訳は聞くに堪えず、このまま聞いているとアク
アちゃんをカズマ君諸共二回殴って五発撃つてしまいそうだったの

で、怒りを抑えるためにアクアちゃんの羽衣をすりと奪う。

アクアちゃん曰く、「これは女神のアイデンティティ」らしいので罰には丁度いいだろう。

目を吊り上げて掴みかかってくるアクアちゃんをいなしながら八十七万について考えていると。

「あれ？ 太宰、お前何やってんだ？」

「カズマ君、アクアちゃんが君から変なことを教えこまれたせいで私のお金はピンチになりそうなのだけけれど」

「かじゆまさああああああああん！ この包帯男が私の羽衣盗ったあああああああつ！」

任務を終えたらしいカズマ君が部屋に入ってきて、その後ろから青い顔をした国木田君が続く。……きつと今日もカズマ君に苦労させられたのだろう。

アクアちゃんが凄まじい勢いでカズマ君に抱き着き、カズマ君は「どうせお前のせいなんだろ」と正論を投下。アクアちゃんはとうとう地面に転がって暴れ出した。

「太宰、そろそろこの駄女神のせいで苦情が来そうだから返してやってくれ」

「ごめんそれは無理」

「……はあ、なら仕方ねえな」

だんだんアクアちゃんを見るのが楽しくなってきた私はカズマ君の提案を断った。……あとからこの決断を後悔することになるとは知らずに。

「運勝負だ、太宰。俺が今からステイールを使う。羽衣を盗れるかどうか——」

「へえ、面白そう。この私と運で勝負だなんて、いい度胸じゃあないか」

カズマ君も段々ノツてきたのか、嬉々として右手を突き出した。いつの間にか社員の視線が私達に集まっている。この莫迦な喧嘩の行方を知りたいらしい。

「じゃあいくぜ——『ステイール』っ！」

カズマ君の右拳から眩い光が溢れ出す。その手に握られているのは、アクアちゃんの羽衣——ではなく。

「チツ、失敗か……何だこれ。写真？」

「カズマ君、それ……」

——四年前、私がバーで安吾と織田作と撮った、最初で最後の写真だった。



爽やかな風が私の頬を撫でる。

足元にまばらに並ぶ小さな墓標を避けながら、大木の根元の『それ』に近づいて。

「……久しぶりだね、織田作」

その下に眠っているであろう旧い友人に微笑んだ。

——あの後、社にしているのが気まじくなつた私は適当な理由をつけて社を飛び出し、無我夢中に走って……気がついたらここにいた。足が勝手にここをめざしていたらしい。

カズマ君とアクアちゃん、ダクネスとめぐみんちゃんを見ていると、何だか以前の私達を思い出してしまうのだ。

趣味が合う訳でも無いし、喧嘩だつてするけど、仲のいい四人。

……そんな四人を羨ましく思っている自分がある。

「ああああああああ!! そ、そのアンタ！ 助けてくれ！」

そう、この孤独の一生から救い出して欲しいと思っている自分が……。

………助けてくれ？

背後から聞こえた断末魔の悲鳴。思わず振り向くと、そこには涙と鼻水で凄いことになった顔を此方に向け、必死に手を伸ばす中年の男性の姿が。

「ええと……何をなさってるんですか」

「女が！ 女のガキが、ここまで追いかけてきて——」

「待ちなさい！」

——男性の背後から、険しい声と共に一人の少女が現れた。

緩く結った黒髪。赤いリボンで飾られた胸元を露出した独特の服。

短いスカート、長い靴下。黒いマント。一見した印象は、魔法学園の生徒という感じだ。そこまで考えて、私は気がついた。

……燃えるように紅く煌めく、少女の瞳に。

「よくも、よくも私の大事な日記帳を盗ってくれたわね！ アレには今まで話しかけてくれた人のリストや、一緒にご飯食べてくれた人のリストが載ってるの！ 命にも代え難い大事な物よ！ 早く返しなさい！」

「悪かった！ でも俺は交番に届けようと……」

「問答無用よ！ 『ボトムレス・スワンプ』！」

少女の瞳が一際強い輝きを放った瞬間、男性が突如足元に現れた沼に下半身を沈められた。

……嗚呼、どうして今日はこんなにロクなことに巻き込まれないのだろう。

「えっと……君、そういうのは良くないよ。やめてあげ給えよ」

「えっ！ え、ええと、貴方誰ですか!? あっ違う、こういう時は名乗るのかしら……うう、でも嫌だなあ……」

私が話しかけた途端、先程までの勢いはどこへやら、突然狼狽え始めた謎の少女。まあ聞かなくても何となく分かる。

やがて少女は意を決したように顔を上げ、両手を身体の前で組むと……！

「わ……我が名はゆんゆん。アークウィザードにして、上級魔法を操る者。やがては紅魔族の長となる者……！」

着ていたマントをバサツと翻すゆんゆんちゃんを見ながら思った。

……カズマ君が来てから、変なことしか起こらないなあ……。

第33話 この哀れなぼつちに厄災を！

「バニルさんから聞いて、バニルさんのご友人の方の魔法でこっちに飛んでくることに成功したんですけど……正直、状況がよく分からなくて。バニルさんは世界の危機がとか言っていましたけど、その辺りの事情をご存知ないですか？」

オドオドした様子で私の顔を窺うゆんゆんちゃんに、ニツコリと微笑んで。

「さあ、私はよく知らないなあ。でも外に女の子を放り出す訳には行かないし、事情がハッキリするまで此処にいなよ」

………しれつと大嘘を吐くことに成功した。



この紅い瞳。あの魔法。

十中八九、この子はめぐみんちゃんと同じ類いの子だろう。……あの爆裂っ子と同じ。

つまり、そんな恐ろしい女の子二人を同じ場所に居合わせるなんて出来ない。加えてカズマ君やアクアちゃん、ダクネスのような頭のおかしい人達も一緒なのだから尚更だ。

だから、私は嘯いた。

関係ないフリをしよう。心の中で強く誓って、現在、社員寮から離れたセーフハウス——私がマフィア時代に使っていた仮宿にいるのだ。仕事はしばらく休むことにする。

女の子と二人きりはまずい？ まさか。何処ぞの変態じゃあるまいし、こんな純粹そうな子に手を出すなんてことはしない。

……それに、正直今はそんな気分じゃないし。

「あ、あの！ 名前を教えてくださいませんか？」

「……へ？」

全く違う方を向いていた思考を正すと、ゆんゆんちゃんの紅い瞳が強い輝きを放ちながら私を見つめていた。

名前……そんな質問をされるなんて思ってもみなかった。誰かに自己紹介をする機会がめつきり減ったからだろうか。

「私は……太宰治。姓でも名でもどっちでもいいよ」

「ダザイオサム……ダザイ、オサムさんですよ。じゃあオサムさん……えつと、お世話になります！」

……沈黙。

年齢も性別も住む世界も違う私達に、そんな諸々の壁を超えて盛り上がる共通の話題など存在しない。当たり前だ、あつたら逆に驚く。ゆんゆんちゃんが気まずそうに髪をいじり、私はソファにダイブする。寝るから話す気は無いという意味表示。女の子相手に酷いじゃないかと思う自分も居るのだが……正直今はそんな気分じゃない。

——咖？が食いたいな……。

煙草の煙が見えた。二度と目を開けることの無い友人の指の隙間から立ち上った煙は、部屋の空気に溶けて消えていく。

……本当に、嫌なことを思い出してしまった。

そんな、気まずく苦しい沈黙を破ったのは、甲高い電子音だった。

発音源は私のスマホ。着信は——非通知。

「オサムさん、それ何ですか？音が鳴ってますけど……」

「スマホだよ。遠隔連絡機器兼、何でも出来る万能グッズさ」

感情の入らない自分の声を遠くに聞きながら、スマホを耳に押し当ててる。

『——ポトマフィア元最年少幹部、太宰治。お前の仲間はあと三日で死ぬ』

……嫌なことは続くものだ。私は漏れる溜息を止めることが出来なかった。



「オサムさん、何処に行くんですか？」

「……さっきの電話の発信主を突き止めに、ね」

時刻は正午近く。指定された場所に早足で向かうと、ゆんゆんちゃんも着いてきた。

「ねえゆんゆんちゃん。多分、私はこれからかなり危険な案件に巻き込まれるのだよ。近くに居たら君まで巻き添えを食うかもしれない

い。それでもいいの？」

わざと声に苛立ちを滲ませながら云う。本当は「邪魔だからついてくるな」と云ってしまいたかった。いつものようにオブラートに包んで笑顔ではぐらかすだけの元気が、今の私には無い。だからせめてゆんゆんちゃんが私の意図を汲み取ってくれるように話したつもり、だったのだけれど……。

「何言ってるんですか！ 行く宛てのない私を拾ってくれた優しい人に恩返しをするのは当然です！」

「……君が来たって出来ることなんか、」

「あります。これでも紅魔族の端くれです。貴方よりはよっぽど戦えます」

その強い口調に、思わず彼女の顔を見返した。煌めく紅い瞳が真っ直ぐに私を射抜く。

……こんな年下の子に、こんなに面と向かって反論されたことなんて未だかつて無かった。

不思議だった。何の面識もない、生きる世界が違うこんな女の子にちよつと喝を入れられただけで、こんなにも気が抜けるものなのか。けれど、きつとそれだけでは無い。この子の持つ真っ直ぐな優しさが、私の中の何かを解した。

『仲間は三日で死ぬ……』仲間。オサムさん、この仲間っていうのが誰なのか分かりますか？」

「さあね。何人を指すのか誰を指すのか全く分からない。……けど、」

——この子なら、信じてもいいのかな。

その瞬間まで、私は彼女をこの案件に深入りさせるつもりは無かった。けれど、たった今決まった。

「指定された場所は此処だよ」

ゆんゆんちゃんの視線を、目の前のその店に誘導する。

夜ならばネオンサインが煌めき、昼の今は静かに暗く存在するその店——”Lupin”。



階段を下りた瞬間、オサムさんが顔をしかめて言った。

「駄目だゆんゆんちゃん、やっぱり戻ろう。嫌な予感しかしない」

「えっ、どうしてですか?」

私が訊き返しても、オサムさんは答えない。店の奥に苦々しげな視線を注いでいる。

誰か知り合いでも居るのかな。そう思って店の奥を覗き込み――

「ちよつ――」

直後、右耳を何かが掠めたと思ったら、オサムさんが身体を横に逸らしていた。私の視界の右側に、黒い何かが映り込む。

コンマ数秒遅れて状況を理解した私は、オサムさんを庇うように立っていつでも魔法を発動できるように構えをとった。

「……へエ、コイツは驚きだ。太宰、手前がこんな年下のオンナノコに守られるような雑魚だったとはなア」

特徴的な黒い帽子。黒いジャケット。小柄ながらも引き締まっていることが分かる身体。そして……バーの席に座っているながらも正確にナイフを投擲し、続く動作をオサムさんへの攻撃に繋げようとしたその判断力。

ただ者じゃない。強い魔物とは何度も戦ってきたけど、この人にはそのどれとも違う、独得の威圧感がある。

青く鋭い瞳に気圧されないように睨み返すと、私の後ろから溜息が聞こえた。

「はああ……本っ当に最悪。しかも、この子は私を守れるような子じゃないよ。普通のか弱いお嬢さんだ」

「ハッ、抜かせ。手前が此処に誰かを連れてくるってこと自体が異常だろうが」

「……で、君は何の用?」

オサムさんと少年は先程の鋭い空気から一転、気の置けない友人同士のような砕けた雰囲気になって店の奥に歩を進める。

……この人達はこういう関係の人達なんだろう。友達ってこういうものなの? 出会い頭に殺し合い紛いのことをするの? 私もめぐみにこういうことしたら認めてもらえるのかな……今度やって

みよう。

少年が店の奥の席に座り、次にオサムさんが座ったので、私はその隣に腰を下ろす。二人がお酒を注文するのを横目で見ながら、私は何も頼まずに二人の会話を聞いていた。

「どうも最近、不審な事件が頻発してる。万引きに窃盗、路上での殴り合い……そして、謎の青髪芸人の出現。手前が一枚噛んでるんじゃないのか?」

「……う、うーん。私は知らないよ。最後のひとつとか、特に知らないなあ」

「特に知らないって何だ、日本語おかしくなってるぞ」

青髪芸人……それを聞いて何となく思い出すのはアクアさんのことだ。青髪といえは、あの人も綺麗な青色の髪をしている。まあ、この世界にいるはずがないのだけど。

「しかも今日に至っては不審電話だ。手前が俺の電話番号を誰かにリークして、何かやらせようとしてるとも考えられる」

「電話……それは私も受けたよ。三日後に仲間が死ぬってやつ」

「——他には?」

「え、他って……それだけだけど、他に何が——」

私には見えた。二度目だったからかもしれない。

けれど、二度目にして初めての現象。

——その攻撃には、本気の殺意が乗せられていた。

『『ライト・オブ・セイバー』っ!』

オサムさんの首筋を狙って振られた銀の刃を、私の両手から迸った光の刃が切り裂いた。

光の隙間に微かに見えた、少年の獰猛な笑み。切り裂かれた空気の裂け目から聞こえてきた、微かな呟き。

私はオサムさんの身体を抱えてバーの階段を駆け上がる。

……まさか、この世界に来て早々、こんなトラブルに巻き込まれるなんて。

「——俺の電話にはまだ後がある。探偵社員、太宰治もしくはそれ以外の社員全員を殺さなければ、マフィアの構成員を全員殺す、だ」

第34話 この愚かなる嘘に雷を!

——探偵社員、太宰治もしくはそれ以外の社員全員を殺さなければ、マフィアの構成員を全員殺す——

「幾らアレが脳筋とはいえ、そんなくだらない脅しに乗るような人間では無い筈だ。けれどアイツは迷わず私を殺しにきた。ということは恐らく、確固たる証拠があるのだろうね」

「探偵社って何ですか？ マフィアって何なんですか!? オサムさんはどうしてお友達と殺し合いなんてしてるんですかああああああああああああ!!」

「ちよ、ちよつと落ち着いて、ゆんゆんちゃん落ち着いて、目が怖い」
バーから逃げるように走っている最中、頭の中がぐちゃぐちゃになった私は堪らず叫んでオサムさんの身体を揺さぶった。

だって——あんなの信じられるわけが無い。

今まで強いモンスターと戦ってきた、モンスターを倒したことも何回もある。上位悪魔と戦ったこともある。けれど、人間が人間に本気の殺意を向けている場面に出くわしたのなんて初めてで。

……純粹に、怖かった。何よりも、他人を本気で殺そうとするその動作に慣れが感じられた、あの人のことが怖かった。

「あとさあ、あれはダメだよ」

「あれ? あれってなんなんですかっ」

「魔法……みたいなの使ったでしょ。あんなの使ったら、中也に君が普通の女の子じゃないと自らカミングアウトしたも同然じゃあないか」

「……敵に情報を漏らすなって言いたいんですか? あのままだとオサムさんが死んでたかもしれないの?」

「そんなことは無いから大丈夫だよ。あの脳筋の攻撃なんていくらでも読める」

「そういう問題じゃ……」

——そして、本気で殺されかけても平然としているこの人も怖い。
友達じゃなかったんですか? どうして平気なんですか? 疑問

は形にならずに身体の奥に蓄積されていく。

その時、オサムさんのコートのポケットが震えた。オサムさんは通信機器兼万能グッズを取り出して耳に押し当てる。もちろん、スピーカーをオンにして。

『言い忘れていたが——期限までにポートマフィアの中原中也を殺せば、お前の仲間は助かる。仲間というのは勿論、武装探偵社員全員だ』

「……お前は誰だ」

オサムさんの、地の底から響くような問いに動じることなく声は途切れる。

混乱する頭で状況を整理した。あの人——チュウヤさんは、ぶそうたんでいしゃ？ の人、もしくはオサムさんを殺せば、まふいあ？ の仲間を助けることができる。オサムさんは、チュウヤさんを殺せば、仲間を助けることができる。

……犯人は、オサムさんとチュウヤさんを殺し合わせたということ？

考えただけでゾツとした。魔王軍の魔の手が忍び寄っていた私の世界でも、そんな物騒な事件は起きていなかった。

「オサムさん……これからどうするんですか？ 本気であの人を殺すんですか？」

「……ハッ、まさか。これから情報を集めるよ。中也が云つてたことも気になるしね」

あの人が言っていたこと……不審な事件が頻発しているということとだろうか。

……怖い。

里でも独り、アクセルに来てから知り合いは増えたけど相変わらずパーティーは組めない毎日。一人には慣れているつもりだったのに。カズマさんやアクアさん、ダクネスさんに……めぐみん。そして、里のみんな、アクセルの街のみんなが居ないこの状況で、こんな事件に巻き込まれていることが、こんなにも心細い。

——だけど、やらなきゃいけない。

この世界で初めて、私に優しくしてくれた人なんだから、私が助けてあげないと！

「……オサムさん！」

前方を歩くオサムさんが振り向いた。その顔に向かって微笑んで、一言。

「私、全力でお手伝いします！ 私に出来ることがあれば何でも言っして下さい！」



「……チュウヤ。何だか浮かない顔ですけど、どうかしましたか？」
執務室の椅子に腰掛けてぼんやりと虚空を見詰めていると、部屋着姿のめぐみんが声をかけてきた。

……太宰を殺すことなんて、いくらでも出来たはずだ。至近距離。完全な不意打ち。身体能力の差——。

思わぬ少女異能者の出現で呼吸を乱されたとはいえ、あそこから体勢を立て直して二人とも殺すことくらい——出来たはず、なのに。

「……何でもねえよ。つかダクネスがいねエじゃねーか」

「あの人なら『街を歩いてくる』と鼻息を荒くしながら出ていきましたよ。多分男の人に酷い目に遭わされたいんじゃないですか」

「酷い目に遭わされたいとか初めて聞いたわ」

……マフィアが全員死ぬということは、こいつらはどうなるのだろう。マフィアもどきだから死ぬことは無いのだろうか。

「……チュウヤ」

「！」

ふとめぐみんが膝を曲げ、俺の顔を正面から覗き込む。紅い瞳が不安げな陰を宿して揺れている。

「何かあるんだっけって下さいよ。一応仲間なんですから」

……普段は莫迦なことしかししないコイツも、一応心配してくれているらしい。

「……ありがとな。じゃあ一つ、頼みたいことがあるんだが」

「！ 何ですか、私に出来ることなら何でもしますよ！」

頼み事、と聞いて素直に喜ぶるのは、此奴が良い奴だからなのだろう

う。

……だから俺は、優しく微笑んでめぐみんの頭を撫でながら、

「——お前さあ、八百屋の前で爆裂魔法ぶっぱなしただろ。後で謝りに行けよ」

「……………ごめんなさい」

……こういう所を直して欲しい。本当に。



オサムさんはどうやらホテルを予約したらしい。

「どうして家に戻らないんですか？」

「アレは社員寮だからね。これの捜査の中で社員に見つかるのは拙い」

「しゃいん……探偵社員ですか？」

「その通り。よく分かったね」

……それにしても、随分高級そうなホテルだ。こんな所に泊まるお金はあるのだろうか。

要らない心配をする私を他所に、オサムさんはホテルに入ろうとして……。

「……駄目だゆんゆんちゃん、他のホテルにしよう」

本日二度目のドタキャン宣言をした直後、振り向いたオサムさんの後方から何やら騒ぎ声が聞こえてきた。

「何だ、この意気地無し！　こんなところまで連れてきておいて何もしないとはどういうことだ！　貴様それでも男か！」

「ひいっ！　だ、だってこんなに腹筋が割れてるとは思わないだろうー！」

「ぶっ殺」

……凄く聞き覚えのある声。私がオサムさんの肩越しに現場を覗こうとするも、オサムさんは何故だかそれを阻むようにして両手を広げる。

「ちよっと、どうして隠すんですか！」

「いやあ、子供には見せられないかなあって思っ」

『『ライトニング』！』

誤魔化そうとするオサムさんの眼前すれすれに雷を落として黙らせた私は、オサムさん押し退けてその現場を目の当たりにし――
「あっ！ ダザイではないか！ そ、それにゆんゆんまで!? 二人してどうしてこんなホテル街に……ま、まさか二人とも……!」
「……オサムさん。どういうことか、説明して下さいね？」
……オサムさんに向かってにつこりと微笑んだ。

第35話 この双つの黒に優しさを!

「つまり……私がめぐみんやダクネスさんやカズマさんやアクアさんに会ったら面倒なことになると思って、敢えて何も知らないフリをしていたってことですか?」

「その通り!」

『『ライトニング』!』

太宰さんの断末魔をBGMに、私はホテルへと足を踏み入れた――



「ところでダザイ、ここは普通のホテルだが、……未成年の私達を連れてきても良かったのか? カズマ曰く、未成年は何かと制限があるらしいが。普通のホテルとはいえ、未成年を連れてきてもいいものなのか?」

「……え、ごめんごめん待って、二人とも未成年だったの?」

「ぶっ殺」

……どうやら私は未成年だと思われていなかったらしい。

大人っぽい雰囲気のあるダクネスさんはともかく、私までそんな風に思われてたなんて……心外だなあ。

ダクネスさんの猛攻をひらひらとかわすオサムさんに、私はひとつ溜息をついて。

「もう……じゃあさつきあの人が言ってた青髪芸人って、アクアさんのことですか?」

「多分ね……はあ、もう最悪だよ! めぐみんちゃんと似たような子が増えるのかあ……胃痛が……」

「私をあんなのと一緒にしないで下さい!」

私はいつまでも爆裂魔法に拘ってるような馬鹿な紅魔族じゃない!

でも……めぐみんは馬鹿だけど……。

初めて見た爆裂魔法。あの時の衝撃は忘れられない。

圧倒的な破壊力。ド派手な魔法発動。全てを蹂躪する力。……めぐみんがああ魔法に心酔している理由が、ちよつとだけ分かった気が

した。

「それにしても、ゆんゆんはどうやってこっちまで来たのだ？」

「バニルさんに言われて……ウィズさんの魔法でこっちに來ることに成功したんです。それで、偶然オサムさんに会って……」

「まあその話は後だ。まずはさっきの話の続きをしようじゃあないか」

オサムさんがベッドに腰掛ける。オサムさんの全身から漂う空気が一気に冷え、部屋の温度が下がったように錯覚させられた。

ダクネスさんに向けられたオサムさんの視線が、絶対零度の鋭さを以てダクネスさんを貫く。

「ダクネス。君はどっち側？」

「ど……どっち側とはどういうことだ」

「異世界から来たとはいえ、今はマファイアに身を置いてる。……ねえダクネス、君は自分がマファイアの一員だと、本当にそう思ってるの？」

——オサムさんの言葉の意図はよく分かる。

恐らく、ここでダクネスさんがマファイアの一員だと答えれば、何らかの方法を使ってダクネスさんの動きの一切を封じてしまう気である。

そうしなければ、オサムさんの身が危ないから……。

そうだと分かってはいても、ハラハラせずにはいられない。

でも、ハラハラしている場合じゃない。

オサムさんもダクネスさんも、私にとつては大事な人だ。二人の身に何かあるようなら、私は全力で二人を守らなきゃ。

数秒の後、ダクネスが口を開く。切れ長の瞳には不安の色が見え隠れしている。

「……私は此方の世界のことはまだよく分からない。だが、ひとつ分かるのは、此方の世界は私達の世界とは全く別物だということだ」
黙るオサムさん。沈黙の音が耳に痛い。

ダクネスさんは慎重に言葉を選びながら話し続ける。

「マファイアにいればよく分かる。人殺しイコール悪人ではないとい

うことが。きつと、何らかの事情でそのような道を歩まなければなら
ない者で出来た組織なのだろう。だとすれば私はマフィアにはなれ
ない。私には重い過去なんて無いし、命の危険を感じる毎日なんて、
冒険者稼業をやっているとはいえかなり縁遠いものだ。……だが、」
オサムさんが息を呑んだ。私も思わず息を呑んだ。

——ダクネスさんが、笑っていたから。

花が咲いたように可愛らしい、けれど真摯な笑顔。

「冒険者になって、屋敷の外に出て……初めて、守りたいと思えるも
のが出来た。信じられない方法でパーティ勧誘をしてきたクリス、変
な最弱冒険者のカズマ、綺麗なのに馬鹿なアクア、頭のおかしいめぐ
みん……。出会ったばかりの頃は、まさかここまで大切な友人やパー
ティメンバーが出来るだなんて思ってもみなかったのにな。今でも
不思議だ」

「ダクネスさん……」

「もし私がマフィアで、あの三人と同じように大切な人を見つけて
いたのなら、私はマフィアの一員になっていたのだろう。でも違う。
私の居場所は、馬鹿で滅茶苦茶な奴ばかりのあの街で、馬鹿な三人が
いるあの屋敷だ。私はやっぱりマフィアにはなれない」

ダクネスさんは息を吸って口を閉じる。話の終わりだ。

暫くの間、再び訪れた沈黙が部屋の中を支配した。

オサムさんは何かを考え込むように唇をきつく閉じている。伏せ
られた睫毛の影が目元に落ちている。

「……ダクネス」オサムさんが云った。「君に全部話すよ。君にも手
伝って貰おう」

「……ってことは！」私は思わず声をあげてしまった。オサムさん
がにっこりと微笑んで、

「変態だけど、マフィア側では無さそうだし……ステータス自体は
高そうだから戦力にはなるだろうしね」

「最初の一言には異論があるが、私はこれでも上級職だ。どんな攻
撃も防いでみせる！」

こうして、私とオサムさんとダクネスさんという臨時パーティーが

結成された。



「で……わざわざ八百屋に謝りに来たのは、それだけが理由じゃないんでしよう？」

爆裂魔法をぶっぱなして営業妨害の疑いをかけられた（いやまあ、モロ事実なんだが）めぐみんを連れて八百屋に謝りに行った、その帰り。めぐみんが紅い瞳を興味深そうに輝かせて首を傾げる。

「……まあな」

「さっきの悩み相談ですか？ 何かあるんなら言っておきなよ」

……此奴は、少し頭がおかしいだけの良い奴だ。そしてそれはダクネスも同じで。

だからこそ巻き込みたくない——つい先程まで俺の頭を中心に突き刺さっていた重い思考が、瞬時に取り払われる。

此奴なら、突拍子もない案で無茶苦茶なことを仕出かしてくれるかもしれない。

「実は、ちっと困ったことになりやがってるんだよ」ということで、全てを洗いざらい打ち明けることにした。

妙なメールのこと。最近、不審な事件が頻発していること……。全てを聞き終えると、めぐみんがふんふんと頷いて。

「不審な事件……メール……。あ、もしかして！」

「もう分かったのか!？」

「……いえ……分かったわけではないのですが、ちよつと思いついたことがあります。チュウヤ、ついてきてください！」

真剣な表情で振り向いためぐみんが、俺の手をとって駆け出した。

第36話 この爆裂探偵に賞賛を！

私はチュウヤの手を引いてマフィア本部に逆戻り。複雑な廊下を進んで階段を上り、目当ての部屋へ真っ直ぐ進む。

「おい待て、こっちはある程度階級が無いと来れないエリアじゃ……」

「ポートマフィアと云っても、案外簡単に侵入出来るものなんですね」

「侵入!?! —— そうだセキュリティ！ 手前、階級も無い癖に何でセキュリティコード知ってやがる!」

「私にかかればこの程度はお手の物ですよ」

背後で目を白黒させるチュウヤの眼前に、黙ってスマホの画面を突きつける。チュウヤが息を呑んだのがハッキリ感じ取れた。

——画面に表示された、『サトウ カズマ』の着信画面に。

「カズマ経由でオサムからコードを聞き出したんです。あ、それとチュウヤ、今更ですけどスマホとやらを買ってくれてありがとうございます」

「手前にスマホなんざ買ってやるんじゃないかな……」

頭を抱えるチュウヤに微笑みを投げ、目的の部屋の前で急ブレーキをかけた。

『第三十七番情報書庫』と書かれたプレートが貼られた扉を押し開け、室内に足を踏み入れる。

「……まさかとは思いますが、何度も此処に出入りしてるなんてことは……」

「今週で三回目ですね。この前読んだ『爆裂マフィア 対応書』ってヤツは結構面白かったですよ。勿論、読んだ後に燃やしておきましたけど」

「マジで手前一回死んでくれ」

爆裂マフィア対応書は、チュウヤと首領が中心となって書き進めた書類らしい。まあ、読んで字のごとく、暴走する私をどのように抑えるかを纏めた書だったのだが、私は暴走などしないし、書いてあるこ

とがあまりにも失礼だったので焼いておいた。

「……「あれ、あの書類は？」とか訊かれたら、首領になんて説明すればいいんだ……」

「まあそれはどうでもいいことなのですよ。私が云いたいのはもつと——」

幾つも並んだファイルの背表紙を掌でなぞりながら、目的の書類を探す。確か、この辺りに……。

「……ありました」

「何だコレ」

赤いシールが貼られた背表紙。勿論、私がこの前読んだ時に、次も見つけやすいようにと貼っておいたものだ。

私はシールを剥がすと、他のものより幾分か薄いそのファイルを取り出してチュウヤに見せる。

『新型異能兵器についての陳述書』

「異能兵器だア？　こんなの手前に関係ねえだろうが」

「私には関係ないですよ。……今は、未だ」

「はア？」

私は遠慮なくファイルもとい陳述書を開き、ページを捲っていく。最初こそ怪訝な表情だったチュウヤも、内容を読み進めるにつれて表情に険しさを滲ませた。

「どうやら最近、日本のイノウ研究所で新型異能兵器の研究・開発が進んでいるようですが。イノウ研究所のデータベースに不審な動きがあったらしいんです」

「……で？」

「次はこっちです」

更にページを捲ると、『横浜市市内での不審事件』の項が現れる。

「事件が頻発……武器の密輸……壊れると消える物体の出現。この、壊れると消える物体っていうのが問題なのです」

チュウヤは未だ全てを理解出来ないような表情でいる。当たり前だ、核心に踏み込んでいないのだから。

そう——これを訊けば。

「チュウヤ。貴方がその電話の内容をすぐに信じた理由は何ですか？」

チュウヤの目が大きく見開かれる。真逆そんなことを改めて訊かれるとは思ってもみなかったのだろう。

だから敢えて訊いた。この答え次第では、ゴールが少しずつ見えてくるから。

チュウヤは逡巡した後、それでもやっぱり決断しきれないような空気を醸し出しながら口を開く。

「……電話はかかってきた直後に逆探知した。だが、辿れなかった——否。それどころじゃねえ。この世界の何処にも、俺に電話を掛けてきた時に使われた端末が存在しなかったんだよ。ありや小物の所業じゃねえよ」

存在しない端末——。

私は思わず笑みを深める。

もしかしたら、爆裂探偵である私の出番かもしれぬ。

「チュウヤ。最適解は、ダザイオサムを殺すことではありませんよ」この問題は、もつと深い——。



「電話の逆探知が出来ない、だと？」

「残念ながらね」

どんなに携帯を滅茶苦茶に弄り回しても、発信主の居場所は特定出来なかった。……否、そもそも私の携帯に電話を掛けてきた端末がこの世の何処にも存在しないのだ。これは可笑しい。ただの悪党が出来る技じゃない。

電波弄りに定評のある私は思わず溜息をつく。簡単に出来ると思っただけだなあ……。

「ダクネスちゃんは何か知らないの？ ストーカーとか慣れてるでしょ」

「ぶっ殺されたいのか貴様、高潔な貴族の娘である私がそんなことする訳ないだろう！」

「貴族の娘……」

両手を銃の形にしてダクネスちゃんに向けると、ダクネスちゃんが掴みかかって来たのですりとかわす。

「そういえば、バニルさんとウイズさんが何か話してたような……」
「え？」

「キャンバスがどうか……壊れたら消えるシステムだとか……消える……もしかしたら、その端末も消えたとか？」

「——っ!!」

そうだ。何故今まで気づかなかったのだろうか。

この世から跡形もなく消える——それはあのキャベツの時と同じだ。

触れた瞬間に消えた、キャベツの残骸。もしかしたら……キャンバスを持ち出した天使が端末をキャンバスで生み出し、私と中也の携帯にあんな電話をかけ、端末を壊して消したのではないだろうか。

そこまで考えたところで違和感に気づいた。

「ゆんゆんちゃん……って、バニルとウイズ？って人の力でこつちに来たんでしょ？ でもその時にはバニルは既にこつちの世界にいるはずなだけだな」

「バニルさんは、私達の世界と連絡する手段を持っているみたいですよ。バニルさんがこつちの世界から私達の世界に映像通信をしてくれて、私はその通信をウイズさんと共有していたんです」

バニルにも話を聞いてみた方がいいかもしれない。
「ねえみんな、今私が考えたのはね——」

そして私は皆に仮説を説明した。

もしかしたら、キャンバス天使が私達にあの電話をかけ、端末を壊して消したから逆探知が一切出来ないのではないかということ。

「成程……めぐみんと全く同じことを云っているな」

「……え？」

どうしてここでめぐみんちゃんが出てくるのか、と私とゆんゆんちゃんの視線がダクネスに集まる。

ダクネスは中也に貰って貰ったらしいスマホの画面を私たちに向け、険しい顔で虚空を睨んだ。

「めぐみんからメールだ。『どうにかしてダザイを探し出して連れてきて欲しい、話したいことがある』……と」

第37話 この不幸な少女に幸運を！

正直言つて、怖かった。

友達同士（？）なのに、本気で殺意の応酬が出来るところも。人を殺すという行為に何の疑問も躊躇も抱いていない、その仕事も。

でも——今大事なのは、誰も死なずに問題解決を迎えることだ。

「よう太宰。数時間ぶりだなア」

「……君が莫迦なせいで面倒なことになってしまったじゃないか」

「莫迦は手前もだろ。めぐみんのメールでやっと気づいた癖に」

「私も推理してましたア。何処かの脳筋と違つてね」

そして、相対する五人。

赤い髪の黒帽子の人とオサムさんが火花を散らし、私とめぐみんは互いに慥然とした表情。ダクネスさんはどうすればいいのかわからないような狼狽えた空気を醸し出している。

「ちよ、ちよつと！ 喧嘩はやめてください！」

思わずオサムさんと黒帽子の人の視線の間に割り込んだ。

「ああん？ さつきから思つてたんだが、手前誰だよ」

「私のストーカーですよ」

「めぐみんの馬鹿ああああああああ!! あんたのストーカーなんて誰もしてないわよおおおおおおお！」

「お前らが喧嘩してどうすんだ！」

「そうですよゆんゆん。今は喧嘩などしている場合ではないのです」

「あんたが言い出したんでしようが！」

「ハイハイ、その辺で」

オサムさんと黒帽子の人が私とめぐみんの間に割つて入る。二重仲裁だ。

つていうか、めぐみんの方から呼び出しておいて喧嘩を売ってくるなんて……本当に、昔つかから何も変わらない滅茶苦茶さ。これがめぐみんで、これが私のライバル。それを再認識した瞬間、何だか緊張が

解けた気がした。

「で——めぐみんちゃん。この状況で私と中也を会わせるってことは、君も何か思いついたんじゃないのかな？」

「そうです。私の考えを話しておこうと思ひまして」

そして、めぐみんは重々しい表情で口を開いた。

「異能兵器開発研究所の、極秘異能研究データが何者かによって盗まれたそうなんです。そして、この異能兵器開発研究所っていうのは、マフィアの管轄だそうです」

めぐみんの靴音が路地裏のコンクリートを響かせる。その視線は冷たく落とされたまま動かない。めぐみんのブーツだけが絶え間なく動き続ける。

「オウガイは、この捜査を旧ソウコク——ダザイとチュウヤのコンビ名らしいですけど、その二人に頼もうと考えていたみたいですね。だから今回のデータ盗難は、無敗の旧ソウコクによって片付けられるはずだった」

「——でも、そんな時に、当の二人に殺し合いの命令が来た？」

めぐみんが顔を上げた。整った顔立ちには何の色も無い。ただ、遠くを見つめて澄んでいる。

「研究所のパソコンに侵入した端末は、この世の何処にも無かった。チュウヤに電話を掛けてきた端末も存在しなかった。横浜市内で、壊れると消える物体が頻繁に出現している……」

「めぐみんちゃん……君はまさか、」

「そうですよ。恐らく、全ての元凶は天使です。天使は異能兵器の情報を手に入れ、キャンバスで具現化し、私達四人——いや、もしかしたら横浜ごと消し飛ばすつもりかもしれません」

全員が、沈黙した。私の脳内で、欠けたパズルのピースが綺麗に嵌められていく。

天使の話は聞いている。バニルさん曰く、「青髪芸人達を恨む変な天使のせいで、あちらの世界に危機が迫っているな……厄介極まりない」らしい。つまり、具現化能力を持つその道具（キャンバスかな？）を使って異能兵器を創り出し、カズマさん達に恨みを晴らすってこと

……？

「キャンバスで作りだしたものは、基本、壊したり動作不能にしたりすれば、触れると消える不思議なグッズに変わってしまうんですよね。天使が何で自分で壊さなかったのかは知りませんが、まあ、作り過ぎて壊せなくなったから横浜に放置したとかじゃないんですか」

「最後の推理だけ適当だなオイ」

「とにかく、天使は私達に邪魔されるのが嫌だったから、キャンバスで色々トラブルを起こしたんですよ。あ、変なタコの人も、あの口ぶりからして天使に雇われたんだと思います」

チユウヤと呼ばれている人の冷たい視線を無視して、めぐみんは真剣な表情で息をついた。めぐみんの推理はこれで終わりらしい。

一方、私かというと、この世界に来たばかりだから上手く状況を理解できない部分が多かった。私よりも長い期間こっちに滞在しているめぐみんやダクネスさん、アクアさんやカズマさんはそれなりにこっちに順応していると思うけど、……私には少し難しい。

けれど、分かったことも少しある。

「だとしたら、この殺し合いを止めるためにも、天使を探し出さなきゃいけないんじゃないの？」

「ゆんゆんちゃんの云う通りだよ、めぐみんちゃん。マフィアと探偵社のメンバーを殺すっていうあの電話だけじゃ、どのタイミングでどう殺すのが全く分からない。逆探知できないなら尚更ね。そろそろ本気で天使の対処をしないとまずいと思う」

「だが、どうやって天使を見つけ出すのだ？ 今までだって、かなり本気で天使を探してきたが、ヒントは全く得られなかったぞ」

「期限は三日だ。あまりにも短すぎる。こりゃどうしようもねえな」

私を皮切りに、みんなが口々に意見を述べ始める。けれど、ここに揃ったメンバーだけでは解決は難しそうだ。

誰かの力を借りなきゃいけない。でも、誰に力を借りればいいのかわからない。

絶望的な気分で唇を噛み締めた。

「——待たんかいコラああああ!!」

瞬間、路地の前で急ブレーキをかけ、私達の方を睨みつけてきた人物がいた。

シヨートパンツにラフなティーシャツを着た、銀髪のボーイツユな女の子。

「クリス……!?! 何をしているのだ!」

「え……? あ、あれ? ダクネスにめぐみん、あとその他のお仲間さん。何してんの?」

「あー……手前確か、客船の中で会った……」

どうやら、チュウヤさんとクリスさんは面識があるらしい。それにしても、ダクネスさんの友人であるクリスさんはどうしてここにいるのだろう。っていうか、待たんかいって何……?

「ねえ、聞いてよちよつと! スられたんだけど! 盗賊職のあたしが、変な人にスられちゃったんだけど! こっちに行つた気がしたんだけど見てない?」

「だけどだけどつてうるせえな。誰も見てねえよ……けどどんな奴だ?」ちよつと興味を引かれたらしいチュウヤさんが悪戯っぽい声で尋ねる。クリスさんは頬を膨らませながら、

「なんか、背が低くて、肌が白くて、茶髪で……あと、変だなんて思ったのが、何か強い魔力を感じたところなんだよね。そう。なんでこっちにあんな強い魔力を持つ人がいるのか不思議だっあなあ。それと、電話しながら走ってて、イノウヘイキとか何とか云ってたよ?」

——私たちは顔を見合せた。早速ヒントが転がり込んできた。